世界最後の執事

異世界転生録

アンコール

異端の覇王

4

Rh/Nel Ar, KyelS ele kiss I-Corn.

Zelblight, The Overlord of Maverick

細音啓

Kei Sazane

ふゆの春秋

Haruaki Fuyuno

Illustration

MF文庫J

終わりの世界録（アンコール）

異端の覇王

4

Rh/ Nel Ar,
KyelS ele kiss I-Corn.

Zelblight, The Overlord of Maverick

竜姫キリシェ
伝説の三大姫の
一人である竜姫。
ほぼ無敵だが、
唯一の弱点は船酔い。

大天使フィア
レンの成長を見守る大天使。
女神を超える天界の
真の実力者と噂される。

先代魔王エリーゼ
今は転生して10歳になった
かつての冥界の支配者。
イタズラが大好き。

「いい子だよ。
さあ、楽しい大暴れをはじめよっか！」
伝説の魔獣の咆吼が、
覇都エルメキアを震わせた。

偽英勇レン
伝説の英勇エルラインに
見た目だけそっくりな少年。
強い決意を胸に刻む。

騎士王ゼルブライト
王立七十二特務騎士団（エルメキア・ダスク）の
頂点に立つ、世界最強の男。

「偽英勇。碑文の三賢者がお前をそう呼んでいた。
言い得て妙な渾名というわけだ」

世界の終わりの世界録（アンコール）

4：異端の覇王

細音 啓

MF文庫J

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、配信、送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。また、本作品の内容を無断で改変、改ざん等を行うことも禁止します。
本作品購入時にご承諾いただいた規約により、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
本作品を示すサムネイルなどのイメージ画像は、再ダウンロード時に予告なく変更される場合があります。

本作品は縦書きでレイアウトされています。
また、ご覧になるリーディングシステムにより、表示の差が認められることがあります。

Contents

Prologue

『女神対談』

Page …… 014

Record.1

『聖地で一休み ー姫と聖女と偽英勇とー』

Page …… 021

Secret Record

『予見者たち』

Page …… 065

Record.2

『覇都』

Page …… 071

Record.3

『突入、そして衝突』

Page …… 125

Record.4

『触れられざるもの』

Page …… 170

Record.5

『異端の覇王ゼルブライト』

Page …… 243

Record.6

『英勇の資格』

Page …… 280

Continued

『残されたもの』

Page …… 300

Rh/Nel Ar, KyelS ele-kiss I-Corn.

Zelbright, The Overlord of Maverick

Contents

Prologue『女神対談』

Record.1『聖地で一休み　―姫と聖女と偽英勇と―』

Secret Record『予見者たち』

Record.2『覇都』

Record.3『突入、そして衝突』

Record.4『触れられざるもの』

Record.5『異端の覇王ゼルブライト』

Record.6『英勇の資格』

Continued『残されたもの』

CHARACTER
キャラクター

旅団：「再来の騎士」構成メンバー

◎レン Ren

「偽英勇」と呼ばれる少年。キリシェに誘われ「世界録」を探しに旅立つ。

◎キリシェ Kyelse

300年ぶりに封印から目覚めた伝説の竜姫。エルラインたちと共に世界を救った。

◎フィア Fear

天界最強と謳われる大天使で、伝説の三大姫の一人。

◎エリーゼ Elise

冥界の支配者だった先代魔王その人。今は転生によって10歳児相当の姿に。

STORY
ストーリー

英勇（えいゆう）エルラインが遺した至宝「世界録（アンコール）」の在り処を世界中の国や旅団（パーティ）が探し求める時代――「偽英勇」とバカにされる少年レンは、伝説の三大姫（竜姫キリシェ、大天使フィア、先代魔王エリーゼ）と共に旅団「再来の騎士」を結成し、世界録を探しに旅立つ。炎の将魔を倒し、一躍世界中に知れ渡ったレンたちは、そのまま竜の秘境リ・インファリエルで竜帝カルラも撃破。続けて「終焉の地」の封印を解除するため訪れた天界で、侵略を画策する世界最大の旅団「王立七十二特務騎士団（エルメキア・ダスク）」を天使たちと共に食い止め、女神レスフレーゼに認められる。直後、女神の手違いで単身聖地カナンへと飛ばされたレンは、聖女エリエスと邂逅。五大災と謎の強敵の襲撃のなかで、生涯の誓いを立て、覚醒と共に難局を乗り切るのだった。

KEYWORD
用語

【英勇（えいゆう）】

かつて歴史上で剣帝エルラインのみに与えられた世界を救った者の称号。世界録を見つけだした者にその2代目の栄誉を与えられると国家間で決められている。

【世界録（アンコール）】

伝説の英勇エルラインが遺した至宝。世界の終焉と再来の秘密が記された手記。手にした者が世界の覇権を握ると言われ、世界中の国家や旅団（パーティ）がその在処を求めている。

【旅団（パーティ）】

この世のとこかにある世界録を探すことを主目的に結成された、武装した旅行者の一団。その役割は財宝の探索や徊獣の討伐、都市の警備など多岐にわたり、「王立七十二階位特務騎士団」など国家公認となっている集団も存在する。

【剣帝エルライン】

かつて竜姫と大天使と魔王を引きつれて世界を救った伝説の剣士。世界滅亡の危機である「終焉戦争」を鎮め、歴史上ただ一人「英勇」の称号を持つ。26歳で没するまでに世界中を旅し、最後に「世界録」を世に託した。

【旅団の構成技能（タイプ）】

[騎士（マスター）]剣や斧といった武装を使用。常に近接戦闘を求められるがゆえに危険（リスク）高く、卓越した技能（タイプ）と冷静な判断が求められ、チームの「主力（マスター）」とされる。

[法術士（アリア）]悪魔の用いる呪術・攻撃用法術を、複雑な儀式により人間の身で再現する。

[精霊使い（スピリット）]精霊の力を宿した精霊具を利用して法術を使用する。

[武闘者（フルタイプ）]防御法術と肉体活性を併用したうえで、自らの肉体と闘技のみで敵を討つ近接特化戦闘員。武器や鎧の強度に依存しないという強みをもつ反面、非常に多くの素養と修練を必要とすることから「全能（フルタイプ）」と称される。

[結界士（エンチャンター）]隠蔽、封印、遮断、加護など天使の得意とする法術を使役する。

[療法士（ヒーラー）]肉体活性や蘇生法術のほか、薬学、医学の知識も求められる技能（タイプ）。

[狩人（ハンター）]害獣に関する様々な知識を活かして狩猟する知識系戦闘員。遠距離からの射撃特化で旅団（パーティ）の戦闘を後方から支援する。

[探索士（シーフ）]旅団（パーティ）の頭脳担当で、分野としては考古学者に近い。過去の古代遺跡の調査情報をもとに、そこに仕掛けられた罠や隠し通路を探知する技術が求められる。

“――世界録を発見した者に、歴史上二人目となる「英勇」の称号を授与する”

世界連合協議会　議事録より

WORLD
世界概要

口絵・本文イラスト：ふゆの春秋

Prologue 女神対談

天界シオ・シャルニエ・ルー。

それは、光り輝く雲海（うんかい）がどこまでも広がる世界だった。

地上の大地にかわって、虹色（にじいろ）の雲海が綿のように固まって足下を形成。踏みこめばわずかに弾みを感じ、確かな硬質の感触がある。

宝石のように煌（きら）めく果実のなる樹（き）。

すぐ横には、さらさらと流れる天の小川が雲の果てまで続いている。

理想郷。桃源郷。そして楽園。

かつて天界に迷いこんだ冒険家たちは、この情景を思い思いの詩文で表現し、あるいは自ら絵筆を取って楽園の美しさを再現しようと挑戦してきた。

だが同時に、過去の冒険者たちは警告する。

ここ天空の楽園は天使たちの楽園であり、人間の楽園ではないのだと。

――待ち受ける天使の審判。

――天界に棲（す）む門の聖獣（ガーゴイル）や有翼像（キマイラ）といった聖獣（せいじゅう）たちの脅威（きょうい）。

こうした試練（しれん）を乗り越えた者だけが、天界を歩む権利を得ることができる。

そして今。

この険しき秘境（ひきょう）へ、まるで散歩の途中といった様子で悠々と昇ってきた来訪者がいた。

「……まったく。久々に顔を出したと思ったら」

天界の中心『熾天の園（してんのその）』。

緑の蔓（つる）に覆（おお）われた神々しき白亜（はくあ）の神殿。白と緑の対比に彩（いろど）られたその大広間で、幼げな少女が長椅子に腰かけた恰好（かっこう）で溜息（ためいき）をついた。

「天界の主（あるじ）たる妾（わらわ）に『おねだり』ときたか」

「はい。僕も色々と考えたのですが、やっぱり女神様（レスフレーゼ）のお力を借りるのが一番かなと」

「……やれやれ。剣帝以来じゃな。妾を前に、こうも腹の据わった人間は」

外向きにはねた蜜色の髪を手で梳く少女。

女神レスフレーゼ。

その容姿は、一見すれば女神と呼ぶには迫力に欠けるものだった。

外向きにはねた蜜色の短髪に、幼げな相貌。座っているので背丈はわかりにくいが、見た目の年頃はせいぜい十歳を少し過ぎた程度だろう。

淡い薄緑の刺繍で彩られた天衣も、小柄な体型に合わせた作り。

何より、他の天使の背中に生えた純白の翼が彼女には存在しない。全天使の頂点としては不似合いにも見える。

一方で、そんな女神レスフレーゼの特徴はその双眸だ。

――世にも珍しい光彩異色。

――どこまでも深く鮮やかな蒼穹色と、燃え上がる天を映しだすような熾天色。

天上の赤と青とを湛えた双眸。

それがレスフレーゼという女神を示す最大の象徴だろう。

「シオン、それがお主らしさでもあるがな。それで話は、熾天の園にある審門を使って、覇都エルメキアに転移したいということじゃったな？」

「お願いできると嬉しいです」

シオン、そう呼ばれた剣士が無垢な微笑でそう返す。

まだ若い。女神の容姿が十代前半であるのに対し、こちらも二十代前半だろう。

絹糸のように流れる金髪に、印象的な紫の瞳。

凛々しくもどこか中性的な雰囲気の相貌に、人なつこい穏和な微笑を湛えた剣士だった。

しかし剣士らしい装備といえば背部に取りつけた双剣のみ。身にまとう衣服はおよそ剣士の甲冑からかけ離れた、蒼碧色の旅装束風の外套だ。

――剣聖シオン。

現代最高峰の旅団『精霊の調べ』を率いる剣士。

世界中で数多の秘境を巡ってきた冒険者であり、覇都の騎士Eゼルブライトと最強の座を争う若き天才剣士としても名高い。

「しかし船を使わず、わざわざ天界の審門から転移する理由は？　お主のことじゃ、ただ単にその方が

早いという理由ではなかろう」

「覇都エルメキアは、人間世界でもっとも巨大な軍事都市です」

穏やかな声音で答える剣聖。

「覇都は、世界中の港に諜報員を忍ばせています。覇都に向かう船を常に監視し、彼らの警戒する旅団が乗船すれば、たちどころに覇都へと報告されてしまう。普段なら気に留めないのですが、今度ばかりは目的が目的ですから」

「覇都へ忍びこむわけか？」

「人聞きの悪い。こっそり覇都を調査するだけですよ。城の中の見学です」

子供っぽい苦笑の息をこぼす金髪の青年。

「そのようなわけで、女神様の自慢の審門をお借りしたいなあと」

「まったく……天界の審門はあくまで審判の扉であって、便利な転移装置ではないのだぞ。それに、本来なら人間のイザコザなど無関心というのが天使の立場だというのに」

やや呆れた様子で腕組みする少女。

が、そんな仕草もほどほどに——

「まあよい。今度ばかりは特別じゃ」

神妙な面持ちながら女神レスフレーゼは力強く首肯してみせた。

「先日、あの覇都の旅団……王立七十二階位特務騎士団と言ったか。あの部隊が無礼にも天界に攻めこんできおったからな。あのような蛮行に対して、どう罰を与えてやろうかと思っていたところじゃ。覇都まで送ってやるから連中を叩きのめしてこい」

「いや、ですからちょっとした偵察程度ですよ」

「なに？　なんだつまらん。もっとこう、激しく火花を散らすのが妾の好みなのに。……さておき、妾が手を貸したということは秘密じゃぞ。お主だから承諾したのであって、他の人間にまでこんな協力をするわけではないからの」

「感謝します。あと、僕の仲間も外に待機していますので」

「わかっておる。旅団『精霊の調べ』の面々を送れということじゃろう。人数に関しては問題ない。ふむ、あと言っておくことがあるとすれば」

七本の巨大な円柱。

この広間を囲むかたちで天井へと延びる柱の、その一本を少女が指さした。

「審門で転移できるのは覇都に近い森林までじゃ。昔は覇都のすぐ脇に設置していた審門もあったが、

以前に発見されて壊されてしまった」

「天使が審門経由で覇都を襲撃する。そんな可能性を恐れてのことでしょうね」

「だが、誰にでも容易くできる芸当ではないぞ？」

　光彩異色の少女。

　その右目――熾天色に輝く瞳がわずかに輝きを増して。

「お主も知ってのとおり、審門は隠蔽法術で隠しておる。天使の法術を察知するだけでも人間には容易でない。さらに審門破壊。これも天使の結界法術を突破しないかぎりできないのじゃが」

「用心しろと」

「うむ。あの覇都という地、天使の目から見てもちと雰囲気が違う。あの都に何が潜んでいるかわからんぞ」

　地上の竜、冥界の悪魔と共に高位存在として知られる天使。

　その全天使を束ねる天界の女神が、押し殺した口調でそう告げた。

「しかしシオン、お主が動くのは意外じゃった。お主こそ、他の旅団の動向など一切気にしない男かと思っておったが」

「僕も、今度ばかりが特別なだけですよ」

　白亜の天井。

　熾天の園の広間を見上げる剣聖の声は、楽しげに弾んでいた。

「レンという人物、ご存じですか？」

「おお、あやつか。知ってるも何も、ついこの前ここを訪れたぞ」

　椅子の上で手を打つ女神。

「気になるのう。お主がレンの何を気に掛けているのか」

「いえいえ、まずは会うのが楽しみなだけですよ。彼は必ず覇都に向かう。女神様の言うとおり、覇都エルメキアは不気味な都市です。僕もまだ全容を把握しきれていない。いわば得体の知れない怪物がひしめく魔境そのもの。あの地に足を踏み入れた彼が何を感じ、そして何を選択するのか。それを見届けたいから」

「ほう？」

「気になるなら、ちゃんと女神様にも後で報告しますよ」

　興味ありげに、長椅子の上から身を乗り出す少女。

　そんな幼げな仕草を微笑で見守って、剣聖シオンは肩をすくめてみせた。

Record.1　聖地で一休み　―姫と聖女と偽英勇と―

1

「退屈だ……」

　薄地の寝間着（ネグリジエ）を羽織（は お）った姿で、少女がベッドの上を転がっていく。

「すぐ覇都とやらに行くかと思って勇んでいたのに、カナン巡礼聖教船（じゅんれいせいきょうせん）とやらの賓客室（ゲストルーム）で一週間も待ちぼうけとは……刺激に欠ける……」

　溜息（ためいき）まじりの口調でそう呟（つぶや）いたのは、煌（きら）めく銀髪が印象的な少女だった。

　海よりも深い緑玉色（エメラルドグリーン）の瞳（ひとみ）に、童話の妖精のように儚くも愛らしい面立ち。旅装束に身を包んだ華奢な肢体（よう せい）も、可憐（はかな）というほか表現のしようがない。

　キリシェ――すべての竜種の頂点に立つ竜の姫（たびしょうぞく）だ。

　そんな彼女が、今はそうした威厳（きやしや）もどこへやら、ベッドに寝転がってしきりにこちらを見つめている。

「レン」

「なにさ？」

「何か隠し芸の一つでも披露してほしい。このままでは私が退屈でどうしようもない」

「俺、そういう芸とかまるきりダメなんだって。美術も音楽も赤点だったし」

　キリシェに向かって肩をすくめ、レンは首を横にふってみせた。

　レン＝E・マクスウェル。

　明るい茶の髪を無造作に切った髪型に、赤を帯びた茶の瞳（ひとみ）。ほどほどに整った顔だちながら、まだ初々（うい）しさも残る素朴（そぼく）な表情の少年だ。

「あと一応言っておくけど、この一週間はちゃんと意味のある療養（りょうよう）期間だから。俺、医者からも身体（からだ）を休めろって言われてたし」

「む、それはそうだな」

「でもちょっと意外だよ。ほら、前にも俺に歌が歌えるか聞いてきたことあったろ。竜が歌好きって初耳だったからさ」

「甘く見てもらっては困る。歌の一つくらい嗜むのが大人の竜というものだ」

　ベッドの上であぐら座りになるキリシェ。

　彼女が身を起こしたはずみに、めくれあがる薄地の寝間着。わずかにはだけた衣服から華奢な腰回りとお臍がこっそり見え隠れてして――

「レンどうした？」

「い、いや何でもないよ……！」

　首をかしげるキリシェから慌てて目をそらした。

　単にお腹まわりの寝間着がめくれて肌が見えているだけ。目を覆うほど恥ずかしい露出という程でもないのだが、凝視もできず、かといって指摘もしづらい絶妙なところだ。

「それはともかく竜の歌って？」

「うむ。歌うことで周りの獣たちが片っ端から逃げていく。同胞の間では、もっぱら自分の縄張りを主張する時に使うぞ」

「ただの威嚇の咆吼じゃん!?」

「そんなことはない。それはそれは美しい歌なんだから！」

　自慢げに胸を張るキリシェ。

「特にわたしの歌は竜の渓谷でも有名だぞ。カルラからも『キリシェお姉様の歌は、同胞たちの中でも最高の歌唱力ですわ』と絶賛されたほどだ」

「歌唱力？」

「そう、歌唱力。つまり歌の力そのものだ。わたしの歌声をもってすれば、この建物とて五秒とかからず砂と塵に分解できる」

「それ破壊力だから!?　歌唱力じゃないから！」

「……違うのか？」

　不思議そうにキリシェが瞬きをくり返す。

「ならば証拠に一曲」

「歌うな！　絶対にここで歌うなよ!?」

　キリシェの口をすぐさま全力で塞ぎこむ。

「……むぅ。人間の感覚は難しい」

「俺には竜の感覚の方が訳わからないって」

　不思議そうな上目遣いのキリシェから手を離し、レンは大きく息を吐いた。

「そんなことはありませんわ。天使の歌も、人間の歌とほぼ同じです。人間の作曲した歌のいくつかは、天界でも歌われるほど天使たちに浸透していますし」

「悪魔も同じだね。あたしも機嫌がいい時は鼻歌くらい口ずさむし」

　そう答えたのは、レンの背中側に座る少女二人だ。

　大天使フィアと先代魔王エリーゼ。

　キリシェと同じく、三百年前には英勇エルラインと共に終焉戦争を鎮めた三大姫たち。

　人間世界でも伝説として謳われている彼女たち。だがそんな逸話はさておき、肝心の彼女たちはベッド上で暢気にカードゲームの対戦中らしい。

　らしい——という表現は、レンが一度も彼女たちの方へふり返っていないからだ。

「エリーゼ、それ偽札ですわ」

「えー？　なんでいつもバレちゃうのかなあ。フィアったらズルしてない？」

「表情ですよ。エリーゼってば偽札を切る時が一番嬉しそうですから」

「……あー。そりゃバレるか」

　大人びたフィアの声音と、エリーゼの溜息。

「さて一勝負つきました。キリもいいので、レンも一緒にどうですか？」

「そーだよ。レンも一緒にやろうよ」

「いや俺は……」

「あら、水くさいですわ。聖フィオラ旅学園を発ってからずっと旅の連続で、せっかくの休養なのに。こうして親睦を深めるのも大事ですよ」

　すっと誰かが背後に立つ気配。

　と思いきや、その誰かが有無を言わさずにレンの背中に抱きついてきた。

　ふわりと香る甘い匂い。

　そして何より、背中に押しつけられた双つの柔らかくて圧倒的な重量感は——

「ねえレン？　遊びましょうよ」

「だ、だから！　フィア先輩が着替えてくれたら考えるって！」

　椅子から立ち上がるや、くっついてくるフィアから後ずさる。

　ふり向いた先。穏やかな微笑と淡い金髪とが似合う見目麗しい彼女を、なるべく直視しないように目

をそらしつつ。
「その恰好……」
「ごくごく一般的な服ですわ」
　胸元が大きく開いた寝間着姿の大天使。
　襟元から覗く薄紅色の谷間と、華奢な細い肩と首筋から鎖骨にかけての線。怪しげな微笑もあいまって、天使というより妖艶な魔女と喩えたくなる艶姿だ。
「もう昼時だけど先輩は着替えないの？」
「羽伸ばしですよ。せっかくカナン巡礼聖教船から素敵な賓客室を提供してもらったのですから、くつろぎたくもなりますわ。それにエリーゼだって昨夜の服のままですし」
「いや、エリーゼは――」
「アタシはどっかの大天使みたいに、そんなえっちな姿じゃないよ」
　そう答えたのは、褐色の肌と快活な笑顔が印象的な幼女だ。
　手元のカードを慣れた手つきで混ぜ合わせする先代魔王エリーゼ。冥界の主であった彼女だが、今は子犬の着ぐるみにすっぽりと身を包んでいる。
「威厳は大切ですわ。現魔王や五大災が見たら悲しみますよ？」
「平気だもん。アタシが犬好きなのは冥界でも有名だし」
　子犬の着ぐるみ姿で腕組みするエリーゼ。
　ちなみにレンの知るかぎり、エリーゼは二日前からずっとこの着ぐるみ姿だ。ここ聖地カナンの衣装店で見つけたものを気に入って衝動買いしたらしい。
「どうレン？　可愛いかな？」
「ああ。もうこれで二十回目くらいの返事だけど。でもエリーゼが犬好きっていうのは、初めて知ったよ」
「上位悪魔は、魔獣を使い魔として従えることが多いからな」
　ベッドの上で転がり続けながら、キリシェ。
「たとえば五大災は、全員が自分の使い魔を従えている。部下が使い魔を従えているのだから、魔王だったエリーゼが魔獣を従えていてもおかしくないだろう」
「……もしやエリーゼの使い魔って、その着ぐるみの犬に似てる？」
「おお、鋭いねレン。実はそうなの！」
　嬉しそうにエリーゼがベッドから跳ね起きる。
「いやぁ懐かしいよ。アイツ元気にしてるかな。最近は冥界にも顔出してないし」

「俺も知ってる種族の使い魔？」

「三頭の冥犬（ケルベロス）」

「伝説級の魔獣じゃんか!?」

広大な冥界でも一、二を争う知名度を誇（ほこ）る魔獣だ。

地獄の門番とも魔王城の番犬とも言われているが、実際にその姿を見た旅団は歴史上でも数えるほどしかない。それでもなお圧倒的な知名度を誇（ほこ）るのは、三頭の冥犬（ケルベロス）がそれほどまでに危険極まりない魔獣だからだ。

一説では、上位悪魔さえ三頭の冥犬（ケルベロス）の縄張りは恐れて避けると言われている。

「え、冗談……じゃないよな。本当にあの三頭の冥犬（ケルベロス）？」

「そうだよ。アイツは捕まえるの苦労したなぁ。強引に使い魔の契約をしたはいいけど、隙（すき）を見せたらすぐ牙剥（きばむ）いて襲いかかってくるの。どんなに愛情かけても飼い犬には成り下がらないんだよね。そこが可愛（かわい）いんだけど」

着ぐるみ姿のまま賓客室（ゲストルーム）を歩き回るエリーゼ。

と思いきや、部屋の窓から外の様子を見下ろして手招きして。

「ねねレン、それよりこっちおいでよ。外が賑（にぎ）やか」

「あ、それ俺も気になってたんだ。なんか朝からすごい楽しそうだからさ」

エリーゼの隣で、レンも外の光景を見下ろした。

精霊信仰の聖地（せいち）として世界的に名高いカナンだが、つい昨日までは水を打ったように静まりかえり、外にも人影がほとんど見あたらなくなっていた。

それが今日の大通りは朝から人々であふれかえり、出店や飲食店に並ぶ人の列が路地裏まで続いているありさまだ。

「なんだろうな」

「礼拝期が明けたのよ」

リン、と響く鈴の音。

それから一拍分の間を空けて扉が開いていく。

「精霊信仰の慣習で、労働も外出も控えてお祈りする期間なの。その間は食事も会話もなるべく慎（つつし）むことになってるから、自然と外も静かだったというわけ」

扉の向こうに立っていたのは、金色の法衣（ほうえ）を羽織（はお）った少女だった。

年齢は十七で、ちょうど自分（レン）と同い年。

愛らしい表情ながらも濃緑色の双眸に凛とした気高さを湛えており、ステンドグラスを通した光を浴びて輝く瑠璃色の髪が印象的だ。

「礼拝期か。だからエリエスの姿も見えなかったんだ」

「賓客を放っておいたのは悪かったけど、聖地だとすごく大切な行事なの。普段は礼拝に来られない信徒もお祈りに来てくれるから……ごめんなさいね」

申し訳なさそうに照れ笑いを浮かべる彼女。

――聖エリエス。

聖地カナンで精霊信仰の聖女として敬われている少女だ。その発端は精霊召喚、すなわち失われた術式たる古代召喚術の力を持って生まれたことに由来する。

「ところで、出かける用意はいいかしら？」

「え」

「賓客をもてなすのも役目の一つよ。私からすれば、あなたたちは命の恩人だもの。歓迎するのだって部下任せは良くないでしょ？」

いたずらっぽく片目をつむってエリエスがウィンク。

「聖地、案内してくれるってこと？」

「そういうことだ。エリエス様自らが聖地を案内など過去に例がない……くれぐれも無礼のないようにな」

聖女の背後に控えていた剃髪の偉丈夫が口早に一言。

武闘家タイラス。最高位の女性術士たちで構成されるカナン巡礼聖教船において、その卓越した武技を見こまれて幹部として抜擢された男だ。

「とはいえ聖地を巡るには良い時期だろう。礼拝期が終わって聖地が活気に満ちている。出店や武器工房も、ほとんどの店が開店しているはずだ。観光として歩くだけでも十分に修学になる」

「ありがとう。じゃあさっそくキリシェもフィア先輩もエリーゼも出かけ……」

言いかけた言葉を半ばで止めて。

レンは、後ろの三人にふり向いた状態で溜息をついた。

「……出かける前に、その恰好を何とかしてもらっていいかな」

暇任せにベッドを転がり続けたせいで、すっかり寝間着のはだけたキリシェ。

子犬をデザインした着ぐるみ姿のエリーゼ。

フィアにいたっては、もはや寝間着なのか下着なのかもわからない艶姿だ。

「ほら見ろフィア。お前がそんなだらしない恰好しているから」

「あら、私の寝間着は歴とした高級品ですわ。むしろエリーゼの恰好の方が子供っぽくて、私たちの威厳が台無しですし」

「やれやれ……この着ぐるみの可愛らしさがわからないかなあ。ていうかキリシェだって、さっきからお腹とお臍が丸見えだよ？」

　口々に責任を押しつけあう竜と大天使と先代魔王。

　いや、三人ともだから。

　そう言いたい気持ちをぐっと堪えて、レンはエリエスへと向きなおった。

「ねえレン。あの三人って本当に伝説の姫たちなのよね？」

「……俺が聞きたい」

　はんぶん呆然とした表情のエリエスにそう答え、レンは扉の向こうを指さした。

「まだ時間かかりそうだし、仕方ないから俺一人で行くよ」

2

　聖地カナン。

　精霊信仰の一大拠点として知られるその都は、アルカナ大陸の南海岸沿いに栄えた都市として知られている。

　アルカナ大陸――通称『熱砂の大陸』。

　大地の実に四割が、赤みを帯びた砂漠によって占められた大陸だ。太陽に熱された砂漠の風が吹きこんで、このカナンもまた一年を通して灼熱の気候に包まれている。

　痛いとすら感じるほど鋭い日射しの中で。

「やっぱり外に出ると暑いな。エリエスは、そんな服装で暑くないの？」

「暑いわよ」

　レンの隣を歩くエリエスが間髪入れず頷いた。

　聖女としての金色の法衣ではなく、今は質素な黄土色のローブ姿。それも頭を覆うフードで顔の上半分を隠した恰好だ。

直射日光は遮れるだろうが、ローブの内側は相当に蒸し暑いはず。

「滅多にとれない私的な時間だもの。信徒に見られて大騒ぎになっちゃうのはご免よ」

「お忍び用の恰好ってことか」

「ええ。でもこの人出だし、さすがに誰も私たちを気に留めてないでしょうね。ぼうっとしてると自分が人波に流されちゃうから」

路地を埋めつくす雑踏。

通りの両脇には、礼拝期を終えた露天商がところ狭しと店を構える光景。そしてそこに並ぶのが家族連れや観光客、そして旅団と思しき重装備の者たちだ。

「あ……レン待って」

「なに？」

「ちょっと買い物。いいもの見つけちゃった」

人だかりをかきわけて露天へと小走りに走っていく彼女。と思いきや、早々に二つの紙コップを受け取って戻ってきた。

「まだこのジュースは飲んでないでしょ？」

「……たぶん初めてだと思う。なにこれ、赤色のジュース？」

受け取った紙コップを覗きこむ。半透明の赤色をした飲料物。何かの果物の果汁というのは予測できるが、赤色の果汁というのはレンも初めてだ。

「飲んでみて」

「じゃあ遠慮なく……って、酸っぱ!?」

一口飲んだ瞬間、思わず咳き込むほどの酸味に悲鳴が出た。

何かの毒物？　エリエスから渡されたものでなければ、口に含んだジュースをそのまま噴きだしていたところだ。

「エリエス、これ腐ってたりしない？」

「北の砂漠で採れる赤レモンのジュース。これでも甘い方よ。夏バテ対策と疲労回復に効くの。昔は気付薬にも使われてたらしいわ」

「気付薬？　確かに、この酸っぱさなら嫌でも目を覚ましそうだけどさ……」

平然と赤レモンのジュースに口をつけるエリエス。地元の民である彼女には慣れた味なのだろうが、初体験であるレンには刺激の強すぎる酸味だ。

……キリシェとかエリーゼなら好きそうだよな。

……刺激物全般、大好物って言ってたし。

キリシェとエリーゼ曰く、普通のカレーと猛毒入りカレーでは、猛毒入りカレーの方が刺激があって美味しいらしい。

逆に言えば、そんな彼女たちが気に入るであろうほど凄まじい味わいだ。

「無理に飲まなくてもいいわよ？」

「い、いや……せっかくの体験だから飲むよ……けほっ！　き、きつい」

「あ、すごいわね。赤レモンのジュース、初挑戦で全部飲みきったんだ？　プルミエールなんて最初の一口飲んで泣きだしちゃったくらいなのに」

「気持ちはわかるよ……」

楽しそうに声を弾ませる少女。

フードの下からあどけない笑顔を覗かせながら。

「次はどれがいいかしら。せっかくだからココにしかない名産がいいわよね。この地方は暑いから食べ物がすぐに腐っちゃうの。だから長持ちさせるために乾燥させたドライフルーツが昔から有名よ。美味しいし、日持ちもするからお土産にできるわ。あとはお店ね、良いお店を選ばないと」

「……楽しそうで何より」

「楽しいわ。だって、こうして自由に外を回れるのって一年ぶりくらいだもの」

「一年ぶり!?」

「それ以外は全部お供付きよ。決められた時間に決められた道を通って、決められた店に入って買い物をするだけ。その買い物だってネビリムが許してくれなきゃ買っちゃいけないの。子供みたいでしょ？」

歩きながら苦笑をこぼす少女。

ネビリムというのは最高位の女性治癒士だ。旅団『カナン巡礼聖教船』における一等星、すなわち最高幹部。同時にエリエスの側近でもある。

――それが聖女。

――精霊信仰の地で生まれた古代詠唱士の宿命。

それほどまでにエリエスという少女が聖地にとって重要であるというのが伝わる反面、エリエス自身の苦悩も同時に伝わってくる。そんな一言だ。

「でも、その分だけ自由のありがたみがわかるわ。だからレンが来てくれて二重の意味で感謝してるの。精霊の声が聞こえる仲間に会えて、それに今こうして道案内で外に出ることもできたでしょ。こんなの滅多にないもの」

「……そっか」

道案内する。

聖地を巡って面白いと自分（レン）が感じるように、彼女の「楽しい」という発言もまた心の底からの本音なのだろう。

「聖女でいるのって大変そうだけど」

「慣れたわ。それに前にも言ったけど、精霊を召喚できるようになるまでは、精霊の声が聞こえるって言っても誰も信じてくれなかったから。変人扱いされてた子供の時よりは、みんなから聖女様って言われる今の方がマシでしょ？」

「ま、まあそれは確かに……」

「あとはそうね。せっかくだから一番占い礼拝堂（れいはいどう）も案内するわ。精霊信仰の発祥（きげん）の地の、起源みたいな場所よ」

「そんなのあるんだ？」

「ええ、レンも知っておいて損はないわ。見た目は古ぼけた建物だけど、お気に入りの場所でもあるの」

スキップ調で歩きだすエリエス。

とっておきの秘密の場所を披露する子供のように。

「ちょっと距離があるから近道するわ」

そう言って日の当たらぬ路地裏へと進んでいく。

背後の喧噪から遠ざかるように建物と建物の隙間へ。天井がドーム型になっている建物が連なる景色を見上げながら、レンはエリエスの後ろを追いかけた。

都市の外れへ。

聖地の中心であるカナン大聖堂を通りすぎ、さらに人波とは逆の方へと進んでいく。

「なんだか静かになってきたけど」

「商業区は後ろよ。ここはもう、老朽化して使われなくなった礼拝堂しか残ってないわ。文化遺跡として保全はしてるけど、精霊信仰の信徒でも訪れる者は少ないわ。私だって公式行事で訪れるのは年に一度の参拝だけだから」

路地裏から公道へ。

あれだけの雑踏にあふれかえっていた道が、今は水を打ったような静寂に包まれている。それもただの静けさではなく、どこか厳かで緊張感を覚える静けさだ。

「ここよ」

エリエスが見上げたのは、道の終点にひっそりと佇む古寺院だった。

石材を切りだして建てられた石造りの礼拝堂。煉瓦を積み上げて造られた塀は半分以上崩れ落ちて、敷地内は雑草が生い茂っている。

「止まれ！　ここは特別管理の――」

「私です」

甲冑姿の門番が言い終えるより先、エリエスがばさりとフードを外してみせる。

露わになる素顔。

「エ、エリエス様!?」

「巡回の一環で老朽施設の確認に来ました。通っていいかしら」

「は、はい！　申し訳ありませんでした！」

半壊した門から慌てて後ずさる門番。

それを後目に、何事もなかったかのように敷地へと進んでいく少女。

石造りの礼拝堂入り口へ。わずかに漂う埃と黴の匂い。レンが入った礼拝堂の通路は、ほんのりと冷たく湿った空気に満ちていた。

「……意外と明るいんだな」

「ええ。天井の大穴からの日射しよ。何十年も前にはステンドグラスがあったらしいけど、もう全部割れちゃってただの空洞。おかげで風通しは良くなったわ」

フードを外したまま進んでいくエリエス。

礼拝堂。

かつて色鮮やかなステンドグラスに彩られていた窓はただの空洞と化し、並んでいたであろう机も椅子も祭壇も、すべて時の流れとともに風化してしまったのだろう。

何もかもが消え去った礼拝堂。

その中でただ一つ。

レンの見上げる正面の壁際に、人間大の石像が埃をかぶって佇んでいた。

――翼の生えた少女の像。

――掲げた右手に、何か果実のようなものを握りしめている。

「精霊の姫。そう呼ばれて奉られていた精霊の像よ。少女に羽が生えた姿だから、天界の天使に似てるでしょう？　だから天使と区別をつけるために、こっちの方を『真天使』だなんて呼ぶ説もあるの」

同じく像を見上げるエリエス。

「すべての精霊を従える姫。転じて、世界の均衡そのものを象徴する存在だなんて、そんな大げさなことを言う学者もいるわ」

「そんな精霊の主みたいなのがいるんだ……？」

精霊は、いまだその多くが謎に包まれた存在だ。

分かっているのは、精霊と呼ばれるものが完全なる霊的波動体であるということ。

高位存在と呼ばれる天使や悪魔、竜ですら肉体という軛に囚われ、その肉体が滅びれば自らも滅びてしまうのに対し、精霊だけは違う。

この世界で唯一例外的に、肉体の軛から解きはなたれた純粋な霊的波動体。

どうして存在を保っていられるのか、どうやって生まれ、消えていくのかは誰にもわからない。

……その精霊たちの王だなんて。

……俺も精霊信仰に詳しいわけじゃないけど、聞いたこともなかった。

「この女の子が？」

「精霊信仰の中でも一番古い聖典に記されている存在よ。ほら、像の足下に小さな碑文があるでしょ。それが『彼女』の名前」

「これが？　でも擦れて……」

碑文に残された名前。だが目をみはっても、名前の表記が剣のような何かでえぐり取られているせいで読みとれない。

「レンも知ってる名前よ」

「俺が？」

「現代は精霊信仰っていうと聖地カナンが有名でしょ。でも昔は世界中に精霊信仰の礼拝堂があったの。その教義の名残は今も各地の都市に残ってるわ。だからレンも聞いたことのある名前のはず。そもそもレンの通ってた旅団養成機関が――」

エリエスがそう言いかけた矢先。

不意に、一陣の旋風が礼拝堂を駆けぬけた。

「風の始原精霊!?」

碧色の羽根が特徴的な精霊だ。

大気と同化するようにほぼ透明で、目を凝らしても陽炎のようにおぼろげな姿しか見えない小人。それがエリエスの頭上に前触れなく顕現していた。

「お気に入りの場所って言ったでしょ。でもそれは私じゃなくて、ここを気に入ってるのは精霊の方なの。精霊の住処に似た雰囲気なのかしらね」

「ここが……」

頭上を見上げたレンとほぼ同時。

視界の端に、赤い光の発光体がぼんやりと浮かびあがった。

「火の始原精霊。それに土の始原精霊も？」

『来チャッタ！』

嬉しそうに跳びはねながら、茶褐色のフードをかぶった土の始原精霊が足首にしがみついてくる。まるでじゃれつく子猫のようだが、歴とした精霊だ。

そしてもう一体。

レンの肩に止まって頬(ほお)にすり寄っているのは、翼を持つ灼熱色(しゃくねつ)の火蜥蜴(とかげ)。

「お前らもこの場所が好きなの？」

『ココ、好キ！』

『……好キ』

頷(うなず)きあう精霊二体。

レンに身を寄せながらも、火の始原精霊(サラマンダー)と土の始原精霊(ノーム)が見つめる先は、レンの正面に設置された少女の像だった。

つまりは、この像に愛着を感じたから顕現してきた？

「なあエリエス、この少女の像って本当に伝説どおりなのかな」

「精霊の姫は、まだ実在が確認できてないわ」

風の始原精霊(シルフ)を手のひらに乗せながら少女が首を横に振る。

「精霊の姫なんていうのがいるとしたら、私やあなたがとっくにその声を聞いているはずでしょ？　だけど私はそんな声一回も聞いたことがない。現代で言われてるのは、過去の古代詠唱士(エイシエンター)が神格化されて崇拝されたものじゃないかって説よ」

「ああ、なるほど……」

現代における英勇(えいゆう)エルラインのようなものだ。

聖フィオラ旅学園のように、旅団養成機関には必ずといっていいほど彼の銅像と肖像画が用意されている。

「エリエスも、いつか聖女としてこんな像が作られるのかな」

「お婆(ばあ)ちゃんになる前に作ってほしいわね。……なんて冗談はともかく、真面目(まじめ)な話をすると、それはまさに明後日からの頑張り次第じゃないかしら」

風の始原精霊(シルフ)を愛(め)でていた聖女が、ふと表情を真剣なものにした。

明後日――

その言葉が意図するところは、既にレンも聞いている。

「覇都(はと)エルメキアに向けての遠征だろ」

「そうよ。予定どおり明後日の早朝に出発。オルヴィア大陸の東海岸、覇都エルメキアを目指すわ。肩の傷は大丈夫？」

「それは俺の心配だって。危なかったのはエリエスの方なんだから……」

遡(さかのぼ)ること一週間。

聖地カナンで、レンが初めてエリエスと出会った時のこと。

二人の邂逅から間をおかずに大聖堂を襲った相手が波の将魔・魅亞だ。

五大災として知られる伝説の悪魔の襲撃はかろうじて退けたものの、レンとエリエスにとって真の脅威と呼ぶべき敵は、さらにその後にやってきた。

〝光さす祭壇へと振り返る。その先に――〟

〝煌々と瞬く、巨大な人型をした『何か』がいた〟

それは、光の十字鎗を携えた怪物だった。

初めて感じる異様な寒気。

そしてレンは理解した。この怪物は異質であると。人間も天使も悪魔も竜も関係なく、すべてを含めた世界中の生物と相容れない存在だと。

……俺を庇って怪物の光を受けたのがエリエスだった。

……フィア先輩の治癒法術がなかったら、今頃どうなっていたかわからない。

レンの右肩も同じ。

痛みは治まったが、光の鎗で貫かれた肩には今も傷痕が残っている。だからこそ一週間、大事をとって本霊宮の賓客室で安静にしていたというわけだ。

「しばらくエリエスを見てなかったから心配だったけど」

「さっき言ったとおり礼拝期だったからよ。身体はネビリムからもお墨付きをもらったわ。あなたの連れの大天使のおかげでもあるわね」

エリエスが胸元に手をあてる。

ふぅ、と小さく息を吐きだして。

「でも一番はレンのおかげ。遅くなったけど……助けてくれてありがとう。大勢の前で言うより本人だけの前で言いたかったから、礼拝期の後になっちゃったけど」

「え？　でもそれは――」

「御礼を言うのは俺の方。なんて言うのはナシよ？」

こちらの言いたいことはお見通し。

そうと言いたげに、真正面からじっと見つめられた。

「最初にレンを庇ったのは私。それはわかってるわ。でも秘境を巡っていれば、そういう助けて助けられ

てなんて当たり前のこと。私は、カナン巡礼聖教船の部下と世界中の秘境を冒険してきたから。レンはまだ旅に出たばっかりでしょ？　単純な経験の差よ。ほんの少しの経験差があったから、レンより一瞬先に身体が動いただけ」

「……そ、そうかな」

「そうよ。だけど、あの光の怪物を倒したのは『旅団の一員ならできて当たり前』のことではないわ。だから他の誰のおかげでもなく、私が助かったのはレンのおかげなの。……治療を受けて目が覚めた時、不安だったんだから。私は大丈夫だったけど一緒にいたレンはどうなったのって。はたして無事なのか。治療さえままならない重傷を負ってたらどうしようかって」

「……」

「そう思うくらい、あの怪物は不気味だったわ。それを倒したってことは誇っていいし、讃えられるべきなのよ。調べなくちゃいけないことがあるからまだ手放しには喜べないけど、本当なら聖地総出で御礼の催しを――」

そこまで一気にまくしたてた後。

はたと、我に返ったようにエリエスが口元を手で覆った。

「と、とにかく！　途中から何を言いたいのかわからなくなっちゃったけど、今回は私に御礼を言わせてほしいの」

「……わかったよ。じゃあ、その気持ちは受け取っておく」

「そうしてちょうだい。ああもう、慣れないこと言うから変に緊張しちゃったわ……」

恥ずかしげに小声になる彼女に、レンは心の内で苦笑した。

ありがとう。

そう言われたのは、炎崖都市ジオの民家で女の子を助けた時とあわせて二回目だ。

聖フィオラ旅学園にいた時には決して言われなかった言葉。それが嬉しくもあり、まだ照れくさくもある。

「だけど、まだあの怪物の正体がわかるまでは油断できないだろ？」

「もちろんよ。精霊信仰の聖女として、精霊を脅かすものの正体は確かめなくちゃいけないもの」

あの光の怪物が現れた時、上の始原精霊が怯えていたのをレンも目撃している。

では、なぜ精霊が怯えていたのか。

それを確かめるために覇都へ向かうのが、エリエスの目的だ。

「世界中の精霊が怯える現象は二百年前――つまり終焉戦争の時にも起きていたらしいの。そして現

代。あなたたち『再来の騎士』の噂が広がるのと、精霊が怯えだしたタイミングがほぼ同時だった。だから怯えの原因も最初はあなたたちを疑ったけど……違った。現に火の始原精霊と土の始原精霊はあなたに懐いていて、そしてあの光の怪物を前にして怯えていたから」

「で、アイツが消えた後に、覇都近郊でしか採れない黒水晶が落ちてたんだよな」

「ええ。今はこれが貴重な手がかりになるわね」

ローブの内ポケットを手で探るエリエス。

彼女が取りだしたのは、レンも一度目にした黒水晶の欠片だった。

世界最大規模をほこる旅団『王立七十二階位特務騎士団』の象徴でもある黒甲冑。その素材として使われる鉱石だ。

そしてもう一つ有力な手がかりが――

〝精霊の怯えの正体を知りたくば追ってこい〟

〝いずれわかる。女神の法印を携え、覇都エルメキアへ挑む時に嫌でもな〟

外法騎士カサディン。

天界で、女神法印を狙って襲撃してきた王立七十二階位特務騎士団の部隊を率いていた幹部だ。あの男の言葉もまた、精霊の怯えに覇都が関わっていることを示唆していた。

……明らかにワザと誘ってる口調だった。

……精霊の怯えの情報を餌にして、俺たちを覇都へと誘導するために。

その狙いは竜法印と女神法印。

世界録の在処と目されている『終焉の島』の、その封印解除に必要な二つの鍵のうちの二つだ。女神レスフレーゼの女神法印をレンが、そして竜帝カルラの竜法印をキリシェが預かっている。

王立七十二階位特務騎士団からすれば、二つの法印をまとめて奪う絶好の機会だろう。

「何か考えごと？」

「……いや、大丈夫だよ。ちょっと頭の中を整理してただけだから」

見つめてくるエリエスに、小さく首を振って応じた。

――光の怪物の正体を確かめるのは、自分と彼女の共通目的。

――だが『再来の騎士』は、それに加えてさらに確かめなければならないことがある。

〝碑文の三賢者の箴言も、あながち世迷いごとではなかったということか〟

〝大地から離れた場所では、地の始原精霊は力を発揮できまい？〟

初対面である外法騎士が、なぜ地の始原精霊の存在を知っていたのか。

そしてE立七十二階位特務騎士団が研究しているという対天使装甲と対悪魔装甲。世界最大の軍事都市とはいえ、失われた技術の開発があまりにも進みすぎている。

……フィア先輩も同じことを気にしてた。

……それに碑文の三賢者っていうのは誰のことだ？

E立七十二階位特務騎士団と、その旅団を抱える覇都エルメキアという都市には何か、いまだ未知の脅威が隠れている。そんな予感がしてならない。

「明後日に船で出発。それから覇都のあるオルヴィア大陸まで二日間……だっけ？」

「そうよ。あの光の怪物の襲撃がとにかく急な事件だったから、こっちも大陸移動用の船の準備に時間がかかってるの。用意が整うまで心の準備をしていてちょうだい」

「心の準備、か……」

エリエスがそれとなく呟いた言葉に。

レンの脳裏をよぎったのは、あの時の凄惨な光景だった。

――血を吐いて倒れるエリエス。

――目の前に立ちはだかる光の怪物。

忘れられない、忘れたくない記憶。あんなにも自分の実力不足を悔いた瞬間はなかった。何度夢に見ても足りないくらいの後悔の念。

「……身体も治ったし、できることはやらなきゃいけないよな」

「え？」

「ううん、独り言」

自分に言い聞かせるつもりで口にして、レンは古びた少女像に背を向けた。

‖ ‖ ‖ ‖ ‖ ‖ ‖

本霊宮。

聖地の中心部にあるカナン大聖堂の別館であり、旅団『カナン巡礼聖教船』の拠点として知られた建造物だ。その敷地に設けられた旅団用の屋外演習場から、奇怪な紫煙が濛々と空へと昇っていって

――

「さ、もう一発いくよ！」

声高らかに宣言したのはエリーゼだ。

と同時に、地上に浮かびあがる暗色の法術円環。

カナンの空が一瞬にして分厚い暗雲に覆いつくされていき、上空の水分がみるみるうちに凝結。氷となって降りそそぐ。

――黒の氷鎗。

巨大な三叉槍と化した氷柱が訓練場の床を穿つ。

床に敷かれた幾重もの防御法術を薄紙のごとく貫き、硬い石畳を深々と抉る破壊の鎗。

だが悪魔の法術はこれだけで終わらない。

地上へ噴きだす冷気。

石畳に穿たれた裂け目から、氷鎗の冷気が大量の霧となって噴きだした。

「言い忘れてたけど氷鎗を避けるだけじゃだめだよ。上からの鎗を避けても足下から極寒の霧が襲ってくるから。その霧、一息でも吸いこんだら肺の中から全身凍結だからね。さあ、どうするレン？」

「……言い忘れるには危険すぎるだろ」

天真爛漫に瞳を輝かせるエリーゼにそう答え、レンは足下の床を蹴った。

と同時――

何十という黒の氷鎗が空中で軌道を変え、すべて自分めがけて襲ってきた。

「あとコレも言い忘れてたけど、その氷鎗、熱感知もできるから。レンの体温に反応して襲ってくるから」

「だから言い忘れるにも程があるって！」

意思があるように空から奇襲してくる氷鎗。

「はっ！」

裂帛の気勢とともに、レンの振り上げた剣が黒の氷鎗を薙ぎ払った。

煌々と輝く超高熱の赤刃。

――炎の精霊剣。

レンの肩に留まる火の始原精霊が灯した炎だ。

紅蓮に輝く精霊剣と、黒の氷鎗。両者の切っ先が触れあった直後、法術の残滓をしめす紫煙を上げて氷鎗が一瞬にして蒸発した。

「これはこれは？」

「ふむ」

離れて見ているフィアとキリシェが、わずかに目をみひらく動作。

そんな彼女たちの見ている前で。

『モット、モット速ク！』

叫んだのは上の始原精霊。

レンの足首に掴まったまま、超低温の霧が立ちこめる空間の一点を指さして――

『ホラ、アッチ！』

精霊の声。その導きのままにレンは極寒の霧へと身を投じた。

針の穴を通す精度で、気流とともに渦巻く法術の霧の隙間に身体をねじ込ませ、精霊に後押しされるまま駆けぬける。

「わずか数十センチの氷霧の隙間。それを躊躇なく突破しましたね」

嬉しそうに声を弾ませるのは大天使フィア。

彼女が見つめるその先に、手招きするエリーゼの姿があった。

「さあ、レン。全力でね」

手加減無用。そうでなければ訓練など意味がない。もとより相手は冥界の支配者だった先代魔王だ。彼女に認めてもらうためにも全力で。

その一心で振るったレンの一刀。

灼熱の切っ先がエリーゼの眼前に迫り――

「ほい」

ぱし、と白刃取りの要領で受け止められてしまった。

「……あれ？」

「レーンー？　ちょっとだけ剣の勢いが落ちたよ。躊躇したでしょ。アタシを真っ二つにする気で斬りかかってきていいよって言ったのに」

レンの剣を受けとめたエリーゼが、溜息。

姿こそ十歳相当ではあるが、剣の先から伝わってくる力はまるで巨人のそれだ。

「まあ予想はし……」

言い終えるより先。

エリーゼが、突如として悲鳴を上げて跳びはねた。

「……あっ熱っつっつうううういいつい――――――――!?」

真っ赤に腫れあがった手のひら。

火の始原精霊（サラマンダー）の炎剣を、何の心構えもなく素手で触っていたからだろう。

「エ、エリーゼ!?」

「……あー熱かった。手の皮むけちゃった」

手にフーフーと息を吹きかけるエリーゼ。

そんなあどけない仕草の先代魔王（しりめ）を後目に、ベンチに腰かけていたキリシェとフィアが揃（そろ）って立ち上がる。

「なるほど、それが精霊の力の本領か」

「エリーゼの氷槍（ひょうそう）を一刀両断したわけですから、炎の精霊剣の威力は申し分なしですわね。先ほどの歩法も見事でした」

腕組みしながら頷（うなず）くキリシェ。

隣では、こちらも満足げな笑みをうかべるフィア。

「好（い）いですわレン。十分に成長が見てとれます。精霊の師事もあるのでしょうが、日々の鍛錬（たんれん）が根付いていることも嬉（うれ）しいです。やはり私の教え方が良かったからかしら。教える側が優秀だと学ぶ方も習得が早いと言いますし」

「待てフィア。聞き捨てならないな」

腕組みしながら、キリシェが肘（ひじ）でフィアの脇腹をつついてみせる。

「レンに剣の手ほどきをしたのはわたしだぞ。わたしの教えあってこそのレンの成長だ」

「あら？　ですがキリシェ、今の体術は私の教育の賜物（たまもの）ですわ」

挑発まじりの微笑（びしょう）で返す金髪の大天使。

「ほほぅ？」

「ふふ……」

「あとやっぱり、戦ってきた相手が強いっていうのも大きいけどね」

バチバチと火花を散らす二人を後目（しりめ）に、そう口にしたのはエリーゼだった。

火傷（やけど）した手のひらを氷槍に押し当てながらも、自分を見上げる幼女のまなざしは好奇心に満ちていて。

レン

「初めて見る法術にも冷静に対応できるようになってきたし。炎の将魔とか竜帝カルラの上位法術を肌で感じた経験が活きてるんじゃない？」

「……いやまあ、肌で感じたっていうか死ぬほど大火傷させられたけど」

嬉しそうなエリーゼに、ぽつんと肩をすくめて返事。

「それも大事なの。でもアタシがレンの戦いを見たときは、もっと動きが良かったけどな。ほら、あの聖堂のさ」

「あ。それか」

思わず首肯する。聖地カナンの聖堂で光の怪物と戦った時。エリエスの召喚した二体を含む、四体の始原精霊に師事した時のことを言っているのだろう。

エリーゼの魔王霊知。

遠く離れていた場所からも、エリーゼだけはその様子を見ていたのだ。

「あれはほら、水の始原精霊と風の始原精霊にも力を借りてたから……」

「その二体は？」

「ご覧の通りだよ」

首をかしげるエリーゼに、レンは自分たちの背後を指さした。

ベンチに腰かけるエリエス。そんな彼女の両脇に水の始原精霊と風の始原精霊が仲良く寄りそって、じっと自分たちを眺めていた。

「訓練は終わったのかしら。もう近づいて平気？」

水漬けの訓練場をゆっくりと歩いてくるエリエス。

「言葉も出ないわ。法術士の訓練用に、法術耐性の結界を四重に敷いてあったのよ。それが全部壊されちゃった。これが魔王の法術なのね」

「ううん、コレいたって普通の法術だよ。魔王用の法術なんて使ったら、訓練場どころか聖地が吹き飛ぶもん」

「……勉強になるわ」

苦笑まじりに応える聖女。

「それはさておき。レン、精霊の話だけど」

「ああ、そうなんだよ。エリエスが倒れた時に、その水の始原精霊と風の始原精霊が俺に駆け寄ってきてさ」

〝感じ取れるはず。光の気配。水面に映るままに避けなさい〟

〝風を嫌わないで。風を切るのではなく、風と一つになる境地〟

水の始原精霊の水鏡。

風の始原精霊の風の軌跡。

この二体がいなければ、今頃どうなっていたかもわからない。

「……で、わかってはいたけどさ、アレは前回かぎりの特別だったんだろ？」

『はい』

『エリエス、遊ぼ。遊ぼ？』

聖女の両脇から離れようとしない精霊二体。

要するに前回の協力はエリエスが危機に陥っていたからであって、レンへの協力という意味ではなかったということなのだろう。

『私たちにはエリエスがいますから』

『シルフ、エリエスの友達だもん』

エリエスから離れようとしない水の始原精霊と風の始原精霊。

彼女と同じくらいの信頼関係を結ばないかぎり、あの時のような師事関係を結んでくれることはないのだろう。

「ねねレンてば、一人で頷いてないでさ。アタシたちは精霊の声が聞こえないんだから。ちゃんとわかるように説明してよ？」

服の裾を引っ張ってくるエリーゼ。

「ええと要するに、水の始原精霊も風の始原精霊もエリエスの友達ってこと。だから多分、俺もコイツらの友達にならないと力を貸す理由がないってことなんだと思う」

「ふーん？　じゃあ友達になればいいじゃん」

「そうできればいいんだけどさ」

無意識のうちに見上げていた頭上。

エリーゼの法術が生んだ暗雲が消え去って、空に映るのは眩しいくらいに輝く陽。

……友達か。

……俺、聖フィオラ旅学園に何人いたっけ。

思いだそうとしても思いだせない。

友達という単語で思い浮かぶ生徒に、レンは心当たりがなかった。

「どしたの？」

「ごめんエリーゼ。俺、そうすぐには精霊と『友達になろう』って言えないかも」

後ろ頭を掻(か)きながら、レンは微苦笑をうかべてみせた。

「意外だね？　むしろ誰より、レンは精霊と親しくなれそうな気がするけど」

「軽々しく言えないよ。だって俺がこの場で水の始原精霊(ウンディーネ)や風の始原精霊(シルフ)に、俺と友達になってくれって言ったらどう思う？」

友達になろう。今この場でそう誘ったところで、それは精霊に力を貸してほしいからという私欲によるものだ。

「俺さ……友達って、もっと自然な関係でいたいから」

人間も精霊も同じ。

精霊の力を欲(ほっ)するから「友達になろう」と誘う。それは自分にはできない。

「だから待つしかないかなって。精霊(コイツら)が心を開いてくれるまで」

「まったく遠回りな。……それがお前らしさでもあるんだろうが」

腕組みしたキリシェが呆(あき)れた溜息(ためいき)。

「当面のところ、頼りになるのはお前の精霊一体というわけか」

「そういうことかな」

頷(うなず)こうとして――

レンの前髪を、不意に心地よい風が通りすぎていった。

「風の始原精霊(シルフ)？」

『……エリエスから「お願い」されれば、また教えてあげるかも』

そう言って、ほんの少しだけ顔を背(そむ)ける翼持つ小人。

『エリエスを助けてくれたことは感謝しています』

『シルフ、レンのことは覚えたから』

半透明の姿をした少女――水の始原精霊(ウンディーネ)がしっとりと微笑(びしょう)。風の始原精霊(シルフ)も楽しそうに空へと飛翔(ひしょう)していく。その光景に。

「どうしたレン？」

「……ううん。何でもない」

見上げてくるキリシェにふり返り、レンは小さく拳(こぶし)を握りしめた。

「それより続き頼むよエリーゼ。明後日の出発までにできることなんて限られてるけど、時間は無駄遣いできないし」

「む、そうか。ようやく覇都とやらに出発だな！」

　思いだしたように手を打つキリシェ。

「待ち遠しかった」

「あれ？　キリシェ、なんか妙にやる気？」

「ここしばらくろくなことがなかったからな。何であれ行動に出るというのは歓迎だ」

　珍しく力の入ったそぶりでキリシェが首肯。

「竜の渓谷に戻って以来……天界に行くために船に揺られて死ぬ思いで船酔いに耐えて、お前がフィアと天界に行ってる間はエリーゼと二人で待ちぼうけ。さらにここで一週間も賓客室とやらに閉じこめられて。これを鬱憤と言わずに何と言うか！」

「まあ確かに……」

「明後日と言わず、わたしは今すぐでも構わないぞ。さあ覇都とやらはどこだ！」

「それは何よりですわ」

　静かに様子を見守っていた大天使が、クスリといたずらっぽい笑顔。

「私、キリシェが臆して嫌がるとばかり思ってました」

「わたしが？　は、何をバカなことを。このわたしが臆するものなど何一つ――」

「覇都は、船を使わないと行けないんですよ」

　フィアのその一言で。

　あふれんばかりの自信に満ちあふれたキリシェの顔が、凍りついた。

「……今、なんと？」

「覇都はオルディア大陸ですもの。このアルカナ大陸とは別大陸ですから、私たちはカナン巡礼聖教船の用意する帆船に同乗させてもらうというわけですわ」

「……」

　威勢に満ちていたキリシェの顔色が、みるみるうちに青ざめていく。両目をみひらき、血色のよかった唇も恐怖に強ばって震えだして。

「しかもかなり距離がありますからね。天界に行った時の数時間どころか、今度は海上で何日も……あら？　キリシェ、聞いてます？」

　返事がない。

　そんな竜の少女の頬をツンツンと突くエリーゼが、ゆっくりと首を横にふった。

「あちゃあ。キリシェったら目を開けたまま気絶しちゃってる」

「え？　うわっ、本当だ!?」

　恐怖に顔を凍りつかせた状態で、全身硬直しきっている竜の少女。

　まるで蛇に睨(にら)まれた蛙(かえる)のような状態だ。

「けれど良い機会ですわ。エリーゼ、手伝ってください。キリシェの意識が戻る前に大天使(わたし)の拘束法術(ほうじゆつ)と、先代魔王(あなた)の封印結界で全身拘束します。そうでもしないとキリシェってば、船に乗りたくないって当日暴れだしますよ」

　どこから取りだしたのか。

　光り輝く黄金色の縄でもってキリシェを縛りはじめるフィア。

「エリーゼ、そっち手錠かけてください」

「任せて。しっかり縛っておかないと、暴れて船を壊されちゃうかもしれないし」

「いや、聖地(せいち)が焦土(しようど)になる方が先ですわ」

「ありえるね」

　物騒なことを言いながらキリシェの両手足を縛っていく大天使と先代魔王。

　その光景をぼんやりと見守りながら。

「……まあ、こんな暢気(のんき)なやりとりも今だけだもんな。きっと」

　レンは大きく天を仰(あお)いだのだった。

Secret Record　予見者たち

覇都エルメキア・古代城イスタルシル『天鏡の間』――

それは四方の壁、床や天井まで一面が鏡に覆われた大広間だった。

一握りの騎士のための修練場。

世界最大の旅団『王立七十二階位特務騎士団』でさえ、この広間での修練を許されるのは、ごく少数の上位騎士のみ。ここ天鏡の間という修練場そのものが、覇都のみならず世界中の騎士たちの憧憬の場と言っても過言ではないだろう。

だが、ある時を境に、この栄光の修練場はたった一人の所有物と化した。

騎士Eと呼ばれる男の登場。

騎士Eは圧倒的なまでに強すぎた。その力の前にあらゆる騎士たちがひれ伏し、あるいは絶望し、一人また一人と栄光の修練場を去っていき――

いつしか栄光の場は、彼一人の所有物となった。

「相変わらず、ここは空気が張りつめておるの。息が詰まるようじゃ」

姿を見せたのは、金属製の杖で足下を支える老人だった。

背筋の曲がった白髪の老師。剣のかわりに杖を携え、その衣も王立七十二階位特務騎士団の黒甲冑ではなく薄汚れた研究衣だ。

序列四位『狂刃』ナーフレス。

屈強な騎士たちが集う王立七十二階位特務騎士団において、ただ一人だけ存在する覇都研究機関からの派遣員。

「輝かしき光に満ちた空間。美しく磨かれた豪奢な鏡の広間。なのに、この栄光の場所に佇むのがお主のような無骨な剣士ただ一人ではな」

「……」

無言でふり向いたのは、黒の戦闘衣を羽織った騎士だった。

歳の頃は三十前後だろう。短く刈り上げた灰色の短髪に、黒の双眸。並の成人男性より頭一つ抜き

んでた長身に、全身鋼のごとく鍛えあげられた肉体。

ただそこに「居る」というだけで、何より鋭い刃の雰囲気を湛えた剣士。

騎士王ゼルブライト。

最高位の剣士たちが集う旅団『王立七十二階位特務騎士団』七十二人の頂点であり、剣聖シオンと並び現代最強の剣士と称される覇者。その男が――

「奴らはまだか？」

感情の読み取れない声でそう呟いた。

「ふむ。お主の言うそれは、旅団『再来の騎士』のことかの？」

「それ以外にいないだろう」

「近づいておるよ。海の機嫌も潮風の具合もよい。明後日の朝には、このオルヴィア大陸に着くじゃろうな」

鏡に覆いつくされた天井を見上げる老人。

「先ほど、聖地に忍ばせた諜報員から連絡があった。『再来の騎士』はカナン巡礼聖教船の船に乗りこんだらしい。あの旅団に紛れて覇都へと侵入するつもりじゃろう」

「カナン巡礼聖教船……」

「そう。聖エリエスの率いる旅団じゃな。現代世界で認知されておる最後の古代詠唱士。お主はあの英勇の再来を気にかけているが、儂としては聖エリエスとの対面が今から待ち遠しい。聖女の従える精霊と、そして我らが虚構精霊。はたしてどちらが上なものか」

精霊。

それは現代では幻とも伝説とも言われている存在だ。

今では失われた術式とされた古代召喚術が隆盛を誇っていた時代。

まだ人々の中に「精霊の声を聞く」術者が多くいた頃には珍しくない存在だったというが、今ではその姿を見る機会も皆無と言ってもいい。

「精霊か」

「興味がないかの？」

「言ったはずだ。すべては不純物に過ぎないと。私の求める境地はそこにない」

異端の覇者。

騎士王ゼルブライトは、退屈そうに首を横にふっただけだった。

「報告はそれだけか」

「うむ。あと言うまでもないが、英勇の再来とされる剣士に加えて、終焉戦争の三大姫も確認しておる。竜姫キリシェに大天使フィア、先代魔王エリーゼ。人間の騎士一人より、余程そちらの方が警戒すべき相手じゃろう」

「迎撃の指揮官は、お前か？」

「無論。『再来の騎士』との戦いを待つお主には悪いが、奴らがここに辿りつくことはあるまい。英勇の再来は、王立七十二階位特務騎士団の騎士たちで。三大姫は虚構精霊で迎え撃つ。奴らが所有している女神法印と竜法印の奪取方法も、既に『碑文の三賢者』から教示を受けておるからの」

「……」

それに対し。

騎士王と呼ばれる男の応えは、無言の嘲笑だった。

「おや、儂が何か的外れなことを告げたかの？」

「好きにしろ」

天鏡の間で微動だにしない騎士王。

ここに偽英勇がたどり着く前にすべて終わらせると言う王立七十二階位特務騎士団。

ここに偽英勇がやってくると断言する騎士王。

同じ覇都の一員でありながら、この男が「異端」とされる理由がこれだ。

――自分以外の何者も信じない。

――自分の予感こそが絶対の先見であり、未来そのものであると。

対する序列四位ナーフレスもまた、騎士王の対応に気を悪くした様子は微塵もない。

覇都エルメキアの頂点に立つこの剣士が、それだけの不遜を許される男であることを知っているからだ。

「さて、では儂はそろそろ研究の続きに戻るかの」

「ナーフレス」

背を向けた老人に対し。

「あの男はどうしている？」

「……さて、わからぬな。この城の何処かには待機しているだろうが、あいにくとアヤツはお主と違う意味で思考が読めん」

溜息混じりに肩をすくめてみせるナーフレス。

「序列二位、『邪剣士』王蛾は何者にも飼い慣らせぬよ。お主とは違う意味で、な」

「それはどうでもいい」

まっすぐ正面を見つめる騎士王。

「奴が何を企んでいようと知ったことではない。私の邪魔さえしなければ、な」

「ふむ。ソレは奴も心得ておるとは思うが、姿を見かけた暁には伝えておくかの。……姿を見かければの話じゃが」

天鏡の間を去っていく序列四位。

その背中を見送ることなく――

「これで覇都動乱のお膳立ては整った、か。どちらにとっても都合がいい。『再来の騎士』にとっても私にとっても」

序列一位・騎士王ゼルブライトの独白。

「そして剣聖シオン」

その声音に、ほんの僅かな期待をこめて。

覇都エルメキアにて待ち受ける異端の覇者は、絶対の自信と共にそう告げた。

「お前も、機をうかがっているのだろう？」

Record.2　覇都

1

燦々（さんさん）とふりそそぐ陽光（ようこう）。

天を仰（あお）げば、そこには色鮮やかな蒼穹（そうきゆう）。

大型全装帆船（シップ）の甲板から見わたす水面は、昼の日射（ひざ）しを受けてキラキラと輝いて、その先の水平線では真白い巨大な雲が顔を出している。

波が船体に押し寄せる潮騒（しおさい）と、そして潮の匂い。

「ああ、いいな。これぞ船旅って感じかも！」

甲板の手すりから身を乗りだして、レンははるか先の水面を見下ろした。

噴（ふ）き上がる飛沫（しぶき）。

水面下から流線型の姿をした生物が二頭、三頭と飛びだしてくる。

「お、イルカだ」

「ここらの海域は平和だねぇ。まだ海の徊獣（かいじゆう）に一体もお目見えしてないんじゃない？」

強烈な陽に照らされて、眩（まぶ）しそうに目を細めるエリーゼ。

そんな彼女の座っている場所はレンのさらに先。手すりを乗り越えた先の、船の縁だ。

「レンもこっちおいでよ。ここの方がイルカも近くで見れるから」

「そこ危ないってば。海に落ちるぞ？」

「へーきだよ。こんなに海も穏（おだ）やか、船も大きいから揺れも小さいし」

船の縁に座って楽しげに足をバタつかせる褐色（かつしよく）の幼女。

「アタシもこんなに大きな船に乗ったの久しぶりだなあ。少し動きが遅いけど、そのぶん乗り心地と見晴らしが良いのは素敵だよね。レン、アタシもこういう船欲しいな」

「……そりゃ俺もタダで貰えるなら貰いたいけどさ」

手すりから後方へとふり返り、レンはあらためて自分たちの船を見わたした。

遠洋航海用の大型全装帆船。

船体の表面に張り重ねられた頑丈な鉄板は、大型海獣との戦闘を想定してのものだろう。鉄板には錆よけの塗装が施され、その上から装飾用の白い塗料をさらに塗り重ねることで、船全体が美しく仕上げられている。

――陽を受けて真珠色に輝く全装帆船。

――その帆にも一枚一枚、色鮮やかな絵画が描かれている。

旅団用の武装仕様でありながら、豪華客船にも劣らない芸術品めいた外観。カナン巡礼聖教船の発注で特別に造られた世界に一隻の大型全装帆船だ。

「さすが世界的旅団。これが都市の所有物じゃなくて、一旅団の私有物っていうんだからすごいよな……」

「ええ。レンも、ぜひこんな素敵な船を持てるくらいになってくださいね」

海風に金髪をなびかせて。

日傘をさしたフィアが、淑やかな歩調で甲板を歩いてきた。

「先ほど船長に話を聞いてきましたわ。船旅は順調。もう間もなくオルヴィア大陸が見えてくるだろうとのことです」

「もう!?　出発したの一昨日だったのに、こんな早く着くんだ」

「普通の帆船ならまだ半分も進んでないでしょうね。天気も恵まれましたし、何より『風』が味方してくれていますから」

風を受けて大きく膨らむ帆を見上げるフィア。

その先に――

空中を楽しげに飛びまわる風の始原精霊の姿があった。エリエスの「お願い」に応えて風を吹かせ、全装帆船に強力な推進力を与えてくれている。

「精霊使いの持ってる精霊具でも同じことができるんだっけ？」

「ええ。ですが、本家の風はやはり違いますね」

日傘の下で微笑む大天使。

「エリーゼ、あなたも確認のために聞いていてください。今回、私たちはカナン巡礼聖教船の一員であるフリをして覇都エルメキアに潜りこみます」

「あいよ。で、港の関所を通過してからは自由にしていいんでしょ？」

「ええ。カナン巡礼聖教船も、向こうは向こうで用事がありますからね。それが精霊信仰の宣教活動ですわ」

覇都遠征の、名目上の目的だ。

精霊信仰は世界中に信徒がいる。それは覇都エルメキアも例外ではない。そんな遠隔地の信徒に向けた聖エリエスの来訪というのが、この船旅の名目になる。

「エリエスの護衛と世話役をかねて、カナン巡礼聖教船がついていくって形だもんな」

「そうです。とはいえ、その名目もしっかり果たさなければ覇都の目を誤魔化せませんからね。覇都についてすぐ城内に侵入するというわけにはいきません」

「……王立七十二階位特務騎士団の本拠地か」

フィアの説明に頷いて、レンは手すりを握りしめた。

わずかに感じる指先のふるえ。こんなにも広い海上だというのに、既に全身を監視されているような緊張感を覚えずにはいられない。

「聖フィオラ旅学園にいる時にさ、俺のクラスメイトで学生騎士だった連中……みんな口を揃えて志望は王立七十二階位特務騎士団だって言ってたんだ。最難関だけど最高位の騎士たちが集まる栄光の旅団だって」

世界最大の旅団の一員として栄光の騎士人生を送るも良し。

独立して、新たな旅団を結成するも良し。

王立七十二階位特務騎士団を去った後でも、あの旅団に所属したことがあるという経歴があれば実力は世界中に証明されている。他の旅団からの勧誘も毎日のようにあるだろうし、旅団養成機関からも最高待遇の講師として招かれると聞く。

「誇り高くて、礼節を重んじて、自己研鑽を忘れない。騎士像の理想だって」

「それが王立七十二階位特務騎士団の表向きの顔ですわ」

手すりに背を預ける金髪の天使。

「もちろん完全な嘘ということではないでしょう。私も聖フィオラ旅学園に在籍していた身ですから、人間の旅団にも多少は理解があります。彼らが一流の剣士であることは間違いない。ただし王立七十二階位特務騎士団には、まだ私たちの知らない裏の顔がありそうですが」

「あの光の怪物とか、対天使装甲みたいな『失われた技術』もそうなのかな」

「それを確かめに行くのが目的ですよ」

優雅に身をひるがえす大天使。

ふわりとなびくスカートを手で押さえながら、金髪の少女がくすりと微笑。

「でも忘れてはいけないのが旅を楽しむ気持ちです。世界最大の都エルメキア、私も楽しみですわ。なにしろ世界中から美味しいお酒が集まるという話ですし」

「そっち!?」

「旅は良いものですわ。でもあいにくと……」

日傘をわずかに傾けるフィア。

彼女が見つめる先は、甲板から船の客室に続く扉だった。

「船酔いだけはどうにもならないんですよね」

「……レ……ン……」

ガチャ、と音を立てて弱々しく開いていく扉。

そこから姿を現したのは、血の気を失って真っ青な顔をした銀髪の少女だった。

「キリシェ？　寝てたんじゃなかったのか！」

「……」

ふらふらと、まるで亡者のようによろめきながら甲板を進んでくるキリシェ。

そして。

レンの前までたどり着くなり、力つきて倒れかかってきた。

「……吐く」

「って、おぉい!?　ちょっと待て、俺に抱きつきながら吐かれても困るってば!?」

「うぅ……なんで、なんでわたしがこんな目に……」

目の端に涙をうかべながら唇を噛みしめる竜の少女。

普段の勝ち気なキリシェが滅多に口にしない弱音だが、そのぶん愛らしい面立ちと華奢な体つきも相まって。

……相変わらず、船酔いの時はめちゃくちゃ甘えてきて可愛らしいんだよな。

……本人が苦しそうだから、そんなこと言えないけど。

そう。一昨日の船出で何が一番大変だったかと言うと、船嫌いのキリシェをいかにして船に乗せるかという難題だった。

「だから……船は……嫌だと言ったのに」

「いや、まあそれはわかってるよ。一昨日だってあれほど抵抗してたし」

まず当日の朝に、フィアとエリーゼの拘束法術を破ってキリシェが脱走。

賓客室の戸棚に隠れた本人を見つけるのに三時間。

戸棚から出てこないキリシェを説得するのに、さらに五時間。

その遅延が無ければ、船はとっくにオルヴィア大陸に着いていただろう。

「うぅ……」

「じゃあ日陰に行くか？　風に当たってた方が楽になるかも」

「……そうする……」

しがみついてくるキリシェの手を握りながら、甲板の奥へ。

帆の影が伸びた帆柱まで歩いていって、レンはキリシェと一緒に座りこんだ。

「前は小舟だから船酔いするんだって思ってたけど。こんな大きな船でもダメなんだ？」

もともとキリシェは巨大な竜だ。

今は少女の姿だとしても、竜である彼女にとっては小舟で海に揺られるという感覚がとてつもなく違和感のあることらしい。船酔いも、その拒否反応の一環であるということはレンも天界に向かう際に聞いたことがある。

「前の小舟より全然、揺れなんか感じないのにな」

「大きさの概念の違いですわね。竜にとっては前の小舟も大型帆船も、さほど変わらないということですわ」

苦笑混じりに答えたのはフィア。

と――

「ねねレン、フィアもキリシェも！　オルヴィア大陸が見えてきたよ！」

船首に座るエリーゼが、前方を指さして歓声を上げた。

その指先の方向。

レンの座っている場所からでも、水平線の先に大陸らしき影が覗える。

「まだ実感わかないけど、とにかくもうすぐ着くんだよな。そうしたら船酔いともお別れだろうし。良かったじゃんキリシェ」

「ふ、ふふ……ふふふふ……いよいよか……」

血の気を失った顔で、怪しげな笑みをうかべる竜の少女。

「わたしにこんな屈辱を与えた連中が、あの大陸にいると。……いいだろう。溜まりに溜まったこの鬱憤、思いきりぶつけてやる！」

「怖っ!?　落ちつけってば。別に全面戦争するわけじゃないんだから！」

「……違うのか？」

　残念そうに顔をしかめるキリシェ。

「……わたしの鬱憤」

「まだ顔色悪いんだからおとなしくしてろって」

　帆柱（マスト）によりかかるキリシェをなだめ、レンはその場に立ち上がった。

　オルヴィア大陸。王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）の待ち受けている都が、もう目の前に迫（せま）っている。

「さて、どんな罠（わな）が待ってることでしょうね」

「人間にしては面白い仕掛けを用意してそうだからね。アタシもちょっと楽しみ」

　優雅（ゆうが）に日傘をさすフィアと、船首（せんしゅ）から甲板へと飛び移るエリーゼ。

　そんな二人と、その背後で――

「何でもいい」

　弱々しい声ながらも、その眼光（がんこう）に確かな力をこめたキリシェの呟（つぶや）き。

「立ちはだかるのは片っ端（ぱし）から薙（な）ぎ払（はら）う。それだけだ」

　それが宣戦布告。

　世界最上位の騎士（きし）たちで構成された最大最強の旅団『王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）』と、出所不明の失われた技術（オーパーツ）そして光の怪物が潜（ひそ）むと思われる軍事都市。

　覇都（はと）エルメキア――

　謎に満ちた世界最大の都へと、わずか四人の旅団が挑む極限の抗争。

　その始まりだった。

2

　オルヴィア大陸。

　それは、世界五大大陸の中でもっとも広大な面積をほこる大陸だ。

　大陸の北端と南端とに人類未踏（みとう）の秘境（ひきょう）が存在し、その踏破（とうは）を目指して世界中から一流の旅団が集まることでも知られている。

「ふむふむ。その東海岸沿いに栄えた都市が覇都エルメキアってわけね」

船着き場。

純白の全装帆船で船員が錨を降ろす作業をしているのを後目に、色鮮やかな観光情報誌を手にしているのはエリーゼだ。

「ここは単なる港場で、この先の市壁を越えたところからが覇都の領地みたいだね」

「……俺には最初から想像以上だけど」

エリーゼの指さす壁を見上げ、レンはなかば唖然とした心境でそう呟いた。

世界最大の都市をぐるりと囲む巨大な市壁。レンの暮らしていた学生街ミスティエにも徊獣避けの市壁が設けられているが、せいぜい簡易な鉄柵だ。

だが、目の前のコレは違う。

「本当に何から何まで圧倒的なんだな……」

光輝く市壁。巨大な石盤を積み重ねた堅牢な土台の上に、高位の結界法術を隙間なく張り巡らせているのだろう。

どんな効果の結界なのか、レンでは推し量ることさえ難しい。

……単なる徊獣用の城壁じゃない。

……まるで天使や悪魔、竜が攻めてくることを想定してるような徹底ぶりだ。

これが覇都エルメキア。

領土に踏み入る前から、その力の一端を見せつけられた気分になる。

「でもエリエスは、あんまり驚いてなさそうだけど？」

「私は前にも来たことがあるわ。精霊信仰の宣教で五大陸を順番に回った時があるの」

黄金の法衣で着飾った少女。

すぐ後ろには、側近である治癒士ネビリムをはじめとする三人の最高位幹部。さらに、幹部である武闘家タイラスや、彼に師事する法術士プルミエールの姿もある。

聖エリエス率いるカナン巡礼聖教船——精霊信仰の司祭たちや船員などの従者も含めれば、その数は実に百人近い。

「行くわよ。後ろからちゃんとついてきて。キョロキョロしてると目立つから、歩くときは胸を張って歩くように」

「……了解」

船着き場から続く上り坂をまっすぐ進んでいく。門に取りつけられた鉄格子の扉はすでに開いてい

て、そこをカナン巡礼聖教船が通過。

と。

そびえたつ市壁の奥から、割れんばかりの拍手と歓声が響いてきた。

「あれ、この拍手って？」

「精霊信仰は世界各地に根強く残っていますから。覇都の中にもそれなりの信徒がいるということなのでしょうね」

前を歩くカナン巡礼聖教船を見つめるフィア。

門を通過して、さっと拓(ひら)けた光景は――

「あら、素敵な雰囲気」

花の薫(かお)りただよう街。

足下にはマーブル模様のタイルが敷きつめられ、色とりどりの屋根瓦(やねがわら)で飾り付けられた三角屋根の民家が並んでいる。

広場では出店がならび、その横では大道芸人の芸に拍手を送る観光客たち。

道行く人の数は聖地(せいち)カナンにも匹敵するだろうが、一つ一つの道が広いうえ、そこかしこに広場や公園があることで聖地で受けたような窮屈感(きゅうくつ)がまるでない。

あくまで整然と美しく。

かつ、人の熱気であふれた街並み。それが覇都エルメキアの市街地だった。

そして今。

道行く人が足を止めて、金色の法衣を羽織(はお)ったエリエスに歓声を上げていた。

信徒らしき一般人はもちろん観光客や覇都を訪れていた旅団らしき武装者たち。さらに広場の大道芸人さえ、本来の役を忘れて駆けつけている有様だ。

「うわっ。すご……もしかしてエリエスってめちゃくちゃ歓迎されてる？」

「ええ。これだけの人気ならば、カナン巡礼聖教船(じゅんれいせいきょうせん)に対して覇都(はと)が歓迎の意を示していたのも納得ですわ。王立七十二階位特務騎士団(エルメキア・ダスク)も、カナン巡礼聖教船に対して表だっては動けないでしょうね」

「それで姿が見えないのか」

天界を去り際(ぎわ)に「覇都で待つ」と言い残した外法騎士(カサディン)の言葉を信じるならば、覇都側がレンたちの侵入を予測し、警戒していてもおかしくない。

レンも辺りを覗(うかが)っているのだが、黒甲冑(かっちゅう)で武装した騎士(きし)が一人もいない。

それが逆に不気味であると感じていたところだ。

「王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）は、もともとアッチの護衛が主体らしいよ」

「アッチ？」

「ほら、坂道の向こうの城があるじゃない。あそこ」

観光情報誌（パンフレット）と目の前の光景をしきりに見比べるエリーゼ。

彼女が見上げているのは荘重（そうちょう）な雰囲気の古代城だ。

「古代場イスタルシル。覇都の王族が暮らす城なんだってさ。本城と支城に分かれてて、王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）の拠点（きょてん）がその支城。だから滅多（めった）に城下街には出てこないみたい。かわりに街を守ってるのが、まだ王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）に昇級してない特務騎士たちみたい」

「……気にくわないな」

すぐ後ろを歩くキリシェが、ぽつりとそう呟（つぶや）いた。

「レン、あいつらわたしたちを盗み見ているぞ。わたしたちの背後をつけてきている」

「え？」

「ふり返るな。もう匂いは覚えたから、後で顔を確認してやればいい」

ぴたりと自分（レン）の背中に寄りそって小声で告（つ）げる竜の少女。

――特務騎士。

覇都の防衛を司（つかさど）る七百二十人の精鋭部隊だ。

騎士という名で一括されてはいるが、法術士（アリア）や結界士（エンチャンター）、精霊使いなど、旅団を構成する人員でバランスよく構成されているという話はレンも聞いたことがある。

……その上位七十二人が王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）。

……市街地（ここ）は、その下位にあたる何百人が俺たちを監視してるってわけか。

握る手にじわりと汗がにじんでいく。

一見華やかな街であっても、水面下では王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）の情報網がクモの巣のように張り巡らされているということなのだろう。

「で、アレが凱旋門（がいせんもん）っていうのかな。ちょっと面白そうな仕掛けがありそうだけど」

古代城イスタルシルを囲む城壁。

通過してきたばかりの市壁と似た雰囲気だが、それを見つめるエリーゼが何やら不敵な笑みを浮かべている。

「城への不審者を防ぐ砦（とりで）が、あの凱旋門（がいせんもん）ていう城壁。この観光情報誌（パンフレット）には観光名所の一つって書いてあるけど、そんな可愛（かわい）いもんじゃなさそうだね」

「わかるんだ？」

「そりゃあね。アレ、普通の徊獣対策じゃないよ。天使とか悪魔、竜を相手に戦うことを最初から想定して作ったのかな。それくらい無茶苦茶に法術を重ねがけしてる」

じっと凱旋門を見上げるエリーゼ。

と、そんな先代魔王の頭にぽんと手を置いたのはフィアだった。

「お楽しみは本番に取っておきましょう。船の中でもレンに言いましたが、観光を楽しむのも大事ですよ」

「まあ……そうだけどさ」

「エルメキア・ダスク彼ら を揺さぶる意味でも大事な行動ですわ」

住民たちの拍手に穏やかな微笑で返しながら、フィア。

「エルメキア・ダスク王立七十二階位特務騎士団が世界最高峰の騎士団であり、世界中の秘境を制覇している旅団であることは間違いありません。そして覇都は自らの旅団の威光を利用して、城下街を統制しているわけです」

「それで？」

「この場で私たち『再来の騎士』に手を出せば、覇都の栄光として人々から慕われている
エルメキア・ダスク王立七十二階位特務騎士団の方が火傷するということですわ。覇都を訪れただけの旅団を、彼らが捕らえようと動けば、城下街の住民たちから不審がられるでしょう？」

「……そっか」

エルメキア・ダスク王立七十二階位特務騎士団からすれば、正当防衛の形にしたいのだろう。

覇都で暴れた『再来の騎士』を捕らえるという名目であれば、城下街の一般人や、他の旅団たちから不審の目を向けられることもない。

むしろ、覇都を守った実績をまた一つ加えることができる。

「俺たちの方から動かないかぎり、向こうも俺たちを監視するのが精一杯ってわけだ」

「そのとおり。ですので、こちらから動かなければ都市の見学も気兼ねなくできますわ。今しばらくは観光を楽しみましょう。向こうを焦らす意味でも、ね」

城下町のちょうど中心。

大きな噴水広場に面した高級宿泊レストラン。四階建ての大型宿泊施設であり、二階から四階までがカナン巡礼聖教船、そしてレンたちの貸しきりになっている。

「さ、荷物を置いたらさっそく観光開始ですわ」

「いいねいいね。アタシもたくさん見て回りたい！　珍しい物とかほしいな」

「……まったく緊張感のない。人間の都市を観光して何が楽しいのか」

　意気揚々と出かける準備をする大天使と先代魔王。

　そんな仲間たちの姿を後目(しりめ)に、盛大に溜息(ためいき)をつくのはキリシェだった。

「あれ。キリシェ、まだ船酔いが残ってる？」

「そうじゃない。ただ単に、人間のたくさんいる場所が今ひとつ慣れないだけだ。フィアやエリーゼの観光を楽しみたい気持ちとやらも理解が追いつかない……。それなら都市の偵察が目的という方がまだしっくり来る」

　自分の手をぎゅっと掴(つか)む竜の少女。

「そりゃあ実際に偵察が目的だけど」

「そのとおりだ。レン、エリーゼとフィアの話は気にするな。わたしたちはあくまで偵察のために来たんだから。気を緩めるなよ？」

‖‖‖‖‖‖‖

　一時間後。

「美味(おい)しい！　レン、この綿アメというお菓子が美味しいぞ！」

　通りの出店で買ったお菓子に、目を輝かせるキリシェの姿があった。

　先に行こうとする自分の腕を必死に掴んで。

「レン、もう一つ！　もう一つだけ買いたい！」

「もう九個目だけど？」

「この未体験の甘みと食感。ああ……やっぱり観光はいいなぁ」

「さっきと言ってることが正反対じゃん!?」

「だ、だって……あまりに覇都(ここ)のお菓子が美味しいから」

　顔をほんのりと赤らめるキリシェ。

　けれどそんな恥じらいの様子を見せながら、既に視線は奥の行列へと向いていて。

「レン、あのケーキ店に人が並んでいる。ということは――」

「ということは？」

「きっと名店に違いない。わたしたちも並ぼう！」

目をキラキラさせて走っていく竜の少女。竜の嗅覚を総動員して、覇都の菓子店を器用にかぎ分けているらしい。

「いやぁ、楽しいなこれは。世界の銘菓めぐりの旅もいよいよ佳境に入ったか」

「もう覇都に来た趣旨すら変わってきてるじゃねえか!?」

「まあ落ちつけレン」

右手と左手に、それぞれ出来たての綿アメを抱えながら。

「今はこの覇都というものを観察するのがわたしたちの使命なのだろう？　ならば、こうして市街地を歩きまわって見聞を広めるのは実に理に適っている」

「そうだけど……何か釈然としないものが……」

「あ。また向こうからもいい匂い」

ぱっと後ろにふり返る竜の姫。

「行こうレン、遅れるな！」

「あ、ちょっとキリシェ。俺そろそろエリーゼとフィア先輩の様子も見に行かな――」

声をかけた時には既に遅し。

あっという間に一つ先の広場へと走っていってしまうキリシェの背中を眺め、レンは深い溜息をついた。

「……行っちゃった。まあキリシェなら一人でも平気だと思うけど」

高級宿泊レストランでエリーゼ、フィアの二人と別れて以来、キリシェに付きっきりでまだ一度も彼女たちと合流していない状況だ。

覇都の調査。

市街地のどこにどの建物があって、特務騎士たちがどこに重点的に配置されているのか。特別な警備態勢が敷かれている怪しい施設はないか。

だが四人一緒に歩いて確かめるには、この都市はあまりにも広すぎた。

そこで市街地の東側をキリシェ、中心部をエリーゼ、西側をフィアと分担して、三方にわかれての同時調査というわけだ。

「とりあえず次は、近い位置にいるエリーゼかな。宿の周りを重点的に見て回るって言ってたけど。問題はどこにいるかだよなあ」

キリシェが走っていった方向とは逆に、レンは、宿である高級宿泊レストランに戻る通りを歩きはじめた。

‖ ‖ ‖ ‖ ‖ ‖ ‖

陽の落ちた空を見上げながら街の中心部へ。

高級宿泊レストランの前で辺りを見回しても、エリーゼらしき姿はない。

「ああもう、だから待ち合わせ場所だけでも決めようって言ったのに。フィア先輩もエリーゼも『居そうなお店に居るから』って何だよそれ……ええと、エリーゼの行きそうな店っていえば、やっぱり宝飾店？」

魔王時代から宝石を愛でるのが趣味だったというエリーゼ。古代召喚術の触媒としてレンが渡されたのも、彼女が魔王時代にその力を封じこめた琥珀だった。

「宝石店、宝石店と……」

入口の扉から壁までが一面ガラス張りの高級宝飾店。

外から見わたしてみても客らしいのは見るからに上流階級らしき装いの貴婦人と、その付き人たちだけだ。

「ここはハズレか。じゃあ別の宝石店か？」

注意深く店の看板を観察しながら宝石店を見かけてはエリーゼを探し、時には店員に声をかけて聞き出し調査。

「なのに全然、影も形も見かけないってどういうことさ！」

疲れきった悲鳴を上げて、レンは大通り脇のベンチに腰を下ろした。

どこにもいない。

宝石店の店員に聞いても、そもそも店に寄ったという情報すら得られないのだ。

「エリーゼ、もしかして迷子になったんじゃ……」

「アタシはここにいるけど」

「わっ!?」

　唐突にひょっこりと現れた本人に、思わず声が裏返る。

「どこいたの？」

「普通にお店見てたり、あと広場で配ってた風船もらったりしてたの。ほらすごいでしょ。細長い風船をね、こんな風にクルクルねじって犬の形にしてあるの！」

　興奮しきった口調で、両手に抱えた風船人形を掲げる幼女。

「風船芸（バルーンアート）だろ」

「そうそう。アタシ昔から好きなんだよね」

　広場で行われる大道芸の一つだが、まさか人間の子供に交じって、元魔王のエリーゼが風船芸（バルーンアート）に夢中になっているとは思わなかった。

「さっきの芸人、冥界の魔王宮（アタシのいえ）に連れていきたいなぁ。来てくれないかな？」

「いや……さすがにそれは怖がると思うけど。でもエリーゼはどこの店に行ってたんだよ。探したけど全然見つからなかったから」

「えへへ、どこだと思う？」

　いたずらっぽい笑みを浮かべるエリーゼ。

「宝飾店ずっと探してた」

「あー、いい線いってるねぇ。でも残念。ほら、他にもあるでしょ。この覇都（はと）でアタシが一番に行きそうなお店が」

「もしかしてキリシェと同じで、お菓子目当て？」

「それも惜しい！　でもやっぱり違うんだよねぇ。ほら、あのお店！」

　ますます嬉（うれ）しそうに首を横にふるエリーゼ。

　期待混じりの上目遣（づか）いで見つめてくる先代魔王の仕草に、レンは降参の合図で大きく肩をすくめてみせた。

「答えは？」

「正解は工芸店でしたー。いやぁ、ちょうど呪術用（じゅじゅつ）の人形が欲しかったの」

「惜しくないだろ!?　なんだよ呪術用の人形って、わかるわけないじゃん！」

　まさに悪魔らしい収集物だという気もするが、前情報なしで行き先を当てろというのは無理難題にも程がある。

「ほら、見て見て！　この取れかかった手足のほつれ具合といい、ほどよい黴臭（かびくさ）さといい。まさに年代物

の呪術人形。掘り出し物だよ。恨みのある標的の血を藁人形に一滴垂らして、三日三晩祈祷し続けるの。あとは儀式の後に、その人形を真っ二つにするだけで……あ、でも効果は実際に試してみてのお楽しみの方がいい？　しょうがないなあ、レンにも特別に一つあげるから使ってみて」

「要らないから！　そんなの貰ったら俺の方が呪われそうだし！」

「こんなに可愛いのに？」

「……いや、それを可愛いと呼ぶのはさすがに」

　背中のリュックに詰まった呪いの藁人形を、嬉しそうに見せるエリーゼ。

「エリーゼは、まだ高級宿泊レストランには戻らない？」

「もちろん！　見て回りたいものがたくさんあるからね。次こそ宝石店に出発！」

「あ、エリーゼ!?」

「だいじょーぶ。夜ご飯までには戻るから！」

　スキップ調で歩道を駆けていく先代魔王。

「なんかさ……キリシェもエリーゼも、いくら調査ついでに観光を楽しむって言っても、さすがに全力で楽しみすぎてないか？」

　本当に覇都の街並みの観察ができているのだろうか。

　そんな不安が頭をかすめていく。

「いや、大丈夫。最後の一人はフィア先輩だし！　あの人は一見ふざけてるような時でも根は真面目だから。先輩ならちゃんと街の怪しい場所とか調べてるはず！」

　何度も頷いて自分に言い聞かせる。

　拳を握りしめ、レンは大股で通りを南方面に歩きだした。

「さあ、信じてるぜ先輩……！」

‖ ‖ ‖ ‖ ‖ ‖ ‖

　大衆飲酒店『乙女座』。

　観光客や旅団のメンバー、そして船乗りたちによって夕方から早くも満席近い飲酒店。

　そのカウンター席で屈強な船乗りたちに混じって。

「あはは、お酒、お酒が足りませんわーっ！」

「……」

すっかり陽気になった大天使の姿に、レンは呆然と溜息をついたのだった。

「あらぁ？　レンじゃないですかー。どうしましたぁ？」

「……いや、なんか色々と。現実は残酷なんだなって痛感したよ」

おいでおいでと手招きする金髪の少女。

ちなみに彼女の周りには、カウンター席で寝入っている船乗りたちが何人も。おそらくはフィアと飲み比べして次々と潰されていった犠牲者なのだろう。

「バーテンダーさん、この男の子によく冷えた麦芽酒を。グラスは物足りないので樽一本持ってきてくださいな」

「いやいや、俺、未成年だし。てか樽ってどんな量さ!?」

「……足りませんか？」

「逆だから！」

注文の確認を取りにきたバーテンダーを、首を横に振って追い返す。

「ああもう……フィア先輩だけは真面目に街の調査をしてくれるって信じてたのに」

「だーいじょーぶですよー。お酒が入ってからの方が私は元気れすぅ」

「既にろれつも回ってないじゃん！」

「あはは。レンてば可愛い。心配してくれてるんですねー？」

すっと顔を近づけて見上げてくるフィア。

淡く輝く金髪に、ほのかに上気した頬と艶めかしい唇。そして、これだけ飲酒したにもかかわらずまったく酒の匂いを感じない。

むしろ、どんな香水にも類しない甘い匂いさえ漂わせて――

「ああ……なんかレンを見てたら身体が火照ってきましたわ」

出し抜けに、服の胸ボタンに手をかける大天使。

「服、脱いじゃおうかしら」

「脱ぐな――――――――っ!?」

既に胸の第三ボタンまで外しかけたフィアを、レンは慌てて押しとどめた。

「……レン？」

「落ちつけって先輩！　お酒に呑まれるなんて先輩らしくないし！　先輩、めちゃくちゃお酒に強いんじゃなかったのかよ？」

「大丈夫。私は落ちついてますわ。レンの言いたいこともわかりました」

淑やかな微笑で答える金髪の少女。

「わかってくれたんだ！」

「ええ。つまり服を脱ぐのはココではなく、誰も見ていない二人きりの場所でゆっくりと……あらあら、レンてば存外に破廉恥ですのね」

「全然わかってねぇじゃねえか!?」

ダメだこれは。しかも彼女一人の時より、なぜか自分が一緒にいる方が危険な方向に向かっている気がしてならない。

「ほらフィア先輩(せんぱい)、もう帰らないと。エリエスたちも宿(やど)に戻ってる頃だし。今日の夜に俺たちと向こうで情報交換するって話だっただろ」

「えー……まだ飲み足りないですわ」

「いやだから、エリエスとの合流はどうすんだよ」

「大丈夫。レンならちゃんと一人でも役目を果たせるって、私、信じてますわ」

自信満々にそう告(つ)げて。

そのままフニャリとカウンターに頬杖(ほおづえ)をついたきり動かなくなる大天使。

……これ、動かすの無理だよな。

……フィア先輩は今日一晩動けなさそうだし。

「キリシェとエリーゼも、さすがに宿に帰ってる頃だよな。本当は全員揃(そろ)って、エリエスと明日の打ち合わせする予定だったのに。……先輩抜きでやるしかないか」

パブリック・バー

がっくりと肩を落として、レンは大衆飲酒店を後にした。

‖ ‖ ‖ ‖ ‖ ‖ ‖

オーベルジュ

高級宿泊レストラン四階。

じゅんれいせいきょうせん

カナン巡礼聖教船が借りきっているフロアの、その談話室にて。

「私も、観光するなとは言わないわ」

「……うん」

しゅうえん　さんだいひ

「あなたの連れが終焉戦争の三大姫だっていうのは知ってるし、その強さも多少は理解してるつもりよ。たとえ一人で覇都(はと)を歩いてたって、そうそう簡単に捕まるわけないっていうのも理屈はわかるわ」

「……うん」

「でもね、やっぱり旅団として適切な団体行動も大事だと思わない？」

おっしゃ

「……仰るとおり」

腕組みして直立するエリエスと、その前で正座するレンの姿があった。

エリエスは呆れを通りこして微苦笑。

対するレンは、彼女の言葉に頷くのが精一杯で。

「竜姫キリシェは？」

「……お菓子の食べ歩きに夢中」

「先代魔王エリーゼは？」

「……怪しい呪術人形を買いあさってた」

「大天使フィアはどうしたの？　あの天使は見るからに品行方正じゃない」

「……飲酒店で酔いつぶれてる」

「もう何を信じたらいいのかしら」

ちなみに現在進行形。三人ともまだ宿に戻ってきていないため、エリエスの部下に頼んで迎えに行ってもらっているところだ。

「そうね、余裕の裏返しと思えば心強いのかもしれないけれど」

腕組みした恰好で聖女が深呼吸。

「あなたの仲間、いくら何でも油断しすぎてないかしら？　ここが敵地の中心だってこと忘れちゃだめよ」

「気をつけるよ……」

この場にいない三大姫にかわって、レンは深々と頭を下げたのだった。

3

カーテンから差しこむ朝の日射し。

わずかに開いた窓の向こうから響くのは、木立に留まる小鳥たちのさえずりだ。

のどかで、そして清澄な風を感じながら。

「レン、起きろ。朝だぞ」

「……ん」

吐息を感じるほどの距離から伝わる声。

「エリーゼとフィアはもう一階の食堂に降りてる。私たちも行くぞ」

「ああ、わかっ――――キリシェ!?」

「なんだ、素っ頓狂な声を上げて」

一枚のタオルケットに一緒にくるまっている銀髪の少女。

それも互いに向かいあった状態。わずかにでも身動きすれば前髪が触れあうほどに密着した恰好でだ。

「……いつの間に？」

「夜中にきちんと戻ったのはお前も知っているだろう。エリエスの部下が、わざわざ迎えにきてくれたぞ」

「そ、そうじゃなくてさ」

この高級宿泊レストランは二階から四階まで貸しきりになっている。レンたちの部屋も一人につき一室が用意されていて、昨晩はレンも一人で就寝したはずなのに。

「……もしかして夜中に潜りこんできた？」

「竜の習性だ。誰かと一緒にいた方が寝付きがいいというのは言っただろう」

「鍵は？」

「壊れてたぞ」

「それ壊れてたんじゃなくて壊し……いや、なんでもないよ。独り言」

「おかげでよく眠れた」

白いレース付きの寝間着姿で立ち上がるキリシェ。

窓の日射しを眩しそうに見つめながらも寝間着の裾をめくり上げた恰好で、はたと我に返ったようにふり返った。

「き、着替える！」

「……はいはい。じゃあ先に一階に行ってるよ」

ほんのりと頬を赤くした少女に促され、レンは宿の階段を下りていった。

二階から一階の食堂へ。

「あ、レンが起きてきた。こっちこっち！」

百席近いテーブルが配置された中の、その隅に陣取っているエリーゼ。

その隣にはフィアの姿もある。

「レンてば遅いー。エリエス、部下と一緒にご飯食べてとっくに出かけたよ」

「え、本当？　どうりで食堂も人が少ないなと思った」

焼きたてのパンの香りが充満する食堂。

テーブルに座っているのは、レンたちを含めて数組の旅団と、観光客らしき集団。そして何組かの親子連れだ。

「なあフィア先輩(せんぱい)。昨日もずっとお酒飲んでたけど、また飲んで平気？」

「もちろん。人間にとっての飲料水のようなものですから」

ワイングラスを手にする大天使。

「でも、昨日かなり泥酔(でいすい)してたような……」

「そう思いますか？」

くすっと可笑(おか)しそうに微笑(ほほえ)むフィア。

その笑顔のまま、天使の少女がテーブルごしに身を乗りだしてきた。

「後ろの三列目、私から見て右側に座ってるカップルがいるでしょう？」

「……あ、ああ。新婚旅行っぽい二人だろ」

「あの二人、王立七十二階位特務騎士団(エルメキア・ダスク)の監視です」

「――え」

「しっ。そんな大ぶりにふり向くと勘(かん)づかれてしまいますよ」

何事もなかったかのように椅子に腰かける大天使。

「私が酒場にいる間もうまく客の真似(まね)をしていましたが、頼んだお酒は一杯きり。しかもずっと私の一挙一動をちらちらと見ていましたからね」

「フィア先輩(せんぱい)、お酒に潰(つぶ)れてるフリだったのか……？」

「私をお酒で潰そうと思ったら、地上にあるお酒をあるだけ持ってきてもらわないとね」

ワイングラスを手に、フィアが片目をつむってみせる。

「そちらはどうでしたかエリーゼ？」

「んー。こっちは収穫なしだったねぇ」

焼きたてのパンにバターを塗りながら、エリーゼ。

「街の中心部には王立七十二階位特務騎士団(エルメキア・ダスク)の施設はなさそう。だいぶ街のなかを走り回ったけど、怪しい法術(ほうじゅつ)の気配は一切感じなかったから。……キリシェは？」

「お菓子には満足したが、刺激に欠けた」

着替えを終えたキリシェが、レンの隣の席までやってくる。

「せっかく私があれほど隙だらけで油断を見せて、しかも都合のいいように人目のつかない路地裏まで入ってやったのに。奴ら、遠目に見張るだけで何一つ仕掛けてこようとしない。まったく、不意打ちなり奇襲なり好きなだけ仕掛けてくればいいものを」

「ねー。その方が手っとり早いのに」

そろって頷きあう竜姫と先代魔王。

隣では、艶やかな唇をグラスにつけながらフィアが楽しそうに頷いて。

「というわけですよレン」

「……なんだよ。俺のあの気苦労は一体……」

三人とも遊びほうけているだけではなかった。

フィアは、王立七十二階位特務騎士団の派遣した監視の特定。

エリーゼは、市街地での不審施設の調査。

キリシェにいたっては、自分を囮にして襲撃者を返り討ちにすることまで計算していた。

それも夜中までずっとだ。

「……なんかごめん。悪いことしたかも」

表現しようのない気恥ずかしさを覚え、レンは後ろ頭を掻きながら口にした。

「三人とも夜中まで頑張ってくれてたのに、俺だけ先に帰っちゃって」

「ううん。アタシら遊びのついでだもん、楽しかったよね？」

「美味しいお酒もたくさん飲めましたし」

「名産のお菓子も、一通り味見ができて満足だ」

こちらはパンにたっぷりとジャムを塗りながら、キリシェ。

「今日の予定はどうする？」

「そうですね。今日は四人で行動しましょうか」

間髪入れずにそう答えたのはフィアだ。

「市街地を手分けして見て回るというのは昨日のうちに大方済ませました。ですので今日は趣向を変えて四人で街を見て回りましょう。昨日と違う動きを見せることで、王立七十二階位特務騎士団もまた対応を変えてくるかもしれません」

「それは構わないが――」

パンにかじりついていたキリシェが、何か言いたげに顔を上げた。

「途中でお菓子屋を見つけたら立ち寄ること。これは譲れない」

「あ、ならアタシだって今日も宝飾店に行きたいよ！」

「そして夜ご飯の時間には大衆飲酒店（パブリック・バー）で乾杯ですわね。レン、どこか寄りたい場所などありますか？」

「……いや、三人の好きな店に付き合うよ」

頬杖（ほおづえ）をついてそう答え、レンは皿の上の堅焼きパンを口にした。

「そのかわり今日は一緒に行動な。それぞれ動いてくれるのは嬉（うれ）しかったけど、昨日は三人を探すの本当に大変だったんだから」

‖ ‖ ‖ ‖ ‖ ‖ ‖

覇都（はと）エルメキア・市街地南側――

冷たく爽やかな風の舞う空。

その下で、すでに覇都の街は人の熱気に満ちていた。

「へえ。朝からこんなに賑（にぎ）わってるんだ」

途切（ざっとう）れることのない雑踏。街の中のいたるところに設けられた広場でも、すでに多くの観光客が出店や大道芸を目当てに集まっている。

その奥では、複数の旅団が真剣な表情で情報交換に熱を出している姿もある。

「ねねレン、あの店ならレンも興味あるんじゃない？」

「武器工房？　それは見たいかも」

白煙を吐きだす煙突付きの大型施設。

そう、道行く観光客や旅団で賑わっているという意味では聖地（せいち）カナンも同じだが、聖地では見られなかった盛況ぶりを見せるのが武器工房だ。

「黒水晶の加工品を見てみたいんだけど売ってるかな」

オルヴィア大陸でのみ採れるという黒水晶。それも覇都近くの鉱山以外では、まともに産出が確認されていないという稀少（きしょう）石だ。

「黒水晶？」

「ほら、王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）が装着してる黒衣の素材だよ。ああいう工房で武器に加工してるはずなんだ」

首をかしげるキリシェにも伝わるよう、レンは武器工房の看板を指さした。

「黒水晶は、たしか法術の力が他の鉱物より固着しやすいんだよ。精霊具の素材としても適してるって聖フィオラ旅学園で習った気がする」

防御法術、結界法術が効きやすい。

その反面、加工には精緻極まりない技術を必要とするのが黒水晶の特徴だ。

「ふむ。それで店先にああも旅団のメンバーが列を作っているのか」

「それだけ強力ってことなんだと思う」

手のひらサイズの短剣一つでも目を疑うような高価格。

だが、それ目当てに何十人という旅団が早朝から武器工房へと詰めかけているのだから、黒水晶がどれだけ強力な素材であるか推し量れるというものだ。

……黒水晶の短剣一つだって入手困難だっていうのに。

……王立七十二階位特務騎士団は、特注品の戦闘衣を全員に用意してる。

組織としての格差。

メンバーの層の厚さで他の旅団の追随を許さず、資金力と装備面においても他を圧倒。その事実が嫌でも伝わってくる。

「……」

「レン、そんなに緊張せずとも、監視の目なら気にしないでいいですよ」

隣を歩くフィアが苦笑。

「この白昼から襲ってくることは考えられません。今こうして後ろにつけているのは監視専門の者たちでしょう。覇都を守る特務騎士ですらありません」

「……俺もわかってるつもりなんだけど」

自分たちをつけ回している監視。

高級宿泊レストランを一歩外に出た時から、時には老人が、時には若い男女の二人組が、尾行役を頻繁に切りかえながら常に一定距離を保ってつけてきている。

しかしレンがそれに気づいたのは、諜報員の存在をフィアに知らされてからだ。

……覇都の諜報員。

……防衛のための特務騎士だけじゃなく、こんな密偵まで抱えこんでるのか。

そしてレンにとって何よりの気がかりは。

これだけ覇都を観察して回っても、王立七十二階位特務騎士団をまだ一人も見かけていないという

ことだ。

「姿、見せないのが不気味だなって思って」

「あの城で待ってる。そういうことなのでしょうね」

背後へとふり返るフィア。

彼女が見上げるのは市街地の北側。わずかな勾配が続く上り坂の、その先だった。

――古代城イスタルシル。

王立七十二階位特務騎士団の守護する難攻不落の要塞。凱旋門と呼ばれる砦を突破しなければ、古代城の内部に侵入することさえ許されない。

「まあ焦らずとも……あら？」

言いかけた言葉をなかばで止めたフィアが、珍しくも驚いた様子で目をみひらいた。

その場で立ち止まって見つめる先――

「ねえレン、あそこ面白そうですよ」

「あの広場？　ああ、確かにすごい人だかりだけど」

フィアの示す先の場所だけ、人通りがぽっかりと消滅してしまっていたのだ。

すべての人が広場へ。

互いの肩が密着するくらいに詰めているのに、それでも入りきらずに広場の外に溢れてしまっている。さらには家屋二階の窓から広場を見つめている者、近くの木立に昇って広場を見つめている者まで。

しかも、それで終わりではない。立ち止まっているレンたちを追い越して、次々と広場に向かって人が流入し続けている。

「何だ？　昨日はこんなに騒がしい広場などなかったが」

「……あ、もしかして！」

キリシェの呟きに相づちを打って、レンは人集りめざして走っていった。

最後列から広場の中心部へと目を凝らして。

「やっぱりエリエスか」

広場に設置された大がかりな祭壇。

その最上段に立っていたのは、金色の法衣で着飾った少女だった。

「精霊信仰の宣教でしょうか。しかし思った以上に本格的ですね」

「俺も、こんなに人が集まるものだとは思わなかった」

祭壇上で、一抱えはある黒表紙の本を詠うように朗読する聖エリエス。

おそらくあれが精霊信仰の聖典なのだろう。広場に集まった者たちも、半数近くが同じような本を大事そうに抱えている。

広場に集まった中には旅団の一員らしき武装者や、法術士らしきローブ姿の少女まで。

「……今さらだけど、エリエスってすごいんだな」

なかば呆然と。

広場を埋めつくす数百人の信徒を目の当たりにして、レンは感嘆の吐息をこぼした。

精霊信仰の救世主と讃えられる聖女――

〝大聖堂の司祭たちは、いつこの信仰が廃れるか不安の日々を送っていました〟

〝その救世主となったのが聖エリエス様でした。幼少時から自在に精霊を召喚し、精霊と対話する姿に、多くの信徒たちは彼女を現代の聖女と讃えました〟

聖地カナンの本霊宮で。

治癒士ネビリムが口にしたエリエスの功績は、決して嘘ではなかった。聖女という称号の偉大さを再認識した気分だ。

「さすがは精霊信仰の象徴です。これほど人の目を集めますか」

「うん。俺も驚いた」

「……でもね、私の言っている意味は、レンの意図とちょっと違うかもしれませんよ」

ぽんと肩をたたくフィアがそっと顔を寄せてくる。

「広場の奥、ご覧なさい」

「――王立七十二階位特務騎士団!?」

民家と民家のちょうど隙間にあたる裏路地。

薄暗い日陰と同化するかのように、漆黒の戦闘衣をまとった騎士。

今まで息を潜めるように身を隠していた世界最大の旅団が、聖エリエスと彼女の周囲をとりまく最高幹部たちを監視していたのだ。

……監視対象はカナン巡礼聖教船。

……しかも周りの一般人は、みんなエリエスに気を取られて気づいてない。

「おそらく下位部隊でしょうが、それでも王立七十二階位特務騎士団が直々に偵察に訪れているというのは興味深いですわ」

今までの自分たちの監視は、一般人に扮した諜報員だった。多少の武芸も積んではいるだろうが、その真価は尾行や監視にあるはず。

だが王立七十二階位特務騎士団は違う。覇都が誇るこの旅団は、一人一人が武技を極めた騎士たちの集団だ。尾行や監視を目的としてこの場に立っているわけがない。

だとすれば——

「カナン巡礼聖教船の動きを牽制……？」

「ええ。これはつまり覇都側も、聖女がここを訪れた理由が単なる宣教活動でないことを知っているという証拠です。聖地を襲った光の怪物。それが覇都からの襲撃者であることをカナン側が疑っていることを知っていると」

エリエスやカナン巡礼聖教船がいつ何を仕掛けても対応できるよう、下位部隊を待機させているのだろう。

「あの陰に隠れている連中だけではなさそうだがな」

道の途中で買った綿アメを舐めながら、キリシェ。

「特務騎士だったか？　王立七十二階位特務騎士団の手先の連中が、この広場に少しずつ集まってきている。わたしたちを尾行していた奴らの仲間だな」

「え。キリシェは何でわかるのさ」

「竜の嗅覚を甘くみるな」

よくぞ聞いてくれたと言わんばかりに竜の少女が胸を張る。

「昨日のうちに、わたしを尾行していた人間の匂いはすべて覚えた。だが相当の数だぞ。既にこの広場を包囲できるだけの数の刺客が、一般人のフリをして潜んでいる」

「なるほど。それを逆に利用できるとよいのですが」

腕組みするフィアが、何かを思案するように空を仰いだ。

「覇都エルメキアの市街地に点在する広場。聖女を目当てに集まる大衆と、それを監視する王立七十二階位特務騎士団。そして凱旋門を突破して敵の本陣へ突入するとすれば……うん。上手く段取りもつくかしら」

「何だよフィア先輩。そんな一人で意味深な頷き方して」

「覇都の構造はある程度調べがつきました。これ以上相手を焦らすのも失礼でしょうし、そろそろ挨拶に

何いましょう」

楽しげに片目をつむってみせるフィア。

くるりと広場に背を向けて、金髪の大天使は颯爽と高級宿泊レストランに向かって歩きだした。

「相手は世界最大の旅団・王立七十二階位特務騎士団です。古代城イスタルシルを拠点とする彼らをはじめ、その下位組織にあたる特務騎士も一人一人が最高峰の剣士たち。対する『再来の騎士』はわずか四人。大事なのはタイミング。仕掛けるべき時は――」

‖‖‖‖‖‖‖

「明日の早朝、といったところかの」

イスタルシル支城。

冷たく張りつめた空気のなかを、嗄れた老人の声が幾重にもこだまして伝わっていく。

序列四位『狂刃』ナーフレス。

一方で。

「旅団『再来の騎士』が、昨日今日とで市街地を探索しているのは監視から報告を受けている。この二日で、市街地に目的の物が無いということは奴らも理解したはず。ゆえに城への侵入を謀る……か」

杖を支えに立つ老人の前に立つのは、片手半剣を携えた壮年の騎士だった。

短く切りそろえた赤銅色の髪に、冷たい灰色の双眸。戦闘衣から露出する肌は幾年もの修練のなかで灼熱の陽に晒され、黒の甲冑と同化する褐色に日焼けしている。

序列二位『外法騎士』カサディン。

「奴らの狙いは十中八九、虚構精霊の製造施設を発見することだろう？」

「左様。覇都からすれば『再来の騎士』は不法侵入者となる。この古代城が我らの拠点であることを踏まえれば、地の利は儂らにある。戦闘に時間をかけるほど自分たちが劣勢になることは奴らも心得ているはず」

「凱旋門の防衛は？」

「普段と変わらぬよ。もともと二大高位存在――天使、悪魔、竜からの報復を想定しての警備態勢ゆえにな。貴重な戦闘情報を採れる絶好の機会でもある」

カツッ、と足下の床を金属杖で突いてみせるナーフレス。

「古代城への入口は、奴らも承知のとおり凱旋門ただ一つ」

不落の要塞。

一見すれば石造りの城砦だが、その真の姿は失われた術式によって守護された法術仕掛けの絶対防衛装置だ。

さらに、城砦の内側には弩砲部隊が常駐。

凱旋門の扉を通らずに城壁を越えようとした者を片っ端から迎撃する。無論、使用される矢にはすべて対天使刻印・対竜刻印が付与されている。

「たとえ天使、あるいは疾竜を率いたとしても空からの侵入は適わぬよ」

「……『碑文の三賢者』の賜か」

押し殺した声をもらす外法騎士カサディン。

「だが、その程度のことは『再来の騎士』も理解しているはずだ。天界に攻め入った時、あの英勇の再来は、私の装備を一目で対天使装甲と看破した。おそらくは大天使フィアの知識によるものだろうがな」

「そう。互いに、互いの喉元に食らいつくだけの力も知恵もある」

禍々しい笑みを浮かべる老人。

「駆け引きじゃよ。最後にモノを言うのは――」

‖ ‖ ‖ ‖ ‖ ‖ ‖

「意志と意志のぶつかりあい。互いの意地の張り合いですわ」

高級宿泊レストラン二階。

レンの部屋のベッドに腰かける金髪の大天使が、至極当然といった口調でそう告げた。

「昨日は別々に、そして今日は四人で市街地を巡ってみました。けれど対天使装甲の研究拠点や光の怪物が隠れていそうな場所は一切なかった。そうですよねエリーゼ？」

「うん。アタシの霊知にも何一つ引っかからなかった。残すところはイスタルシル城っていう城の内部だ

けだね」

　ベッドに寝そべりながらの先代魔王。

「というわけで城に突っこむんでしょ？」

「ええ。ですが私たち四人まとめて侵入するのは危険を伴います。なにせ城の中にどんな仕掛けがあるかわかりません。対天使装甲もそうですが、E立七十二階位特務騎士団の全容がいまだ謎のまま。そこで先ほど伝えた作戦です。レン、大丈夫ですね」

「……二手にわかれて時間差で古代城に潜りこむ、だろ？」

　フィアに向かって頷いて、レンはその場にしゃがみ込んだ。

　絨毯の敷かれた床に座って片膝を立てる。

「ちなみに先輩、この話ってエリエスには？」

「大枠は伝えてありますわ。カナン巡礼聖教船も独自に動く予定で進めているようですが、基本はお互いに別行動ということで合意は得ています」

「わかった。俺もそれでいいと思う」

　自分たちとエリエスでは根本的な立場が違う。

　そもそも今回、何も知らない一般人から見れば、自分たち『再来の騎士』の方が覇都の古代城に乗りこむ悪役なのだ。そこにエリエスが荷担するとなれば、聖女としての彼女の立場まで危うくしてしまう。

「市街地で手がかりが掴めると良かったのですが……」

　ベッドに腰かけて足を組み替えるフィア。

「今はまだ、聖地を襲撃した光の怪物が覇都エルメキアの刺客であるという決定的な証拠を掴めていません。E立七十二階位特務騎士団の陰謀を証明する証拠が揃ってない以上、城に忍びこんだ時点で私たちは不法侵入者となるわけです。覇都から見ても、そして世界中の都市から見てもね」

「……賭けだよな。俺やエリエスを襲った光の怪物が、E立七十二階位特務騎士団の命令で動いてるって証拠を突きとめられれば、俺たちの勝ち。聖地の安全を犯した重罪者ってことで覇都に責任を追及できる」

「ええ。ですが証拠を掴めなければ私たちの負けです。旅団『再来の騎士』は、覇都エルメキアを襲撃した悪名高き犯罪者として世界中に指名手配されるでしょうね」

　そう言いながらも、穏やかな笑顔でフィアがウィンクしてみせる。

「でも心配しないでくださいね。レンが地上で指名手配されても、私が特別待遇でレンを天界に招待しますわ。地上の人間の追及など気にせず暮らせますよ」

「……ありがと先輩。でも、そういう保証はまだ大丈夫だよ」

「あら？　というと？」

「さっきは賭けって言ったけど、本当は俺、今回のこと失敗させる気なんて無いからさ。だから大丈夫」

　意外そうに首をかしげる大天使。

　滅多に見せないフィアの驚きの表情に内心こっそりと苦笑をこぼして、レンはゆっくりと天井を見上げた。

「俺たち四人が世界中から指名手配されてもさ、多分逃げようと思えばどこにだって逃げられると思うんだ。人目につかない場所なんていくらでもある。だけど……」

「だけど？」

「この旅団は、三百年前に英勇が残した大切な形見そのものだろ？」

　英勇に率いられた彼女たちが三百年後の現代、彼の残した世界録を見つけるために再び集まったのがこの旅団だ。

「穢したくないなって……さ。俺たちのやってることはきっと正しいことだから。それを、こんなところで旅団の名に傷をつけたくないんだよ。この程度のことで躓いてたら英勇に合わせる顔がない。この旅団、大切にしたいから。なおさらね」

「――――」

「――――」

　瞬きさえも忘れて目を開けたままの大天使と先代魔王。

　そんな二人を後目に。

「よく言った」

　優しく肩に触れる指先。レンのふり向いたその先に、見知った銀髪の少女が、しっとりとした微笑を湛えて立っていた。

「そう言えるのがお前の好いところだな。あの男の力強い威光とはまた違う。レン、お前が大切にするべき感性だ」

「そ、そうかな……？」

「うむ。まあ明日は任せておけ。凱旋門とやらを突破できるよう、私がお前を後押ししてやる。先に城の中で待っていろ」

　自信に満ちた顔つきで断言する竜姫。

「ちなみに、この幼稚な先代魔王には期待しなくていいぞ」

「キリシェには言われたくないね。ってことで任せてよレン、こういうイタズラは魔王（アタシ）の得意分野なんだから」

ベッドから上半身を起こす先代魔王。

そして。

「……失言でしたわね。私としたことが恥ずかしい限りです」

まばゆい金髪の先をくるくると指で巻きながら、フィア。

バツの悪そうな照れ笑いを浮かべて。

「レン、あなたの言うとおりでしょうね。失敗した時の保険など必要なかった。失敗してはいけない。こんなところで躓くわけにはいかないのですから」

「でも俺たち、明日は悪役だろ？」

「ええ。悪役らしく大暴れするとしましょう。王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）の画策（かくさく）、ここで断（た）ちきるためにもね」

愛らしい仕草で首をふってみせる金髪の少女。

竜姫（りゅうひめ）、先代魔王、大天使――三界を代表する最強の姫たちに囲まれて。

「負けられないよな……」

レンは、そっと両の拳（こぶし）を握りしめた。

Record.3　突入、そして衝突

1

雲一つない天上。

地平線からゆっくりと陽が昇るとともに、夜の帳によって黒褐色に染まっていた空が、白を帯びた蒼穹へと穏やかに色を移していく。

覇都エルメキア・市街地南側――

「さすがにこっちの大陸だと朝が寒いわね。カナンとは大違い」

吐いた息が、空中でまたたく間に白い靄となって流れていく。

ほのかな肌寒さに背中が粟立つのを感じながらも、エリエスは手元に抱えていた黒表紙の聖典へと目を落とした。

「……くしゅん！」

「ほらエリエス様、またそんな薄着でいらっしゃって。温かくしないと風邪をひきます」

両肩に触れる布の感触。

エリエスがふり向いたすぐ目の前に、濃紫色の法衣をまとった女性が立っていた。

治癒士ネビリム。

カナン巡礼聖教船の最高幹部であり、常にエリエスの傍らに控えている側近だ。年齢は二十代半ば。自分と十歳も離れていないはずなのに、その麗しい相貌と落ち着きはらった大人の女性の雰囲気で、エリエスから見ても頼りがいを感じさせる。

「法衣、お召しになってくださいね」

「……わかってるわよ」

肩にかけられた法衣に袖を通す。

子供の頃からのエリエスの癖だ。本を読む時には薄着の方がいい。その方が全身の感覚が鋭くなって、読んだ本の内容がより頭に入ってくる気がする。

「二千五百ページ弱の聖典です。一言一句、暗記されているでしょう？」

「見てる方が落ちつくの。私だって、まさかこんなに信徒が集まるとは思わなかったから」

精霊信仰の宣教活動。前回エリエスが覇都（はと）を訪れた時よりも、圧倒的に大規模な人集（ひとだか）りができていた。それも昨日の時点でだ。

二日目となる今日は、昨日の人集りが集客効果となってさらに人が集まるはず。

「ネビリム、広場の様子はどう？」

「既に信徒で埋まっています。昨日はエリエス様の朗読が始まってから広場が埋まりましたが、今朝はもう広場に入りきらない様子ですね。ただし……」

祭壇（さいだん）の奥。広場に設けられたテントから顔を覗（のぞ）かせて、ネビリムが今ひとつ釈然としない様子で渋面（じゅうめん）を作った。

「信徒でない者も、相当数、潜（もぐ）りこんでいるようですが」

広場に「集まる」ではなく「潜りこむ」。

彼女がわざわざそんな言葉を選ぶのには、当然それだけの意味がある。

「城下街の防衛にあたる特務騎士（きし）たち。広場を取り囲む態勢ですね。……なるほど、監視ではなく包囲であると」

「挑発に乗る気はないわ。私たちはあくまで宣教に来ただけだから」

あくまで視線は聖典へと注ぎながら、エリエスはページをめくる手を止めた。

……王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）も意外に露骨（ろこつ）じゃない。

……私たちが覇都に来た目的なんてわかってる。そう言いたいんでしょ？

そして、それゆえの警戒態勢なのだろう。

広場を包囲し、万が一にでも自分たちが怪しい素振（そぶ）りを見せれば、精鋭の特務騎士たちがすぐにでも雪崩（なだ）れこんでくる。

「彼らは、どうするつもりなのでしょうね」

「レンたちのこと？」

「はい。古代城イスタルシルに侵入するという話でしたが、カナン巡礼聖教船（わたしたち）にここまで厳重な監視の目がついている現状、覇都（はと）全域でも警備態勢が強化されているはずです。となれば、まず最初の難題として立ちはだかるのは――」

「凱旋門ね」

ネビリムの危惧する気持ちはわかる。

凱旋門には幾重もの法術結界が施され、その内側には弩砲部隊が常在。さらに外側も数多くの特務騎士に守られている。

……覇都の特務騎士は、ただの警備兵じゃない。

……その全てが王立七十二階位特務騎士団の候補者たち。

覇都の防衛を担う騎士に弱者は一人とて存在しない。

世界最大の軍事都市。その難攻不落の砦をわずか四人でどう突破するのか。たとえ伝説の三大姫たちでも容易くはないはず。

「……」

「エリエス様、お時間です」

広場を視線でうながすネビリム。

彼女が開いたテントの幕から覗く、まぶしい日射しと蒼穹。そしてその奥の広場では、既に聖女の登壇を待つ民衆の喧噪がやむことなく響いている。

「……そうね。今さら考えても仕方ないことだから」

小さく息を吐き、聖典を小脇に抱えて立ち上がる。

テントから広場へ。

信徒と、そして覇都の監視。双方の視線を浴びながら足を進め――

大気を震撼させる、獣の咆吼。

「今のうなり声は……！」

まるで聞き覚えのない獣声だった。

エリエスが過去に対峙してきたどんな徊獣の咆吼とも違う。

「何事だ!?」

エリエスたちが動くより先に、怒号を上げて身構えたのは広場に集っていた特務騎士、そして一般人に扮していた密偵たちだ。

「カナンの連中か!?」

「いや、不審な点は見られなかった。まさかもう一方の奴らが……」

浮き足立つ覇都の防衛部隊。

彼らを遠くから盗み見ながら、エリーゼも咄嗟に周囲を見わたした。

……レンたちの仕掛け？

……だけど今の咆吼はいったい？　何をするっていうの。

エリエスの眼前で。

広場の特務騎士たち目がけて黒い影が襲いかかったのは、その時だった。

2

「さてと、レンも凱旋門近くに到着したみたいだし」

覇都エルメキア・市街地南側――

周囲の建物の中でもっとも高い展望台。その屋上から周りの景観を一望し、エリーゼは声を弾ませながら宣言した。

「そろそろイタズラ始めちゃおっかな」

取りだしたのは、小剣ほどもある巨大な鋭利な牙だ。

濡れ羽色に輝く獣の牙。三百年前、エリーゼが魔皇姫として冥界を統治していた時代に、ある主従契約を結んだ伝説の獣から手に入れた。

恐ろしいほどに尖ったその牙を――

「誇り高き不屈の冥獣よ。貴様の牙、今一度、主の肉体に突きたてよ」

幼き姿をした先代魔王は、自らの手の甲に突き刺した。

……ぽちゃん。

たった一滴。

褐色の皮膚から溢れた真紅の液体が、手の甲を伝って指先へと流れ落ち、指先から一滴の滴となってエリーゼの足下へとしたたり落ちる。

暗色の法術円環。

みるみるうちに巨大化する光の環が、屋根に収まりきらず空中にまで拡がっていく。

——使い魔招来。

冥界の審門と類似した転移(てんい)事象を引き起こす悪魔の空間法術だ。主従関係を結んだ使い魔を、主(あるじ)の下へと冥界から招き寄せる。

そして先代魔王エリーゼの使い魔は、冥界でもっとも恐れられた伝説の魔獣。

「やあ三頭の冥犬(ケルベロス)、久しぶり。元気してた？」

『魔皇姫エリゼリス……力を失った哀れな落魄(らくはく)者……』

エリーゼを見下ろす巨大な影。

それは三つの頭を有する犬の怪物だった。体高だけで人間を優に上回る巨体。後ろ脚で立ち上がれば、その全長は民家の二階にまで届くだろう。

『貴様……我が首の二つを鎖で縛(いまし)めているとはいえ、その落ちぶれた身で我を使役(しえき)しようとでも？　過ぎた自尊は身を滅ぼすぞ』

「相変わらず気難しい犬だねぇ。なに？　日射(ひざ)しが嫌で影しか出てきてないの？」

怨念めいた声の魔獣を見上げる先代魔王。

腰に手をあてた暢気(のんき)な様子で。

「まあそれはさておき。力を貸してよ。大暴れには相応の華が必要だからね」

『……我が影にしか干渉できぬ貴様に……我が従うとでも？』

「その影だけでいい」

『なに？』

自分を見下ろす伝説の魔獣。

三頭の冥犬(ケルベロス)自身の言葉どおり、いまエリーゼの前に立つシルエットは魔獣本体ではなく、肉体から切り離された影だけが立体化して浮かびあがっている状況だ。

その首へと指先を向けて、エリーゼが不敵な微笑(びしょう)でもって言葉を続ける。

「三頭の冥犬(ケルベロス)、妾(わらわ)がお前を気に入っているんだよ。かつて言ったはずだ。束縛する気など毛頭ない。使い魔に選んだのは、お前がいればより愉(たの)しいと思ったから。興の華、お前と共に心ゆくまで咲かせたい。それだけさ」

『……』

「今もそう。冥界(めいかい)を跋扈(ばっこ)するお前を長く見ていなかったから、久方ぶりに見たくなった。それではダメか？」

『……変わらぬなエリゼリス』

激昂を示す真紅の瞳が、徐々に鎮静の灰色へと変わっていく。

『影だけを貸してやる。地上は眩しい』

「なんだ、恰好つけてたけどやっぱり太陽の光が苦手なだけじゃん」

『……』

「ああウソウソ！　冗談だって、アタシが悪かった！　だから帰らないで！」

法術円環へと沈んでいく獣の影をあわてて引き留める。

影として具象化した怪物。

その足を一撫でし、エリーゼが眼下に広がる大通りを指さした。

「いい子だよ。さあ、楽しい大暴れをはじめよっか！」

伝説の魔獣の咆吼が、覇都エルメキアを震わせた。

突如響きわたった咆吼に、覇都の住民、旅団、そして市街地の警備にあたる特務騎士の視線が一斉に礼拝堂の屋上へと注がれる。

「……徊獣だと！」

「あれは、まさか三頭の冥犬！　冥界の魔獣がなぜここに!?」

悲鳴と怒号が飛び交うなか、展望台から大通りの中心へと飛び降りる三頭の冥犬。

周囲の人間すべてが恐怖に凍りつくなか、再び咆吼。

そして舗装路を蹴って走りだす。大通り――そこは既に、聖女を一目見ようと集まった精霊信仰の信徒で溢れかえっている。

その人集りめがけて冥界の魔獣が突進。

悲鳴。その場の者の多くが路地の隅に逃げこむも、何が起きたかわからない子供が逃げそびれ、そこに三頭の冥犬の巨体が迫る。

突進に巻きこまれる。

気づいた子供がハッと目を見開いた瞬間。

『――――』

三頭の冥犬の突進が、子供の身体をすり抜けた。

「……え？」

ぽかんと目を瞬かせる子供。

そんな様子を歯牙にも掛けず、通りを駆ける冥界の魔獣がさらに加速していく。

「あはは、驚いた？　大丈夫だよ、『影』だけだから」

展望台の屋上にちょこんと座って、眼下の騒動を楽しげに見下ろすエリーゼ。

最初の子供だけではない。三頭の冥犬が接触する人間の誰一人として負傷はなかった。魔獣の方が、人間を幻影のようにすり抜けていくからだ。

「騒乱を抑えこめ！　この魔獣の狙いは陽動だ、我らの注意を引きつけることにある！」

「あれ。勘の良い人間もいるじゃない」

一人の特務騎士が放った言葉に、エリーゼは小さく声を弾ませた。

そう、狙いは広場を中心とした大混乱だ。

噂に名高い聖地の聖女が可憐な少女――その目撃談が一夜にして噂となって、精霊信仰の信徒だけでなく観光客や一般人、さらには覇都を訪れていた旅団たちも興味を引かれてこの広場に集まりつつある。

そこへ三頭の冥犬の襲撃だ。

「これだけの数の人間が騒ぎたてたら、さすがの特務騎士も事態の沈静化に追われて当分まともに動けない。市街地全体の防衛機能も停止しちゃうよね？」

広場の混乱がまたたく間に広がり、恐慌として膨れあがっていく。

だが――

「総員、三頭の冥犬を向かい撃て！　冥界の魔獣とて、単なる陽動役の子犬に過ぎん！」

大通りから広場へと駆けぬける魔獣。

その動きを読んで、広場の人口に騎士とローブ姿の法術士が集まってくる。

「三頭の冥犬が広場に到達する前に潰す気？　まあ確かに、魔獣を退治するのが混乱を解決する最善策だろうけどさ」

魔獣と、特務騎士の部隊。

真正面からぶつかり合う両者の姿を、はるか高みから見下ろして――

「でも残念。アタシの使い魔を舐めすぎだから」

エリーゼの不敵な呟き。

騎士の振り下ろした剣が、黒き魔獣の頭部めがけて振り下ろされる。

直後、剣で斬られたはずの魔獣の巨体が分裂した。一体が二体、二体が四体へ。さらに四体から八体へ。

騎士の剣を受けるたびに、切り裂かれるどころか分裂し増殖していくのだ。

「……馬鹿なっ!?」

驚愕の悲鳴を上げる防衛部隊。

「えへへ。人間が初めてアレを見たら驚くよね」

広場の真ん中で吼える三頭の冥犬。

祭壇上のエリエスは何かを勘づいたようだが、そうでない信徒たち、そして広場を包囲していた特務騎士たちは、魔獣の影を前に困惑しきっているのが覗える。

と――

風を切り裂いて何かが飛来する気配。

「っ!」

座っていた場所から瞬時に跳びはねて、エリーゼは屋根の後方へと着地した。

頬に感じるわずかな痛み。

「矢……？」

鏃がかすめていった頬がわずかに赤くなっている。微弱とはいえエリーゼが常に展開している障壁を貫き、そして肌に傷をつけたのだ。

「対悪魔用の失われた技術。なるほどね。三頭の冥犬が倒せないなら、使役者であるアタシを倒せば使い魔も消える。よく調べてるじゃない？」

「旅団『再来の騎士』の一人だな」

展望台の屋上。

さらには周囲の家屋の屋根へと、一人また一人と姿を現す特務騎士。

「覇都の治安妨害罪で貴様を拘束する。投降してもらおうか」

「治安妨害？　演技が下手だねぇ。ホントは心待ちにしてたんでしょ？　アタシらが動くことで正当防衛の理屈が成り立つ。これでようやく、何も知らない一般人の前でも堂々とアタシらを捕縛できる。違う？」

「さあな」

そう答えたのは、ただ一人、その場で黒の戦闘衣をまとった長身の騎士だ。

――王立七十二階位特務騎士団。

この男が広場全域の統率を任された幹部だろう。周りの特務騎士と比べて、エリーゼの目から見て

も明らかに雰囲気が別格だ。

「拘束しろ。あの姿でも正体は悪魔だ。消滅させるつもりでかかれ」

「言ってくれるじゃない」

斬りかかってくる騎士から距離をとって、後方へ。

その勢いのままエリーゼは展望台の屋上から身を投げ出した。

曲芸師のように空中で身体を一回転して民家の窓枠へ着地。三角跳びの要領で、通りを隔てた家屋の屋上めざしてさらに高く飛び上がる。

「さあ出番だよ。アタシの可愛い愛玩動物たち！」

懐から琥珀を取りだし、地上へ、そして民家の屋上へと投げつける。

冥界の千年樹の樹脂を凝縮させた宝玉だ。

古代召喚術の触媒としてレンに授けたものは、内部にエリーゼの髪の毛を封じ、それを媒介に魔王としての力を注入していた。

だが今回、エリーゼの投げた琥珀に封じられているものは――

「おいで夢魔」

金色の宝石が割れ砕け、灰色の障気に包まれた黒馬が顕現する。

大きさは人間世界の戦馬と大差ないが、その背中には鴉のソレに似た翼が生えており、地上を見下ろす眼光は黄金色に輝いている。

魔獣・夢魔。

冥界の荒野を駆けめぐる気性激しい徊獣だ。徊獣でありながらも悪魔と似た障気を纏い、鋼の剣程度ならば触れることなく腐食し崩壊させる。

そしてもう一つ、この黒馬にはある特殊な力が宿っている。

「夢魔の伝説、知ってる？」

交叉する騎士と夢魔。

振り下ろされた剣は空を切り、かわりに夢魔の突進も紙一重でかわされる。

だが、その場に倒れたのは重装備の剣士の方だった。

「昏睡の障気か……っ！」

徊獣でありながらも悪魔と同じ障気を纏った獣。この障気は、ソレを吸いこんだ者を強制的な眠りへと誘う作用を持っている。

「さ、地上の騎士を眠らせちゃえ！」

四つの琥珀から生まれた四体の夢魔（ナイトメア）が、縦横無尽に大通りを駆けめぐる。

その照準は、剣を握る特務騎士たち。

「三日三晩は目が覚めないよ。楽しい夢、見れるといいね」

「なるほど。便利な使い魔を持っているな」

次々と倒れていく特務騎士（きし）たち。

その光景を前にしてなお、黒衣の剣士の表情に揺らぎはなかった。

「法術部隊（ほうじゅつ）！　この魔獣を焼き尽くせ！」

噴（ふ）き上がる炎。

法術円環（えんかん）から生まれた紅蓮（ぐれん）の輝きを前に、冥界（めいかい）の黒馬が怯（おび）えたように動きを止めた。

「……夢魔（ナイトメア）の弱点を知ってる!?」

「あいにく冥界全土の四割において探索（たんさく）は完了している。その中には、夢魔（ナイトメア）の棲（す）まう沼地も含まれていた。そういうことだ」

炎に煽（あお）られ、二体の夢魔（ナイトメア）が再び琥珀（こはく）の内部へと封印されていく。

残り二体も既に法術士たちが取り囲んでいる。

「詰手（チエツクメイト）。諦めろ、お前という駒は拘束済みだ」（あきら）

民家の屋上で――

向かいあうエリーゼと黒衣の剣士。そして周囲には多数の特務騎士と法術士。眼下の大通りと隣家の屋根にも部隊が控えている。

「アタシ一人を捕まえるのに、ずいぶんな数の防衛部隊を割いてるね？」

「お前さえ拘束すれば全（すべ）て片が付く。お前を人質に二人目を。あとは同じ要領で三人目と四人目を捕らえるだけの話だ」

「なるほどねぇ。そういう意地の悪い発想、アタシも好きだよ。罠（わな）とか騙（だま）しあいは大歓迎。でも一番好きなのは――」

全方位を取り囲まれながら、褐色（かっしょく）の幼女の姿をした悪魔がにこりと笑（え）んだ。

「そういう悪い発想をする奴（やつ）を、もっと悪いことしてハメちゃうことなんだけどさ」

「……どういう意味だ？」

「アタシが呼んだ三頭の冥犬（ケルベロス）。アイツをなぜ広場に向かわせたと思う？」

「知れたことを。広場に集った人間を怯えさせて混乱を誘う。あわよくば覇都全域に恐慌を広げるためのものだろう」

「はい0点」

「なにっ!?」

片眉をつり上げる黒衣の騎士。

「混乱目的なら三頭の冥犬を大通りに待機させても大差ないもん。大事なのは場所なの。冥界の魔獣がいきなり広場に現れたら、普通の人間なら怖くて逃げだすのは当然でしょ？　あの広場がここらで一番広かったんだよね。精霊信仰の宣教用に使われるくらいだし。だからこそあの場所を選んだってわけ」

「何が言いたい……？」

「アタシの狙いは、広場にいる人間を一人残らず追い出すこと。いやー、面白かったよ？　気が向いたらまた遊ぼうね」

楽しみつくした。そんな満足げな笑顔でエリーゼが背後へとふり返る。

祭壇の敷かれた広場の方向へ。

「いいよキリシェ。アタシは十分楽しんだから交代しよっか」

「――というわけだ。出てこい地母竜」

はるか地底から生まれた鳴動が、覇都エルメキアを震わせた。

無人となった広場。

聖地カナンの聖女を迎えるために設けられた祭壇も、控え室がわりのテントも、そして地盤も、何もかもひっくり返し崩壊させる超質量の高位存在。

広場の岩盤を割り砕き、現れたのは覇都の展望台をも上回る体格の巨竜だった。

地母竜。

退化した一対の翼、そして蛇に似た流線型の体型が特徴となる竜だ。

その生態はいまだ未知。灼熱の大砂漠の奥地にのみ生息し、発見事例そのものが数える程しかない幻の竜種だ。

「馬鹿な!?　あの地母竜を……人間の都市に呼びよせたというのか!?」

黒衣の騎士が初めて漏らす驚愕の感情。

配下である特務騎士（アリア）、そして法術士たちにいたっては、まるで金縛りに遭ったかのように微動だにできぬまま巨竜を見つめ――

「よく来てくれた。久しいな」

そんな地母竜に声をかけ、キリシェはその頭部に飛びのった。

『お元気ぶりです姫様。封印からお戻りになられたという話は聞いていましたが、お会いするのも三百年ぶりですね』

「お前も元気そうで何より。そして早速だが一つ頼みがある」

地母竜の頭を撫（な）でてやりながら。

もう片方の手で、キリシェは眼下の大通りを指さした。

無人の大通り。エリーゼの放った三頭の冥犬（ケルベロス）により、大通りにいた人間はすべて遠くに逃げていった状態だ。

「この道をまっすぐ進め。ただし、脇にある人間の建造物は壊さないよう気をつけろ」

『かしこまりました』

覇都をゆるがす地響きを従えた地母竜。

あらゆる竜種の中でも別格の巨体を誇（ほこ）る竜の登場に、広場へと集結した特務騎士たちが圧倒され立ちつくす。

「待って。アタシも乗るってば！」

そんな竜に、ただ一人恐れを知らずに飛びのってきたのは褐色（かっしょく）の幼女だ。

『……魔皇姫（まこうひ）エリゼリス？』

「今はエリーゼだよ。それより気をつけて。後ろの人間たちが法術（ほうじゅつ）で狙（ねら）ってるからね」

巨竜（きょりゅう）の尾が、突然に紅蓮（ぐれん）の炎（ほのお）に包まれた。

複合法術。複数人の法術士（アリア）、そして精霊使（スピリット）いとが法術を織り合わせる高等術式だ。この場に集（つど）っている防衛部隊が結集して同時発動したものだろう。

『……』

「熱かった？」

『人間の法術はくすぐったいですね』

けろりとした様子で答える地母竜（ちばりゅう）。その言葉どおり、炎に包まれたはずの尾は焦（こ）げ目どころか鱗（うろこ）一つ傷ついていない。

『姫様、あの人間たちは？』

「構わなくていいぞ。ここでの目的は奴らの注意を集めることだからな。この調子でゆっくり道を進んでいけ」

「おおっ、さすがに壮観だね！」

地母竜の頭から覇都の街並みを見下ろすエリーゼ。

「市街地で特務騎士を引きつけることで、凱旋門の守りを薄くする――作戦は順調だね。まさか地母竜を呼んで来るとは思わなかったけど」

「人目を集めた方がいいという話だったからな」

覇都の遙か西の大砂漠に棲まう地母竜。

特務騎士たちも初めて遭遇する幻の竜だ。それもこの桁外れの巨体となれば、嫌でも目を引くことになるだろう。

「この後はどうする？」

「んー。あんまり細かい作戦は決まってなかったしね。地母竜を止めるために応援部隊がどんどん集まってきてるし、このまま時間稼ぎでいいんじゃない？　レンたちが凱旋門を突破したら、アタシらもそれに続くってことで」

「そうするか」

地母竜の頭の上で立ち上がる。揺れる足場も意に介さず――

全ての竜を束ねる少女は、上空へと吹き上がる気流に髪をなびかせながら、両手を広げて心地よさそうに蒼穹を仰いだ。

「うん。やはり地上はいい。船酔いさえなければコッチのものだ」

3

覇都をゆるがす鳴動。

そして彼方から響きわたる獣の咆吼。

「キリシェとエリーゼ、うまく敵の目を惹きつけてくれてるようですね」

「この地鳴りと獣の声が……？」

「キリシェが呼びよせた竜の仕業でしょうね。なにせ竜の姫ですから、彼女が一声かければ世界中から

同胞が集結します。あと、さっきの獣の咆吼はエリーゼの使い魔でしょうね。その証拠に、ほら」

民家の陰に身を潜め――

すぐ隣に立っているフィアが、陽のあたる大通りを指さした。

「凱旋門が」

「……閉じていく!?」

古代城イスタルシルへと続く、見上げるほど巨大な金属製の扉。その扉が、意志を持っているかのように閉まっていく。

「古代城を護衛する王立七十二階位特務騎士団が、市街地の異常を察知したのでしょうね。凱旋門を閉じれば侵入者が城へと入る経路は断たれる。ですが、それは苦肉の策であると自白してるも同じ。なぜなら――」

閉じきった扉を見つめる大天使。

「凱旋門の外で警備していた特務騎士たちのほとんどが、最低限の数を残し、キリシェとエリーゼの二人を拘束するために向かっているからです」

「さっき南側に向かった大部隊だろ？」

暴れ回るキリシェとエリーゼを捕まえるために、特務騎士の多くを派遣している。

「頃合いです。私たちも行きましょう」

そう言った瞬間、隣にいた金髪の少女の姿が消失した。

「隠蔽術式？」

「はい。ちゃんと目の前にいますよ。レンにも同じ術式をかけてます。天使の結界術式ですから、まず王立七十二階位特務騎士団にも気づかれません」

「俺も？」

まじまじと自分の身体を眺めても何一つ変わりない。あえて言えば、服の周りをほんのわずかな光の粒子が覆っているということだけだ。

「凱旋門まで走ります。足音を聞いてついてきてください」

「わかった」

大地を蹴りつける力強い音。

それを皮切りに、レンは民家の陰から飛びだした。

覇都の北から南端まで延びた中央道を、まっすぐ北へ。市街地の南側目指して走っていく特務騎士たちと交叉し、置き去りに駆けぬける。

——凱旋門。

古代城イスタルシルへと続く唯一の扉へ。

その左右に待機するのは十人近い特務騎士と、それを指揮する黒甲冑の女性剣士だ。

「フィア先輩、この凱旋門を開けるの任せていいんだよな！」

「ええ。さっきも言ったとおり、この扉も石造りの城砦も、相当に強固な法術が幾重にも重ねて施されているわけです。つまり——」

「結界法術を解呪する？」

「とりあえず殴って壊しちゃいましょう」

「……はい？」

フィアの足音が加速。

直後、台風にも劣らぬ規模の旋風が凱旋門を覆いつくすように吹き荒れた。

大天使が思いきり拳を振り上げた際の余波。レンがそう気づいたのは、凱旋門にたどり着いたフィアの一声が聞こえてきた後だった。

「散りなさい」

轟音、そして激震。

十メートル以上ある両開きの金属扉が、その中心部の閂ごと真っ二つに砕けちり、無数の金属片と化して、古代城イスタルシルの城壁まで吹き飛んでいく。

さらに、大天使の拳はそれで終わらない。

凱旋門を跡形もなく破壊した衝撃が城砦にまで伝導、防御法術で固めているはずの石垣が連鎖するように次々と崩れ去っていく。

「……なにこの天変地異」

「これで行く手を遮る物は消えました。古代城まで駆けぬけますよ」

「ちょ、ちょっとフィア先輩!?」

ギリギリまで声を押し殺しながらも、レンは前を走る彼女に声をかけた。

「こんな派手にやらかしたら、姿を見えなくしてても俺らがいるってバレるって！」

古代城イスタルシルの敷地内へ。

が、後方では凱旋門を固めていた部隊が、既に続々と集まってきているのが見てとれる。古代城の王立七十二階位特務騎士団も、旅団『再来の騎士』が凱旋門を突破したことに気づいているはず。

「確かにそうでしたわね。……大丈夫。私は冷静ですわ。間違っても、天界に攻めこんできた不届きな

輩に制裁を。なんて考えていませんし」

「すでに冷静じゃないだろ!?」

「冷静ですわ」

微笑混じりの吐息が伝わってくる。

「この門はキリシェとエリーゼも後から通過しますからね。彼女たちのことも考えるなら、扉は壊しておいた方がいい。それに、こうすることでカナン巡礼聖教船も城の内部に入りやすくなるでしょう?」

凱旋門が消滅したことで強引に城内に入ることが可能になった。

周りにいた騎士たちも、レンたちを探す部隊と、キリシェたちを追う部隊に分断されている。

「カナン巡礼聖教船が一番欲しかったのは、古代城に突入する『名目』です。どうすれば不法侵入と言われずに突入できるのか。一番楽な理由付けは、私たちを追いかけるフリをすること。今の私たちは完全な悪役ですからね」

市街地を混乱に陥れ、凱旋門を破壊して古代城を襲撃した『再来の騎士』。これを拘束するため、カナン巡礼聖教船は王立七十二階位特務騎士団に加勢する。

これで正義の体裁を保ちながら城内へと侵入できるわけだ。あとは自分たちを追いかけるフリをして、本当の目的である光の怪物について探ればいい。

「ね？　彼女が通るためにも凱旋門は破壊した方が良いというわけですわ」

「納得。フィア先輩、冷静だ……」

「まあ、ちょっとばかり殴りたかったのも本音ですが」

「どっちだよ!?」

芝生に覆われた庭園を駆けぬける。

目の前にそびえたつ巨大な灰色の城塞——イスタルシル支城。

「こっちでいいんだっけ」

「ええ。私たちの目的は王立七十二階位特務騎士団の研究施設です。覇都王家のいる本城に用はありません」

古代城イスタルシルは本城と支城とで構成される。

五芒星の形をした本城に対し、その周囲に建設されたドーナツ型の建物がイスタルシル支城であり、王立七十二階位特務騎士団の拠点でもある。

城郭に続く石造りの扉へ。

「レン、飛びますよ」

手を握られる感触。

直後、ばさりと翼が羽ばたく音とともに、レンの身体がふわりと浮いた。

「さすがに真正面から城内に入るのは避けましょう」

換気用の窓を破壊して城内へ。

支城一階。

通路は、陽光さしこむ清澄な雰囲気に満ちていた。

ほのかな青みを帯びた大理石の壁。床に敷かれた絨毯は落ちついた色調の象牙色。

天井に吊られたシャンデリアも決して大きすぎることなく、内装を構成する一つの要素として美しい調和を保っている。

――観光に来た一般人ならば何一つ違和感を抱かずに。

――美しい内装であるという感想を抱き、そこで終わっていただろう。

だが。

古代城イスタルシルという要塞に秘められた罠が発動したのは、その直後だった。

「先輩、姿が!?」

「隠蔽法術をかき消されましたか」

ジッ、という虫の羽音を思わせる雑音。

目の前の空間が陽炎のように歪み、金髪の少女の姿がゆっくりと露わになっていく。

フィア自身が法術を解いたわけではない。

この城に施された何かの仕掛けが、天使の隠蔽法術を強制的に無効化したのだ。

「……私の隠蔽法術を打ち消しますか」

低く押し殺した声で呟くフィア。

「やはりこの覇都は何かが違う。天使の法術をこうも容易に無効化する失われた術式など、私もかつて経験したことがありません」

大理石の壁に触れ、天界最強の大天使が真剣なまなざしでふり向いた。

「この城の中に何かがいるのは確かでしょうね」

「……王立七十二階位特務騎士団以外でってこと?」

「ええ。天界に現れた時から薄々と予感していましたが、ここに来て確信が持てました。天使の結界を無効化する失われた術式を発見するだけでなく、さらに強力なものとして深化させている。これはもう、世界最大の軍事都市だからという理由で説明できる領域を越えています」

覇都エルメキア(エイシエント)に強力な失われた術式と失われた技術(オーパーツ)をもたらした何者かが、古代城のどこかに潜(ひそ)んでいる。

「俺とエリエスが襲われた光の怪物とも関係あるのかな」

「私も気がかりです。ここまでの対天使技術を開発してるとなると、天使の端(はし)くれとしても確実に押さえておきたい秘密ですね。ただ、手痛い誤算は隠蔽法術の無力化です。城内を歩くとなるとさすがに発見されるのも早いはず」

「いや……」

手を水平に上げて、隣を歩くフィアを制した。

「もう見つかってるっぽい」

通路の先から複数の足音。

迷いなく一直線に自分たちの方へと気配が急接近。対し、この通路には身を隠すような場所がどこにもない。

ひたすら通路を後退するか、戦うか。とるべき手段は二つに一つ。

「フィア先輩(せんぱい)――」

「この場で凌(しの)ぎます。戦力は確実に削(そ)いでおいた方が賢明ですから」

金髪の大天使が片手を上げる。

虚空(こくう)に生まれた光の結晶が空中でみるみる凝縮、宝石のごとく煌(きら)めく長弓(ロングボウ)として顕現(けんげん)。大天使の手のひらに収まった。

「さてと、久しぶりなので緊張しますね」

流れるような動きで弓に矢を番(つが)えるフィア。

弓が大きく歪曲(わいきょく)するほどに引き絞り、通路の奥へと狙(ねら)いを定める。

「貴様ら!」

「ここだ、この先の通路に追い詰めろ」

武装した特務騎士(きし)たち。

レンの姿を見るなり、声を張り上げて背後の仲間たちに向かって手を掲げ――

「ごめんなさい」

にこりと微笑(ほほえ)む大天使。

「あなたたちを相手にしている時間はないのです」

射出される矢。

限界まで引き絞られた弓から放たれた黄金の矢が、光の軌跡を空中に描きながら分裂。何百という閃光となって騎士たちを壁に叩きつけた。

さらに第二波――第一声で駆けつけてきた法術士・結界士たちも、その展開する防御法術ごと射貫き、背後の壁まで吹き飛ばす。

「先輩。弓、使えるじゃん……」

「威力は微風みたいなものですわ。とはいえ一度に大勢を相手にしないといけない時には重宝しますね」

意識を失った何十人という防衛部隊を後目に、やれやれと肩をすくめる大天使。

「行きますよ。私は前、レンは後ろをお願いします」

フィアの背中を追って走りだす。

既にここは一般人の立ち入りが許されない制限区域。どこに何があるかわからないからこそ、とにかく一歩でも奥へと進む。

「先輩、後ろ！　また近づいてきてる！」

「やはり挟み撃ちを狙っていましたか」

走りながら弓に矢を番える少女。

すぐ背後の曲がり角まで迫ってきている足音めがけ、ふり向きざまに黄金の矢を放つ。虚空をわたる無数の閃光。

大天使の力を得た矢が、通路に現れた人影を狙い違わず打ちすえた。

「なるほど」

長弓を手にするフィアが、自嘲の笑み。

「対天使装甲、天界で見た時とはまた別のものになっていますね」

「大天使フィア。無類の豪拳と聞き及んでいたが、弓の名手であったとは意外だな」

王立七十二階位特務騎士団。

フィアの矢をまともに受けながら、倒れるどころか誰一人として負傷した形跡がない。

その身にまとう黒の甲冑が、天使の矢をことごとく弾きかえしていたのだ。

「女神法印と竜法印。この場で譲り受ける」

「……単刀直入に言うんだな」

フィアの隣に並び立ち、レンは四人の騎士たちを睨みつけた。

部隊長らしき鎗使いの男から、自分より年下であろう双剣使いの少女まで。武器も年齢も様々だが、その四人全員、今までの特務騎士とは別格の雰囲気を湛えている。

……特務騎士も王立七十二階位特務騎士団の候補官のはずなのに。

……やっぱりこいつらは圧力からして別次元だ。

目の前で相対し、あらためてそう感じる。

「アンタたちの情報源は何だ。女神法印も竜法印も、そう簡単に手に入る情報じゃない。対天使装甲もそうだ。アンタらの裏に何がいる？」

「理解に苦しむな。覇都の城に押し入った侵入者に語ることなど一切ない」

足を前に踏みだす黒衣の鎗使い。

「お前たちは覇都を混乱に陥れた重罪人。そして我々は、お前たちを制圧する覇都の防衛部隊。それだけだ」

「ならば力ずくで調べるだけですわ。ここは通らせてもらいます」

凛とした声でそう応じたのはフィアだ。

新しく取りだした矢の先端に橙色の球体を取りつけるや、再び弓を引き絞る。

「何の真似だ？　この装甲の前では天使の力など――」

「レン、退がりなさい」

鏃の先に突きささっている橙色の球体。

それが天界で見た「あの果実」であることを理解した瞬間、レンはフィアがそう発するより先に身をひるがえして後方へと跳んでいた。

――美しく響く弦の音。

フィアの放った弓が黒衣の騎士たちの足下を穿ち、光の粒となって霧散する。

「それで威嚇のつもりか」

「いいえ、狙い通りですよ」

細い指先でもって、今まさに矢の穿った床を指さす少女。

潰れた橙色の果実。

その実から溢れた果汁が、瞬く間に気化して大気に混ざりあっていく。

「対天使装甲で天使の法術は防げても、天界の実の果汁までは防げないでしょう？」

「……なに？」

手をふる大天使の目の前で、屈強な精鋭たちが次々とくずおれていく。

誰もが皆、苦悶の表情で床に膝をつきながら。

「……なっ……この果実、は……？」

「意識を保っているのは流石ですが、その質問には貴方の言葉をそのまま返しましょう。天界に押し入った侵入者に語ることなど一切ありません」

背を向ける大天使。

先の王立七十二階位特務騎士団が追いかけて来ないことを確認して。

「しかしレン、よく私の意図を察してくれましたね」

「そりゃ学園の時から丸三年のつきあいだし」

ふり返るフィアに、レンは走りながら首肯してみせた。

「あと、先輩がお酒好きなのも知ってるからさ」

天界の宝石樹。

フィアからこの樹の実について教わっていなければ、レンも王立七十二階位特務騎士団と同じく床に倒れ伏していたかもしれない。

〝レン、違いがわかりますか？　匂いをかいでみて〟

〝ん？　あれ、こっちの橙色の実、お酒っぽい匂いがする〟

〝こちらの黄緑色が熟す前の実です。宝石樹の実が熟すことで橙色になり、お酒と似た成分を果肉に蓄えるようになります〟

橙色に熟した果実には、強力な酩酊成分が含まれている。

フィアはそれを美味しそうに口にしていたが、この成分は天使だから耐えられる代物だ。人間であれば果汁が身体に付着しただけで、アルコール中毒に似た目眩に襲われる。

「矢の先端に宝石樹の実を刺して、それを破裂させたんだろ。ていうか先輩？　……俺も、橙色の実を食べないかって誘われた覚えがあるんだけど」

「どうせ『俺は未成年だから』って断られるとわかってましたからね」

いたずらっぽい笑みをうかべる天使の少女。

「とはいえ、今のは苦肉の策でした」

「今のが？」

「私の隠蔽法術を打ち消す仕掛けが城に張り巡らされ、矢に込めた法術さえ無効化されてしまったでしょう？　となれば、接近戦においても思わぬ反撃があるかなと思ったのです。距離のあるうちに矢で倒したかったと」

「……そうだった。ごめん先輩」

　隣を並走する天使の横顔を見つめ、レンは小さく唇を噛んだ。

　未知の対天使装甲をフィアが警戒するのは当然。だとすれば自分こそが前衛に出るべきだった。

「次、俺が前に出るから」

「あら？　別にそんなつもりで言ったわけではないのですが」

　そう答える少女の表情は穏やかだった。

「でも嬉しいです。レンがそんなことを言ってくれるなんて。……うん、好いものですね。男の子って感じ」

「……そんなことより、王立七十二階位特務騎士団が出てきたってことは」

「ええ。確実に中枢に近づいている証拠ですわ」

　象牙色の通路を走っていく。

　本城を囲むドーナツ型に設計された回廊を進んだ先に。

「中庭？」

「面白い場所に出くわしましたね」

　突如として現れる新緑の園。

　四方を壁に囲まれた閉鎖空間でありながら、足下から感じる感触は土。天井からそそぐ人工灯の光も限りなく陽光に近い。

「あまりに唐突すぎる人工庭園。これも何かの仕掛けかしら？」

　長弓を携えたまま歩を進めるフィア。

　そんな彼女の頭上に――

「先輩、退がれ！」

　煌々と瞬く、巨大な人型をした『何か』がいた。

　悠然と降下してくる光の怪物。

　その手には、光を収束して作り上げたような煌めきの十字鎗。

凹凸のない頭部は、眼にあたる部分だけがぽっかりと光が抜け落ちて、漆黒の闇に染まっている。

……同じだ。

……何もかも、あの時と同じ。

聖地カナンの聖堂を襲撃した未知の怪物が、再び自分たちの前に立っている。

だが、いったいどこから現れた？

「意外に早い登場でしたね。いや、最初から隠す気などないという意思表示かしら」

手に新たな矢を具現化させるフィア。

彼女の声音に混じるのは、静かな嘆きだった。

「全身から感じる虚無感……なんて哀れな怪物でしょう」

「フィア先輩」

「ええ。これが聖堂を襲ったという怪物ですね。何はともあれ、これで目的の第一段階は達成できました」

自分たちは間違っていなかった。

誰かに操られているのか、それとも独自の意志で動いているのかは依然として不明だが、やはりこの怪物は覇都エルメキアに巣くっていた。

「こうなるともう一度、王立七十二階位特務騎士団にご登場いただきたいところですわね。是が非でも尋ねたいことがあります」

『問いつめて、それが何になる？』

『王立七十二階位特務騎士団は何も語らぬよ。語るだけの知識を持たぬゆえ』

『知識を蓄えるのは、私たちの役目だもの』

声が聞こえたのは、その時だった。

鼓膜を揺らさぬ波動。大気を振るわせることなく、まるで大地に水が沁みていくように空間を浸透する言霊が。

「フィア先輩、今の声……」

「声？」

怪物を横目に捉えたまま、フィア。

「声というのは？　私、何もそれらしいものは聞いていませんが」

「……え。いま確かに声が」

想定外の答えに、レンの意識がフィアへと集中。

刹那。

『――――』

投じられた十字鎗。

光の怪物が放った鎗がレンの足下へと突きささるや、地の奥深くから、奇怪な文字の刻まれた石碑が浮上した。

「いけない！　レン、手を伸ばして！」

視界の隅で手を差しだすフィア。

反射的に、レンもまた自分の手を差しだそうとして――――

少年は、石碑の中へと吸いこまれるように姿を消した。

「……レン？」

返事はない。

自分の擦れた声が大気にまじって消えていくのを感じながら。

「何の真似ですか」

フィアは、激情を孕んだ双眸でもって怪物を睨みつけた。

レンを吸いこんだ石碑は粉々になって自壊。

その間も発光体は無言。何一つ言葉をも発しようともせず、『眼』にあたる部位で何処を見ているかもわからない。

……私の霊知でも居場所が掴めない。でも、咄嗟につけた探知術式は残ってる。

……生きてはいるはず。

そして探知術式の感覚からも近くにいるのは確かだ。どんな術式で転移させられたかはまだわからないが、救出する術は必ずあるはず。

「答えませんか。それとも、答える機能を持っていないだけですか？」

一度、深々と息を吐く。

目にかかった前髪を片手ではらい、天界の大天使は――

「ならば覚悟なさい」

弓を捨てて拳を握りしめた。

堅く、堅く。

天銀竜の牙にも匹敵する世界最硬の拳を、ただ感情の赴くまま握りしめる。

「レンを解放するまで赦してあげませんからね」

4

空虚な空間。

深海の淀みのごとく、大気の流動の止まった世界。

静寂――あまりに静かすぎるがゆえに違和感さえ覚えるほどの、永久の無音。

無明――光という存在がその概念ごと根絶した後の世界のような、果てなき暗中。

そして極寒。

みるみるうちに体温と生気とが奪われていくのを感じる。

「フィア先輩？　先輩!?」

振りしぼった声が波として伝わっていく。

……あの時、何が起きたんだ。

……目の前に不気味な石碑が地面から突きだして。

意識が戻った時には、自分はこの場所に一人で立っていた。

『火、灯ス？』

無明の世界に小さく灯る、紅蓮の輝き。

それはレンの肩に留まった精霊が生みだしたものだった。

「火の始原精霊。あ、そうだよ。お前がいてくれたんだよな！　それに」

『……イルヨ？』

足先をツンツンと突いて自己主張する上の始原精霊も。

何処かもわからない奇妙な空間。さらにはフィアとも隔てられた状況下で、唯一の救いとも言えるのがこの精霊たちの存在だ。

「でもさすがに、この場所が何なのかまでは知らないよな？」

揃って首をふる二体の精霊。

予想どおりの応えにレンが苦笑で返そうとして――

『それに答えるのは、私たちの役目なのよね』

大人びた雰囲気の女声。

「……誰だ」

『警戒の必要はない。私たちは君の味方だ』

『儂らがお主を呼んだのじゃよ。儂らの知と力とを授けるために』

続いて響くのは、知性を湛えた男性の声。

そして最後は老人の声。

……三人分の声。

……だけど人影なんてどこにもない。

気配を何一つ感じないのに、声だけがすぐ近くから響いてくる。

『あら、ちゃんといるわよ。あなたの目の前にね』

からかうような口調の女声。

目の前――

火の始原精霊の炎に照らしだされたのは、三枚の巨大な石碑だった。

そして声は、その石碑から。

『ここは地図に無い場所。秘境でも聖域でもない』

『すべての喧噪と雑念を排斥した空間。どうだ、悪くないであろう？』

『思索にふけるには最適よ。覇都エルメキアからは「隠者の小部屋」と呼ばれてるわ』

未知の言語が刻まれた黒の石碑。

その文字が光り輝くたびに、石碑から声が響いてくる。

……喋ってるわけじゃない。

……この文字が、こいつらの声がわりに音を生みだしてる？

黒の石碑そのものが術式の発動体となる法具。

そこに刻まれた無数の文字から淡い光が瞬いて、その文字に対応する音の波長を召喚しているのだ。

自分の想像も及ばぬ何処の地から。この暗く閉じられた場所へ。

空間という概念を飛びこえて。

これはまるで。

『古代召喚術みたい？　そうね、その話もしてあげる』

自分の思考を見透かしたかのように告げて、嬉しそうに声を弾ませる女性。

そして。

『ようこそ、レン＝E・マクスウェル。在りし日の英勇の面影を映した者よ』

『儂らは碑文の三賢者。お主の来訪を歓迎しようぞ』

『あいにく紅茶とお菓子はないけれど、くつろいで頂戴。今日はあなたに素敵な贈り物を用意したの。気に入ってもらえると嬉しいわ』

碑文の三賢者。

世界を見通す予見者たちは、偽英勇の少年にそう告げた。

Record.4 触れられざるもの

1

覇都(はと)エルメキア・市街地中心部。

「エ、エリエス様!?　あ、危ないですってば!　危険ですからもっと後ろに!」

「平気よプルミエール。問題ないわ」

怯(おび)えきった表情で駆けよってくる法術士(アリア)の少女。

声をふるわせる彼女にそう答えるが、当のプルミエールは自分たちのすぐ横を進行する超巨大質量の竜を指さして。

「な、ななな……何を言ってるんです!　あの地母竜(ちぼりゅう)のこんな近くを走ることの、どこが平気だって言うんですかぁ!?」

「一つ向こうの道じゃない」

「気まぐれでコッチ来たらどうするんですか!?　あ、あたしたち踏み潰(つぶ)されますっ!」

涙目で訴えてくるプルミエール。

これでも地方の旅団養成機関を主席で卒業した才能あふれる若き法術士だが、その彼女が悲鳴を上げるほどに、目の前の竜の存在感は圧倒的だった。

地母竜——地底で千年の時を生きるとも言われる竜種だ。

進行する大通りの地面をえぐり、両脇の家屋の壁を削りながら進んでいく様は、もはや生物の突進ではなく大型嵐(テンペスト)の通過そのもの。

……幻の竜をこうも簡単に呼びよせて従わせるなんて。

……さすがは竜の姫ね。

竜姫(りゅうひめ)キリシェ。地母竜の頭に彼女が乗っている姿を見た時は、驚愕(きょうがく)のあまりエリエスもすぐには言葉が浮かばなかった。

「王立七十二階位特務騎士団の目を惹きつける狙いでしょうか。しかしこれは……我々の想像の遙か上のことをしてくれますね」

「派手にやってくれる分には好都合よ」

地母竜の巨体を見上げつつ、エリエスは並走する治癒士に向かって頷いた。

古代城イスタルシルへの突入。

防衛部隊が地母竜を止めようと全力を注いでいる今が、好機。

もちろん特務騎士たちもカナン巡礼聖教船の動きに気づいてはいるだろうが、それでも地母竜の制圧を優先せねばいけない状況なのだろう。

と。

「エリエス様！」

後方の護衛を担う武闘家タイラスが、突如として声を張り上げた。

「夢魔!?」

ふり返ったエリエスに迫る魔獣。

家屋の屋上を飛びこえた冥界の黒馬が、旅団の先頭を走るエリエスめがけて襲いかかる。

「あ。だめだよ夢魔。その人間はアタシの知り合いだから」

空中でクルッと軌道を変える魔獣。

それから一拍分の間を隔て——どこからともなく飛び降りてきた褐色の幼女が、空中で身軽に一回転しながらエリエスの前に着地した。

「や！　申し訳ないね。アタシとしたことが」

「エリーゼ？」

「この馬、そんなに頭良くないの。覇都の特務騎士とかいうのがみんな剣とか鎗持ってるでしょ。だから単に『武器を持ってる人間を狙え』って命令してたんだよね」

「……そういうことね」

術士を主体とした構成のカナン巡礼聖教船にも、少数ではあるが武装した部下がいる。それに反応して襲いかかってきたということだろう。

「驚いた？」

「踏み潰されるかと思ったわ。でもそんなことより……」

息を整えながらその場で腕組み。

「広場に魔獣をけしかけた時は私まで驚いたわよ。あの場には覇都の諜報員も潜りこんでいたけど、それ以上に、何も知らない信徒もたくさんいたんだから。……大騒ぎよ。もちろんケガ人を出さないよう配慮してくれたのはわかってるけど」

「あはは、ごめんごめん。アタシこういう加減て苦手だからさ」

口調とは裏腹に、あまり悪びれた様子もない悪魔の幼女。

「でもちょうど良いところで会えたよね。そっちの具合はどうなの？　そんなに部下がいるんだから、街の方はアタシらより細かく調べられたでしょ」

「ハズレよ。それらしき施設は街の中には何一つなかったわ」

背後に控える三十人超の部下へとふり返る。

側近である治癒士ネビリムをはじめ、カナン巡礼聖教船の中でも選りすぐりの人員で、この二日間を街の調査に費やした。しかし何一つ不審な施設は無し。

「ふむふむ。ならやっぱり本命はあのでっかい城ってことだ」

エリーゼが見上げる先の古代城イスタルシル。

その防衛の最重要拠点である凱旋門が、木っ端微塵に破壊されている。

「今なら簡単に侵入れるし、追いかけっこ一緒にやろっか？　おいで夢魔」

空中で静止していた魔獣を呼びよせるエリーゼ。

その逞しい脚を撫でてやりながら。

「さあエリエス、ついてきて」

褐色の先代魔王は、挑発的とも取れる不敵なまなざしで手招きしてみせた。

「アタシとキリシェは、人間の都市に攻め入った悪者だよ。そっちは追いかける役。そうだねぇ、広場に集まってた信徒に魔獣をけしかけて大混乱させたって理由がちょうど使えそうじゃない？」

旅団『再来の騎士』は、覇都の城に乗りこもうとする不法侵入者。

さらにエリエスとしても、自分の宣教をエリーゼの使い魔とキリシェの地母竜によって妨害された。これで、『再来の騎士』の侵入先であるイスタルシル古代城まで追いかける大義名分が成立する。

「……承知したわ。何から何まで計算ずくなのね」

「決定だね。ほらキリシェ降りてきて、アタシらもレンに合流するよ！」

ウィンク一つ残してエリーゼが走りだす。

スキップのように弾む足取りで一直線に、崩壊した凱旋門へ。さらに地母竜から飛び降りたキリシェも合流。

「……貴様ら!?」

「こっちだ！　『再来の騎士』の二人組がここにいる！」

凱旋門跡地へとまっすぐ突っ走っていく竜姫と先代魔王。

二人を包囲しようと迫るのは王立七十二階位特務騎士団の女性騎士、そして彼女に指揮された十数人もの特務騎士たちだ。

「捕らえろ！」

「アタシより、自分のことを心配したら？」

獣の咆吼。

騎士たちの前に立ちはだかったのは三頭の冥犬だった。

伝説の魔獣として名高い徊獣の眼光を浴びて防衛部隊が後退。その不意を襲った夢魔の昏睡の障気を吸いこんで、防衛部隊が次々と倒れていく。

「良い子だね。そのままここで暴れてて」

「エリーゼ、さっさと来い」

魔獣と地母竜とに見送られ、支城の入口まで走っていくキリシェとエリーゼ。

「エ、エリエス様……あの二人……走るの速すぎです！」

「私だって必死よ。とにかく追いかけるしかないでしょ」

息を切らせて、先行する二人の背を追いかける。

城郭に続く石造りの扉へ。

「あ、法術で閉じられてる。まあ別にいいけどね、アタシが解除――」

「壊せばいい」

轟音。

キリシェの跳び蹴りが、法術で凍結されている扉を微塵に粉砕。そのまま何一つ障害など無かったかのように城の内部へと走っていく。

「心強い限りですね」

「――――」

ネビリムの呟きには答えぬまま、エリエスは二人を追って支城へと突入した。

……そうね、確かに圧倒的かもしれない。

……この二人と大天使フィア、それに三百年前には英勇エルラインもいたんだから。

エルライン剣帝旅団。

わずか四人で終焉戦争を鎮めた史上最強の旅団。剣帝と呼ばれたエルラインをはじめ、彼の下に集った三大姫たちも地上、天界、冥界の三界を代表する最強戦力。

だが……

同時に一つの不安がどうしても拭いきれない。

竜と天使と悪魔とが集結するというのは、三百年前でも異例の出来事だったはず。当時は天使と悪魔とが抗争を続け、地上でも竜が暴君として君臨していた。

そんな敵対関係であった三種族の代表が終焉戦争で集った。

それはつまり、剣帝エルラインと三大姫さえ、全員が集まらなければ終焉戦争には立ち向かえなかったという事実の裏返しではないのか？

……人間の記録には残ってない終焉戦争。

……あの英勇と三大姫が立ち向かった相手は、どれほど強大だったというの？

竜姫キリシェと先代魔王エリーゼ。

彼女たち二人の傍若無人とも言える強さを見て、頼もしいと思う以上に、エリエスにはその不安が脳裏にこびりついて離れないのだ。

「エリエスだっけ。そっちはどうするの？」

名前を呼ばれ、エリエスはようやく我に返った。先代魔王である幼女が通路でふり返り、頭の後ろで手を組みながら。

「アタシたちはレンの匂いを辿るけど、ついてくる？　それとも別行動？」

「一緒に行く方が心強いわ。だけど、この城を探索するなら二手に分かれないと無理よ。とてもじゃないけど短時間じゃ調べつくせない」

「探しものって？」

「あなたにも関係するわ。対悪魔装甲のような失われた技術の研究施設よ。それに、どうしても見つけたい奴がいるの。絶対この城のどこかに隠れてるはず。イスタルシル支城は観光用にも一部開放してるから、人目に触れない隠しフロアがあると睨んでるわ」

「ふーん」

首をかしげるエリーゼ。

何かを考えるような素振りの後に、組んでいた腕をほどいて。

「それってさ、アタシたちのいる床の下にある地下室のことじゃないの」

「……え？」

「この城、ものすごく大きい地下施設があるじゃん。これは違うの？」

「ま、待って！　なんであなたがそんなことを知ってるの!?」

　古代城イスタルシルについては、過去に聖地（せいち）カナンからも何度となく密偵を派遣済みだ。

　しかしどんなに優秀な調査部隊からも、この城に地下施設があるという報告は受けたことはない。

「見ればわかるよ。アタシ、罠（わな）とか隠し通路とか見つけるの得意だし」

「付け加えると、歩いた感触でも十分わかる。この……およそ五メートル下だな。巨大な地下空洞がずっと先まで続いてる」

　コン、と靴先で床を叩（たた）いてみせるのはキリシェだ。

「さらに言うと、そこから何かの物音も聞こえる」

「……言葉が出ないわね」

　高位存在――この世界で、なぜ竜と悪魔と天使が別格の呼称を与えられているのか。その理由を垣間見（かいまみ）た気分だ。

「教えてくれてありがとう。なら、あとは地下に潜（もぐ）る隠し階段がどこかにあるはずだから、それを総員で探すことにする」

「必要ない」

　周りの部下の誰でもない。

　エリエスの言葉を間髪（かんぱつ）入れず遮ったのは、その場に佇（たたず）むキリシェだった。

「お前たちには感謝している」

「聖地（せいち）でアタシらの寝泊まりする部屋を用意して、ずっともてなしてくれたもんね」

「そう。だからこれは」

　キリシェが足を振り上げる。

「――『再来（わたしたち）の騎士』からの礼だ」

　破壊の爪先（つまさき）。

　竜の少女が振り下ろした足が床に深々と突きささり、イスタルシル支城そのものを揺るがしながら巨大な亀裂（きれつ）を地面に穿（うが）つ。

　通路だったものが崩壊（ほうかい）。圧倒的な破壊の衝撃によって生みだされた陥没孔（クレーター）のその下に、隠されていた地下フロアが露（あら）わになっていた。

「……すごい」

　夢でも見ているような心地で呟いたのは、法術士の少女プルミエール。

「じゃ、アタシらはレンを追いかけるから」

「あとは好きにしろ」

　亀裂の走った通路を駆けぬけていく竜姫キリシェと先代魔王エリーゼ。

　その背中を見送って。

「……彼女たちに謝らなければなりません。私は、恥ずかしながら誤解をしていました。竜とは粗野な獣であり、悪魔は危険な怪物、天使は驕りたかぶった愚者であると。幼い頃に聞いた伝承の全てを信じていたわけではありませんが、その印象が心の中にまだ残っていたのも事実です」

「私も似たような印象だったわ。でもそれが全てじゃないんでしょうね。人間だって同じよ。良い人間もいればそうでもない人間もいる」

　自嘲の笑みを浮かべる側近に、エリエスは微苦笑で返した。

　足下の陥没孔。

　その先に見える地下の空洞を睨みつけて。

「でも断言できるわ。この下にいる人間は、きっと私たちとは対極にいる相手。……総員、気を引き締めなさい。ここからが本番よ」

　深呼吸、そして跳躍。

　すり鉢状の陥没孔に身を投じ、眼下に映る地下フロアまで一直線に滑りおりる。

「……エリエス様、これは一体っ!?」

「大当たりみたいね」

　照明に照らされた大部屋。

　そこにあったものは、中身の見えない半透明の実験槽だ。

　実験槽の一つ一つがエリエスの背丈より大きい。実際に何が開発されているのかは不明だが、この隠しフロアで開発されているような物はと言えば――

「どうしますか」

「決まってるわ、破壊して中身を確認する」

「それは困るなぁ」

乾いた靴音。

地下フロアの奥から響くその音とともに、照明の下、細身の人影が浮かびあがる。

「あのカナン巡礼聖教船(じゅんれいせいきょうせん)が破壊活動だなんて、公(おおやけ)にはしたくないでしょう？」

手に刺突剣(レイピア)を携(たずさ)えた剣士だった。

白の長髪を後ろで一つに束ねた青年。

まだ二十になったかどうかという年齢だろう。整った白皙(はくせき)の相貌(そうぼう)は美しいと表現しても過言ではないが、エリエスが違和感を抱いたのはその表情だ。

空っぽの微笑(びしょう)。

感情という感情が、その瞳(ひとみ)から抜け落ちているのだ。

嬉(うれ)しいから笑っているのではなく、人形劇に出てくる人形のように笑うことを定められて作られたからソレに従っている……そんな表情。

「こっちもそれなりの理由があるつもりよ。それにしても興味深いわね。この実験槽(ビーカー)を壊されることの何が困るのかしら？」

「眠れない」

「……？」

「静かじゃないと寝れないんです。だからこうして地下に籠(こ)もっていたのに、あなたたちは本当に騒がしい。それで、どうせまた実験槽(ビーカー)を壊して大騒ぎする気でしょう。それでは僕が眠れない。だから困ると言ったんです」

天井を指さす剣士。

「暴れたいのなら三階にある天鏡(てんきょう)の間へどうぞ。そこに、世界で最強の男が待っていますから」

「……最強？」

「序列一位・騎士(きし)Eゼルブライト。挑戦したいのならどうぞ」

「気に入りませんね」

そう答えたのはエリエスではなく、その隣に立つ側近ネビリムだ。

濃紫色の法衣(こむらさき ほうえ)についた砂埃(すなぼこり)を払い落としながら。

「騎士Eゼルブライトは王立七十二階位特務騎士団(エルメキア・ダスク)の筆頭。自分のかわりに主(あるじ)を差しだすつもりですか。覇都(はと)の騎士も落ちぶれましたね」

「あの人自身が望んでいることだとしたら？」

空っぽの微笑(びしょう)を固定化させたまま返す、白髪(はくはつ)の青年。

「誰よりも戦いを欲している。だから珍しく嬉しそうだった。なにしろ英勇の再来がこの覇都にやってくるんだから」

「……レンのことかしら」

「そう。騎士王は確信している。王立七十二階位特務騎士団の妨害も碑文の賢者たちの誘惑も関係ない。英勇の再来は必ずやってくる。だから嬉しそうでした」

「なんだ。ならゼルブライトは相手待ちってわけじゃない」

地下の実験室に吹きこむ突風。

エリエスのかざした手に、碧色の羽根を持った精霊がぴたりと留まる。

「あなた、暇でしょう。この実験室のこと教えてもらえるかしら」

「断ったら？」

「この周りの実験槽を全部破壊するわ。あなたが教えてくれなくても、自分たちで中身を確かめれば済む話だから」

「……やっと静かになると思ったのに」

微笑のまま深々と息をつく剣士が、その手に握る刺突剣をゆっくりと持ち上げる。

「億劫だけど、あなた方を排除しないと静かになりそうにないですね」

「過ぎた大言は――」

慎みなさい。そう言いかけた言葉をなかばで呑みこんだ。

『エリエス』

手に留まった風の始原精霊が、緊張を孕んだ声で語りかけてくる。

『こいつ嫌……』

「ええ。私だって大嫌いよ。死ぬほど痛い思いさせられたんだから」

刺突剣を握る剣士。

その背後に顕現した光の怪物を前に、エリエスは下唇を噛みしめた。

「ようやく会えたわ。ソイツにやられた傷、まだ身体の奥で疼いてるのよね」

聖地カナンで自分たちを襲った怪物。

けれど、何だこの様子は。

……この剣士のすぐ後ろにくっついて離れようとしない。

……まるで私の精霊みたいに。

王立七十二階位特務騎士団の中でも初めて見る剣士。この地下施設で自分たちを一人で迎え撃つ

ために現れ、そして光の怪物を従えている。

　こんな男が、ただの下級騎士（きし）であるわけがない。

「あなた、まだ名前を聞いてなかったわね」

「王蛾（オウガ）」

　刺突剣（レイピア）を携え、ゆるりとした歩調（たずさ）で近づいてくる青年。

「初めまして聖エリエス。そして、ついておいで虚構精霊（エイドス）」

　虚構精霊（エイドス）――初めて聞く単語に疑念を抱きながら、それを尋ねることはできなかった。

　尋ねることを許さない。

　言葉に気を取られれば、その瞬間に光の怪物が襲いかかってくる。聖地カナンで受けた奇襲の二の轍（てつ）を踏むのはご免だ。

「あなた性格が悪いわよ」

「うん？　そうですか？」

「名前しか外に公表されてない序列二位と同じ名前……ね。そんな大層な身分なら、出し惜しみしないで最初からそう名乗りなさい」

「だって聞かれませんでしたから」

　微笑（びしょう）で首を振る序列二位・王蛾（オウガ）。

　王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）にて邪剣士の異名を持つ騎士と、聖女と慕（した）い称される少女の戦いが、始まった。

2

　隠者（いんじゃ）の小部屋『忘却の書斎』――

　古代言語の刻まれた三枚の石碑。

　碑文の賢者（けんじゃ）と名乗る『石』に見つめられ、レンはこくんと息を呑（の）みこんだ。自分に寄りそう精霊を従えながら、その場で一歩後ずさる。

『まだ私たちを警戒してるのかしら？』

「……警戒するなって言う方が無理に決まってる」

緊張で渇ききった喉から吐きだした言葉は、擦れ、そして小さく震えていた。

精一杯の虚勢を張ったつもりなのに。

それが、この空間では全ての思考がまるで筒抜けのような寒気を覚える。

「アンタらいったい何者なんだ……」

人間？

だが、こんな石碑の姿をした人間など見たこともない。

『もっともな疑問だ。しかしそれに答えるには、君はあまりに無知すぎる』

『本当に可哀想。あの三大姫と一緒に行動してるというのに、まだ終焉戦争のことを聞かされてないなんて』

憐憫を感じさせる口調の、女声。

『教えてあげるわ。三百年前、終焉戦争で剣帝エルラインが戦った相手のことを』

『左様。知の継承が儂らの使命でもあるからの。さておき自己紹介から始めるとしよう。このままでは儂らを何と呼ぶかも判断つくまい？』

石碑に浮かびあがる新たな文字。

それぞれの石碑に刻まれた文字ごとに淡い赤、青、緑の三色に輝きながら。

『自分はレスディン。神性都市シィエラミリス第Ⅰ区劃所属、研究分野は「天使」だ』

『儂はギスレム。神性都市シィエラミリス第Ⅱ区劃所属、研究分野は「悪魔」じゃ』

『私は蜷。神性都市シィエラミリス第Ⅲ区劃所属、研究分野は「竜」よ』

天使、悪魔、竜。

いずれもが、世界で高位存在として別格の扱いを受けている三種族だ。

……だけど、その三種族を研究ってどういうことだ。

……それに神性都市シィエラミリス？

現在の五大陸はもちろん、過去のあらゆる歴史においてもそんな名前の都市など聞いたことがない。

『古代召喚術という名前に、疑問を抱いたことはないかな？』

『左様。なぜ「召喚術」の前に「古代」という言葉がついているのかとな』

レスディンと名乗る男。

ギスレムと名乗る老人。

二つの石碑に新たな文字が刻まれて、その文字が輝きながら「声」として具現（ぐげん）。

この冷たい空間に浸透（しんとう）していく。

「それは……古代召喚術（エイシエント）が失われた術式って言われてるからだろ。ずっと昔はたくさんの術士がいたけど、今はもう聖地（せいち）でもエリエスしか残ってないから」

『ええ。でも私たち三人の時代には、まだ古代召喚術が当たり前のように存在していたわ。それは終焉戦争の三百年前より、さらに昔の時代』

蜷（ニーナ）と名乗る石碑。

『世界中の都市で、競うように古代召喚術の研究がされていたわ。優秀な術者を育成し、その術者の協力を得て、さらに研究は加速していったの。現代に旅団養成機関が溢（あふ）れかえっているのと同じよ。世界中が古代召喚術という神秘に魅入られ、その研究を競いあったわ。なぜなら古代召喚術を極めた都市こそが、世界の頂点に立つとわかっていたから。そして、その頂点に立った都市が――』

「アンタたちの言う神性都市だっていうのか？」

『そのとおり』

よくできましたと言わんばかりに、蜷（ニーナ）が声を弾ませる。

『神性都市シィエラミリス。それが、歴史上もっとも古代召喚術の栄（さか）えた都市の名前よ。この都を拠点（きょてん）として古代召喚術の研究は極致に達したわ。人類がもっとも栄華を極めた瞬間でもあった。あなたたちが失われた術式（エイシエント）、失われた技術（オーパーツ）と呼んでいるものの大半も、この神性都市で生まれたの』

『剣帝（エルライン）はもちろん、終焉戦争の三大姫（しゆうえんさんだいひ）さえ生まれる前の遙（はる）かなる太古だ。しかし……』

『極限の繁栄を極めながら、儂（わし）らの神性都市は歴史上から忽然（こつぜん）と消え去った。その研究も存在も何もかも』

「……ずいぶん、居心地の悪い口ぶりで言うんだな」

雄弁に語られる言葉を前に、レンが感じたのは自身の寒気だった。

あまりに不気味な話だ。

失われた術式（エイシエント）や失われた技術（オーパーツ）の起源（きげん）を生みだした栄光の都が、歴史上から記録も残さずに消えるだなんて。

「いったいどうして――」

『襲撃（しゆうげき）されたのじゃよ。世界の終焉より現れし「光り輝く者たち」によって、な』

怒りを孕（はら）んだ老人の呟（つぶや）き。

その二の句を継いだのはレスディン、そして蜷（ニーナ）だった。

『神性都市シィエラミリスが栄華を極めた時だ。世界の何処とも知れない終焉から現れた何者かが、神性都市を襲撃した。当然、我々は抵抗したが……奴らはあまりにも別次元の存在だった』

『そして神性都市は衰退したの。都市を破壊され、人々は逃げるしかなかったわ』

「……いったいどんな怪物？」

『不明だ。だからこそ我々も目撃した当時の姿を呼称し、「光り輝く者たち」と呼ぶ以外に手だてがない』

押し殺した声音で呟く賢者レスディン。

『しかし一つだけ確かなのは、奴ら「光り輝く者たち」の目的が古代召喚術の根絶だということだ』

「古代召喚術の根絶を!?」

『真っ先に狙われたのが古代召喚術の研究施設だったの。神性都市が衰退して無人となった後もそう。人間が古代召喚術を研究しようとするたびに襲撃はくり返されたわ。まるで古代召喚術を憎悪しているかのように。後はわかるわね？　古代召喚術という神秘は、こうして世界から忘れられていったのよ』

光り輝く者たち。

神性都市を襲った謎の高位存在から逃れるため、人間は古代召喚術を放棄した。

古代召喚術の術者も研究者も次第に数を減らし、最後にはその存在を覚えている者さえ稀少となった。

エイシエント
ゆえに失われた術式。そう呼ばれるようになったのだ。

『レン。君が本当に知らなければならないのは、この先だ』

「……この先？」

『我々の知るかぎり、奴らが世界に顕現した時代が二回ある。一度目がいま伝えたように神性都市の襲撃。そして二度目が――』

言葉が切られる。

暗く冷たい隠者の小部屋。世界から隔絶された空間に再び静寂が訪れるのを待ってから、石碑に新たな文字が浮かびあがった。

『終焉戦争』

「……じゃあ。エルラインが三百年前に戦った相手っていうのは」

『左様。その「光り輝く者たち」に相違ない。だが当時の剣帝エルラインがどのように奴らと戦い、その戦

いがどんな決着を迎えたのかは儂らにもわからぬ。唯一その全てが記録されているであろう書こそが世界録。だが、もう容易に想像はつくであろう』

『二度目があって、そして三度目の襲撃が無いなんて考えられるかしら』

「……」

確かにそうだ。

三賢者の話を聞いてレンが真っ先に思い浮かべたものが、終焉戦争の再来。

世界が次代の英勇を渇望するこの時代――

竜姫キリシェ、大天使フィア、先代魔王エリーゼが再び集結した。その事実だけでも、終焉戦争の再来を予感させるには十分すぎる。

……仮に三百年前はエルライン剣帝旅団が勝ったんだとしても。

……今はもう、この時代にエルラインはいない。

『怖い？　だけど不安に感じて当然なのよ。終焉戦争の再来という恐怖をね』

そう告げる蜷は、笑っていた。

『でも言ったでしょうレン。今日はあなたにとっておきの贈り物を用意したと』

「……贈り物って、今の話のことじゃ？」

古代召喚術のこと、神性都市のこと。

そして何より終焉戦争で英勇エルラインが戦った相手のこと。彼らの言う贈り物とは、碑文の三賢者から与えられる知識かと思っていた。

『言っただろう。我々は神性都市の住人だ。遙か古代に研究地であった都市を襲撃され、そして終焉戦争でも奴らの侵攻を許してしまった。だが三度目の今こそ――』

『復讐の時』

『さあ、おいでなさい虚構精霊』

碑文の三賢者。

その三枚の碑文に刻まれた言葉から三色の光があふれだす。

淡い赤と、青と、緑。

光の三原色――その三色が融和した時、光はもっとも強い輝きを放つ純白となる。

そして光の消え去った後に。

「……こいつっ!?」

三枚の碑文の中心部に顕現したのは、輝きの十字鎗を携えた光の怪物だった。

人型をした光の巨人。

聖地(せいち)カナンで自分やエリエスを襲撃し、ここ支城の中庭でも出くわした相手だ。

『身構えなくていい。これは君の味方だ』

『虚構精霊(エイドス)。私たち賢者が、「光り輝く者たち」に対抗するために作り上げた切り札よ。世界を救うため。そして神性都市シィエラミリスのためにね』

対して。

レンの応(こた)えは無言の抜刀だった。

『あらどうしたの。急に剣なんか抜いちゃって』

「……どういうことだ」

剣の切っ先を光の巨人——虚構精霊(エイドス)へと向けて、レンは声を振りしぼった。

上の始原精霊(ノーム)は、レンの足にしがみつき。

火の始原精霊(サラマンダー)も、明確な警戒のまなざしを虚構精霊(エイドス)に向けている。

「アンタらのいう終焉戦争の再来。その切り札がソイツだっていうのか」

『そうよ。何かおかしな事でも？』

「聖地カナンで、俺とエリエスは……その怪物に襲われた」

自分を庇(かば)ったエリエス。

彼女が吐血し、そしてゆっくりと倒れていく光景。まだ夢に見るほどに強く記憶に焼きついている。

……絶対にあんな光景はくり返したくない。

……そう決意した。

なのにその宿敵が味方だと言われて誰が信じるだろう。

『なるほど。誤解を生じさせてしまったか。だが必要な事だった』

動揺(どうよう)を感じさせない口調のレスディン。

『試験体の調整のため、始原精霊(オリジナル)と戦わせて実力を測ることは必須の実験だった。本来ならば波の将魔との戦闘後、試験体は剣聖シオンへと向かうはずだった』

「剣聖シオンに!?　どうして!」

『二体の守護精霊を従え、剣聖と謳(うた)われる天才剣士。虚構精霊(エイドス)の実験にこれほど相応(ふさわ)しい男はおるまい。だがそこで制御に失敗し、試験体が聖地(せいち)カナンに向かってしまったのは儂(わし)らにとっても想定外だった。お主(ぬし)たちの従える精霊の波長に導かれたのか、あるいは騎士王(ゼルブライト)の企(たくら)みか。それはわからんがな』

「……ゼルブライトの企み？」

碑文の三賢者が発した名前に、レンは無意識のうちに眉をひそめていた。

「その虚構精霊はあんたたちの物じゃないのか？」

『我々は設計図を与えたに過ぎない』

『碑文の三賢者と呼ばれようと一介の人間。竜たちのように長大な寿命を持つわけではない。ゆえに神性都市で研究されていた技術の一つを利用し、儂らは自らの思念をこの石碑に刻み、自動発動する古代召喚術の失われた技術とした。儂らの声と思念の召喚じゃよ。ともあれ召喚と言っても、儂らのコレは限りなく精巧な再現に過ぎぬがな』

自嘲ともとれる口調で告げる老人。

『儂らはこの身ゆえ、虚構精霊の製造には他者の手を借りる必要があった。それゆえの共存関係じゃよ。儂らは神性都市で生まれた様々な失われた技術の知識を提供し、王立七十二階位特務騎士団が組み立てる』

「……そのためにエリエスは襲われたのか？　精霊と戦わせる。ただそれだけで」

『必要な犠牲よ』

淡々と。

あまりにも無機質な声でそう告げる女性の賢者。

『見ればわかるわ。私たちの悲願を成就する、虚構精霊の完成体を』

「完成体？」

『そうよ。ほら、これが最初の一体。さあ変容なさい』

目の前で微動だにしなかった光の怪物が、無数の光となって破裂。

自爆？

だがレンのそんな予感は、次の瞬間に否定された。

『ダメッ！』

「土の始原精霊？　火の始原精霊も？」

足にしがみつく土の始原精霊が小刻みに震えていたのだ。

肩に止まっていた火の始原精霊さえ、レンの後ろに隠れるように背中側へと回りこんでしまっている。

……精霊が怯えている？

……いやでも、ここまで明確に怯えきってるのは今までなかった。

碑文の三賢者へと再びふり返り――

レンは、目の前の「ソレ」を見つめたまま呼吸が止まった。

寒気。威圧感。敵意。

ありとあらゆる不穏な空気とも違う。生涯初めて感じる異相の波動。

――無明の空間に同化する、半透明な漆黒の巨体。

――奇怪な一対の翼を有する怪物がそこにいた。

全長は、四メートルほどだろうか。

上半身は人間の女性のシルエットに酷似しているが、下半身には足がなく、そのまま竜の尾のような器官が腰部から延びている。

頭部は硬質の装甲に覆われて、後頭部には二本の触覚。背中の翼は鳥の羽に似ているが、その色は全身と同じ透ける漆黒だ。

「光り輝く虚構精霊が真っ黒に……これがあんたらの研究成果だっていうのか？」

世界のあらゆる生物とも違う。

形状もそうだが、レンの背筋を粟立たせたのは、この存在が発する禍々しい気配だ。

……説明できない。

……俺は、自分の頬を伝っていく汗の感情を……説明できない。

陰と陽。炎と水。

決して相容れることのできないモノと相対しているかのような違和感。そうとしか喩えようのない悪寒が、全身を氷のように冷たく蝕んでいくのがわかる。

『お主に授けよう。我らが悲願を成就する完成体』

『すべての失われた技術の頂点。我らが智慧の結晶たる虚構精霊を』

『世界を救い、あなたが次代の英勇になるの。素敵でしょう？』

無音の空間を伝っていく二賢者の言葉。

『どうした？　なぜ黙している』

「……一つ教えてほしいことがある」

冷たい汗を拭うことも忘れ、レンは渇ききった喉から言葉を紡いだ。

「なんで俺なんだ？　あんたらはＥ立七十二階位特務騎士団に虚構精霊の製造を託してたはず。だったら当然、この虚構精霊の完成体だって覇都に渡すのが普通だろ。なのになぜ俺をこの場所に呼んで、いきなりこんな話を持ちかけたのさ」

『当然の疑問だ。しかしその問いには、君にとって酷な話をしなければならない』

『英勇の資格、の話じゃよ』

淡々と言葉を続ける賢者たち。

『儂らは虚構精霊を委ねるに足る者の誕生を待ち続けていた。すなわち英勇エルラインの再来をな。だが運命の悪戯か、それともエルラインの遺志か。世界はこの時代に、三人の英勇の再来を生みだしおった』

『それが偽英勇、剣聖、そして騎士Eよ』

偽英勇レン――英勇の再来というべき面影を与えられた者。

剣聖シオン――英勇の再来というべき器量を与えられた者。

騎士Eゼルブライト――英勇の再来というべき偉力を与えられた者。

『そしてこれが君の問いへの答えだ。世界が生みだした三人の英勇の再来たち。その中で、レン、君がもっとも弱いのだよ』

「……」

『無論、儂らはお主の戦いを観察してきた。炎の将魔、竜帝カルラ、さらには波の将魔に、極めつきは儂らの虚構精霊の試験体との戦い。いずれも見事だった。様々な奇策と運にすがった点は否めぬが、あの戦いを経てお主がここに立っていることは、一人の騎士として誇るべき偉業じゃろう』

自らの思念を碑文に写し、この世界を観察してきた賢者たち。

その彼らが――

『けれどダメ。あなたの死闘が霞んでしまうほどに、剣聖シオンと騎士Eゼルブライトの強さは比較にならない。特に騎士Eゼルブライト。あれはまさしく覇王。あの男の生まれ持った生来の強さは、剣帝エルラインにも迫る』

「そんな……エルラインに迫るって!?」

気づいた時には、レンは目をみひらいて声を上げていた。

――騎士Eゼルブライト。

その名を知らぬ者など学生騎士には一人としていない。

だが一方で、その強さを示す逸話は皆無に等しい。

人類未到の秘境を踏破したこともなければ、強大な竜や天使、悪魔を打倒したという噂さえも存在

しないのだ。なぜなら騎士王が一歩たりとも覇都から動かないからだ。都市の外にでない以上、人々に語られる逸話もまた生まれない。

ただ強い。

自分の知っている騎士Eの情報はそれだけだった。

『事実だ』

『それが、儂らが三百年余りをかけて世界を観察してきた上での、結論じゃよ……だがな。その強さゆえに溺れてしまう。驕りという名の沼地にな。剣聖も騎士Eもそう。奴らは、儂らの話に耳を貸そうとしなかった』

『自分たちの力を過信した騎士の末路よ。でもあなたは違うでしょう、レン？』

誘う口調。

色気さえも感じさせる魔性の声音で、蜷と名乗る賢者は続けた。

『あなたは自分が弱いことを自覚している。聖フィオラ旅学園で、体格の大きな学生騎士に虐められてたわよね。力で押し負けて、体力でも負ける。悔しかったでしょう？　でも、それに挫けずに努力し続けたのよね。英勇エルラインに憧れて』

「……本当に全部知ってるんだな」

『もちろんよ』

くすっ、と甘い吐息を響かせる女声。

『だからこそ、あなたなら虚構精霊を受け取ってくれるでしょう？　英勇の再来と言っても、あなたは英勇そっくりに生まれてきただけ。生まれながらに英勇の器量を持った剣聖でもなければ、偉力を与えられた騎士Eでもない。そう、あなたは弱い。力となる虚構精霊が必要なのよ』

『見返してやりたまえ。君を蔑んだ全ての者たちを』

『終焉戦争の再来とて、虚構精霊がおれば恐れる必要はない。世界を救い、お主が次代の英勇になる。それが英勇エルラインの遺志を継ぐことにもなるであろう？』

微動だにしない虚構精霊・完成体。

その創造者である三賢者。

そして最後に。

自分の足首に掴まってじっとこちらを見上げる上の始原精霊と、背中に寄りそうように密着する火の始原精霊へとふり向いて。

「……わかった」

レンは、その場で小さく頷いた。

そして。

『いい返事だ』

『これで儂らの悲願は果たされる』

『素敵よレン。あなたならきっとわかってくれると――』

「俺は、あんたたちと別の道を往くよ」

それが偽英勇と呼ばれた少年の宣言だった。

虚構の力に魅せられた三賢者との決別。

『……なに？』

『いま何と言ったかな』

『私たちの聞き間違いかしら』

一瞬の沈黙を隔て。

唖然とした口調で三枚の石碑が言葉を発する。それに対し。

「あんたらの言ってること、俺に関しては何一つ間違ってないよ。聖フィオラ旅学園は、俺には辛い記憶の方が多い。それに俺が、剣聖シオンや騎士王ゼルブライトと比べて弱いって言われるのも驚くことじゃない。……だけど、その先のことは別だ。俺が目指したい地平を、あんたたちは理解してくれてない」

『ふしぎな話ね。あなたの目指す理想は英勇エルラインの軌跡ではなくて？』

「そのとおりだよ。英勇の冒険譚は子供の頃からの憧れだった。でも違うんだ。あんたらの言う英勇像と、俺の目指す英勇像は……きっと相容れない」

三枚の石碑。

古の賢者たちの思念を再現した失われた技術を見据える。

「何より俺が納得できないのは虚構精霊だ。あんたらは世界を救う手段だと言ったけど、俺にはそれが、神性都市で未完成だった研究を完成させたいっていう願望の産物にしか思えない。……聖地カナンで、傷ついたエリエスを見て俺がどんな思いだったと思う？」

初めてだった。あんなにも自分の力量の不足を嘆いた瞬間。

もう二度と後悔したくない。

もう二度とこんな気持ちは味わいたくないと心に誓った。

『先の説明の通りだ。聖エリエス(エイドス)のことは、虚構精霊の完成に必要な犠牲――』

「必要な犠牲なんて平然と言えるから、俺はあんたたちと一緒にいられないんだよ！」

感情の爆発。

胸の哮(たけ)りが声となり、隠者(いんじや)の小部屋の果てまでも伝っていく。

『落ちつきなさいレン。私たちはあなたの理解者よ。わかっているでしょう？　共にいる竜姫(キリシエ)より大天使(フイア)より先代魔王(エリーゼ)より、私たちはあなたのことを見てきた。この世界の誰より、私たちはあなたを見守ってきたの』

「ああ、確かにあんたらは俺のことをよく知ってるよ。でもそれは、俺の弱みにつけ込むために必死で観察してきた成果だろ？」

『――――』

「だからこそ、あんたらは俺のことを調べても、俺の周りのことには目もくれてなかった。俺の精霊たちのこと見てわからないのかよ！　虚構精霊(エイドス)が現れた時から、土の始原精霊(ノーム)も火の始原精霊(サラマンダー)もこんなに怯(おび)えてる」

自分(レン)に寄りそう二体の精霊。

そんな彼らの不安げなまなざしが全(すべ)てを物語っていた。

「あんたらの虚構精霊(エイドス)が本当に世界を救う力なら、精霊たちがこうも怯えるわけがない。つまり、あんたらの話には続きがあるはずなんだ」

『どういう意味かな』

「まだ何かあるんだろ？　あんたらが俺に隠してるだけなのか、あるいはあんたらさえも知らない世界の秘密が！」

神性都市シィエラミリスと古代召喚術の繁栄。

そしてそれを衰退に追いこんだという「光り輝く者たち」の存在。

さらにはそれが終焉戦争(しゆうえん)の敵だということも、おそらくは間違いではないのだろう。

だが。

「それで全てじゃない。あんたらはまだ大事な何かを隠してる。でなければ精霊の怯えの説明がつかない。終焉戦争だってそうさ。今の話だけで説明できるなら、キリシェが最初から教えてくれておかしくない」

終焉戦争の説明はできないとキリシェは言っていた。

自分の足でたどりつき自分の目で確かめろと。そこで感じたものが、そのまま三百年前の真実であると。碑文の三賢者の話が終焉戦争の全てであれば、キリシェがあれだけ慎重な言葉を選ぶはずがないのだ。

きっと、世界を巡る因果はもっともっと複雑で。

世界録に綴られた「真実」は、さらなる神秘に迫るものだから。

「俺は精霊と三大姫を信じる。自分で世界録を見つけて、そして終焉戦争のすべてを確かめるよ。あんたらが語ることを畏れた秘密もそこに眠ってるんだろ？」

『――――』

黙する碑文。

賢者と呼ばれた者たちが語るべき言葉を失い、謳うべき答えを見いだせずにいる光景が、そこにはあった。

「……だから、俺はもう行くよ。フィア先輩も心配してるだろうから」

宛てのない空間できびすを返す。

だが。

『愚かな。人間は、久遠の時を隔ててこうも浅薄な生物と成りはてたか』

『剣聖シオン、騎士王ゼルブライト、そして貴様。時代の選びし者たちさえこの有様ならば、もはや我らが縋る道理など無し！』

「ッ！」

弾かれたようにふり返る。

だがレンの動機は三賢者による怒号ではなく、彼らの中心にいた虚構精霊が放つ不穏な気配によるものだった。

『――反の虚構精霊、拒の虚構精霊、非の虚構精霊』

虚構精霊・完成体。

それが空中で三体に分裂したと思いきや、一瞬の揺らぎと共に空間から消失した。

「虚構精霊が!?　あいつをどこへやった！」

『お主のような者に理を知らしめるには、現実にその力を見せるしかあるまいて。伝説の三大姫が地に這いつくばる姿を見れば、嫌が応でもお主も考えを改めるであろう？』

「……キリシェたちのところか！」

復讐と研究欲の妄念に囚われた研究者たち。

この者たちは、あえてキリシェたちへと虚構精霊を遣わせたのだ。

「ふざけるな。今すぐ虚構精霊を止めろ！」

『虚構精霊はもはや止まらない』

『左様。「起動」の権限を行使できるのは儂ら碑文の三賢者だが、起動した後の「停止」の権限を行使できるのは製造者である王立七十二階位特務騎士団ゆえにな』

『止められるのは旅団の頂点ただ一人。あとはわかるわね？』

序列一位・騎士王ゼルブライト。

英勇の再来というべき偉力を生まれ持った者。

『あなたが虚構精霊を受け入れる気になれば、私たちから騎士王に話をしてあげる』

『イスタルシル支城の三階、天鏡の間へ』

『急ぐとよいぞ。でなければ三大姫たちがどうなるかのう』

消えていく三賢者たちの碑文。

同時に、崩壊していく「隠者の小部屋」。

取り残されたレンもまた、消滅する空間の衝撃に呑みこまれて――――

気づいた時には、再びイスタルシル支城の一階・人工庭園に立っていた。

「フィア先輩！」

一緒にいたはずの大天使がいない。

自分たちをここで待ち伏せしていた虚構精霊の試験体もだ。瑞々しい緑の庭園もそのままで、フィアと虚構精霊の姿だけが見あたらない。

……戦いがあったらここも激しく損傷してるはず。

……でも、俺がここに入った時とまったく変わらない。

戦闘の場所を移したのか。

あるいは別の理由があってフィアがいないのか、それはわからない。だが。

「イスタルシル支城三階、天鏡の間……」

碑文の三賢者が発した言葉を、レンは自分に言い聞かせるつもりで口にした。

虚構精霊の完成体。

反の虚構精霊、拒の虚構精霊、非の虚構精霊――碑文の三賢者は、あの完成体をもってすれば終焉戦争の再来をも食い止められると自負していた。

……それに、あの言葉にできない不気味な雰囲気もそうだ。

……精霊をあんなにも怯えさせるなんて。

胸を締めつける動悸。

キリシェにフィアに、エリーゼ。彼女たちの強さは十分すぎるほど理解しているつもりだが、それでも不安をぬぐい去ることはできない。

竜でも天使でも悪魔でもない。

あの虚構精霊は、本来ならばこの世界に存在しないはずの異相の怪物なのだから。

「停止できるのは一人だけ……」

怪物を製造した旅団の、その頂点。騎士王ゼルブライトだけが三体の虚構精霊を止めることができる。

――互いに、互いの目的を賭けて。

旅団『王立七十二階位特務騎士団』が望むのは、女神法印と竜法印。

旅団『再来の騎士』が望むのは、虚構精霊の停止。

二つの旅団が互いに欲するものを賭けた上での決戦。

「いいさ、上等だよ」

動悸に痛む胸に手をあてて、レンは奥歯をかみつぶした。

「止めてやる。俺は絶対、あんたたちに屈しない！」

中庭の大地を蹴って走りだす。

目指す先は三階。

虚構精霊を止める権力を持つ男の下へ。

騎士王ゼルブライトの待つ場所へ、レンは駆けだした。

3

イスタルシル支城・地下。

秘奥領域『精霊遊戯の小箱』――

黒水晶の欠片で覆いつくされた漆黒の空間。

四方を囲む壁には輝く神性文字を組み合わせた詩篇が刻印され、頭上を仰げば、まるで広大な夜の帳と、そこに輝く星々を見ているような気分になる。

安らぎの光景。

居るだけでふしぎと心が落ちついていく。

だが、その光景もまた「碑文の三賢者」による人為的な原風景であると。

ここを訪れた三大姫は見抜いていた。

「完全な閉鎖空間だな。空気の移動がないせいでレンの匂いが感じ取れない」

「私の加護もですわ。レンにつけた探知術式でも依然として後を追えません。エリーゼ、あなたの霊知はどうですか？」

「……んー。すっごい雑念に邪魔されてる。安定するには当分時間がかかるね」

諦め半分、溜息半分の表情で腕組みする先代魔Eエリーゼ。

「まったく。フィアが余計な隠し部屋見つけるから」

「気になったんだから仕方ありませんわ。戦ってる途中に光の怪物が逃げだして、それを追ったらこの場所についたんですもの」

肩をすくめてみせる大天使フィア。

既に、その背中には純白に輝く翼が顕現している。

「でもまさか、こんなモノと遭遇するとは思いませんでしたけれど」

向かいあう怪物を睥睨する金髪の大天使。

いや、本来ならば怪物という表現すら適切ではないのかもしれない。そんな単純な言葉で表しきれる低級な存在ではない。

精霊と同じ、完全なる霊的波動体。

反の虚構精霊（エイドス）、拒の虚構精霊（エイドス）、非の虚構精霊（エイドス）――

この世界に存在しないはずのモノ。

半透明な漆黒の翼を羽ばたかせた、異相の三精霊がそこにいた。

「なるほど。コイツだったわけね。確か虚構精霊（エイドス）だっけ」

滅多（めった）に表さない鬼気迫（せま）る感情を言葉にこめるエリーゼ。

「三百年前のエルラインの言葉を思い出しました。『世界でもっとも哀れな存在を見た』という言葉。あの時は不完全だったと聞きましたが、まさか三百年かけて完成させる者たちがいたなんて」

傍（かたわ）らで、悲壮の表情を浮かべるのはフィア。

そして。

「終焉戦争（しゅうえん）のアレに対抗する手段のつもりか。怪物を倒すのには怪物を。それが負の連鎖であることに、なぜ人間は気づかない」

キリシェは、三体の虚構精霊（エイドス）を前に静かにまぶたを閉じた。

……なんと醜いのだろう。

……この怪物も。そして、それを生みだす人の心の弱さも。

終焉戦争。

これもまた、あの戦火の残り火の一つ。三百年前の戦いはまだ終わっていない。

「こいつらだけはレンに任せるわけにはいかないな」

その呟（つぶや）きは、キリシェの紛（まが）う事なき本音だった。

「同感ですわ。これは私たちの責務。三百年前、あの戦いですべての禍根を断（た）ちきることができていれば、こんな哀れな怪物も生まれなかったかもしれません」

「レンはレン。アタシたちはアタシたち。それぞれ戦うべき相手がいるからね。きっと、この先もずっと。そして……それが英勇になるってことだよ。レン」

虚構精霊（エイドス）と向かいあう三大姫（さんだいひ）。

彼女たちは知っている。

終焉戦争を鎮（しず）めた剣帝（けんてい）エルラインと、そして彼を追う少年（レン）とを隔てる遙（はる）か遠き距離。

どこまでも見上げても、まだその背中が映るには至（いた）らない。

だから――

「わたしたちの心配は要らない。レン、お前はただ、まっすぐ進み続けることだけを考えればいい」

城のどこかにいるはずの少年の名を呼んで、キリシェは虚構精霊と向かいあった。

その後ろではフィア、そしてエリーゼも。

竜姫キリシェと『非の虚構精霊』。

大天使フィアと『拒の虚構精霊』。

先代魔王エリーゼと『反の虚構精霊』。

「こっち始めるよ」

「では私も。くれぐれも油断しないように」

「互いにな」

三人の少女は、同時に駆けた。

虚構精霊——

古代の神性都市が生みだした最悪の高位存在、その力を止めるために。

‖‖‖‖‖‖‖

イスタルシル支城・二階。

象牙色の絨毯が敷かれた長大な回廊を、息を切らせて走り続けた。

……一秒さえ惜しい。

碑文の三賢者が起動させた虚構精霊を止める方法は一つ。この都市の覇者として君臨する男の下へとたどり着き、その「停止」権限を発動させること。

「っ、くそ。三階の階段はまだなのか……!?」

『頑張ッテ!』

背中にしがみつく上の始原精霊の声。

頭上には、天井すれすれを浮遊してついてくる火の始原精霊の姿もある。精霊二体に見守られながら城を走り続けて、もう十分近くになるだろう。

全力疾走で走り続けて十分間。それでもまだ三階に続く階段は見あたらない。

……それに、どういうことなんだ。

……この二階に王立七十二階位特務騎士団の姿がないなんて。

防衛部隊である特務騎士、そして彼らの指揮官である王立七十二階位特務騎士団本隊のメンバーとも一人として遭遇しない。

彼らの追跡が、二階に上がった途端にぴたりと止んだのだ。

――嵐の前の静けさ。

不気味なほどに静まりかえった通路に、レンの靴音だけが幾重にもこだまする。

額にうかぶ汗をぬぐいとろうとして。

「そういうことか……」

踏みだしかけた足をぎりぎりで止めて、レンはその場で急停止した。

撒菱。

レンの行く手を阻むように、通路いっぱいに撒き散らされた鈍色の破片。一つ一つは数センチ程度しかない鋼鉄の破片だが、その中心からは鋭利な棘が無数に生えている。

踏みぬけば、靴底を突き貫いて足裏を抉る。

戦馬の突進さえも止める設置型の罠だ。

「……」

ゆっくりと、足下を凝視しながら撒菱の合間を縫って歩を進めていく。

……俺の足を止めるための罠じゃない。

……ただの自己顕示だ。この先で誰が待ってるかを予告するための。

自分は知っている。

世界中から卓越した剣士が集まりひしめきあう王立七十二階位特務騎士団において、この撒菱をはじめ、あらゆる暗器を使いこなすことで知られる最上位剣士を。

――通路のなかばに設けられた舞踏場。

その中心でこちらを睨みつけるのは、片手半剣を携えた壮年の騎士だった。

「遅かったな」

低い笑い声をもらす男。

短く切りそろえた赤銅色の髪に、冷たい灰色の双眸。戦闘衣から露出する肌は幾年もの修練のなかで灼熱の陽に焼かれることで、黒の甲冑と同化するほど黒く日焼けしている。

序列二位・外法騎士カサディン。

「碑文の三賢者、よほど貴様に執着していたと見える」

「……やっぱり。王立七十二階位特務騎士団はアイツらのこと知ってるのか」

「貴様も聞いていよう。覇都の失われた技術は三賢者から提供された。我々が奴らの研究を実現し、その成果を基に奴らはさらに研究を深化させてきた。この世界のあらゆる秘境を蹂躙し、あらゆる旅団を制し、天界・冥界をも従える。その先に――」

「世界録」

「そう。栄光の頂点だ。そして、それはもはや手中にあるも同然」

抜き身の片手半剣を引きずるようにして一歩、また一歩と迫ってくる外法騎士。

「あの小賢しい箴言を別とすれば、碑文の三賢者の研究は有用だ。……奴らは狂人だよ。知識の探求に取り憑かれた占の狂人たち。だがお陰で、世界録の在処が『終焉の島』であると見当がついた。その島が竜帝、女神、魔王による封印がなされていることもな。奴らがいなければ到底知り得ることはなかった知識だ」

「それで法印のことも知ってたのか……」

終焉の島を閉ざす三法印。それは法印を施した高位存在たちの秘密であったはずだが、終焉戦争以前より世界の経過を観察してきた三賢者ならば、法印の存在を知っていても何一つ不思議ではないだろう。

……碑文の三賢者は俺のことも観察してた。

……だから俺が法印を持っていることも、王立七十二階位特務騎士団は知ってたのか。

「そう。貴様の女神法印。竜法印は、貴様の仲間の竜姫キリシェが所持しているはずだな。まずは女神法印から渡してもらおう」

「渡せるかよ。法印は、俺が託されたものだから」

天界の女神から得た、かけがえのない信頼の証そのもの。

何者にも渡せない。

「それに、アンタがここにいるってことは……この先にいるんだろ。王立七十二階位特務騎士団の序列一位が！」

黒衣の騎士に向かって剣を構える。

「俺は虚構精霊を止める。アレは起動させちゃいけない存在だ」

「あいにくと。ここは我らが旅団の拠点だ。侵入者のお前を見過ごすわけにはいかぬ……いずれにせよ

無謀この上ない。ゼルブライトにお前ごときが挑むというのはな！」

不敵な笑みをうかべ、剣を上段に構える最上位剣士。

互いに自身の間合いを目指して駆けて――

「よかった、何とか間に合った」

高らかに鳴りひびく金属の衝突音。

と同時に、何かに弾かれたように外法騎士が後方へと跳び退いた。

「こうしてお会いするのは二度目ですか。序列三位カサディン」

舞踏場（ダンスホール）に響く青年の声。

カサディンが退いた空間が揺らぎ、現れたのは金髪の青年だった。

絹糸（きぬいと）のように流れる髪に、印象的な紫の双眸（そうぼう）。凛々（りり）しくも柔らかい面立ちに、とらえどころのない穏和で中性的な微笑（びしょう）を湛（たた）えた剣士――

「貴様か、剣聖シオン！」

肉食獣のごとく眼光（がんこう）を輝かせる外法騎士。

王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）の幹部が放つ殺気を浴びながら。

「これは奇妙な光景だ。剣聖、そして英雄の再来が私の前に揃（そろ）うとはな」

「いや、僕も覇都（はと）だけは来たくなかったんですが。でも放（ほう）っておくわけにはいかない物が、この城にはたくさんあるでしょう？」

剣聖シオン、そう呼ばれた金髪の剣士が飄々（ひょうひょう）と息をついてみせる。

そんな彼を前にして。

「……あ、あの……」

レンは、発する言葉が見つからなかった。

気安く声をかけるには、その若き天才剣士はあまりにも高名すぎて。

けれど萎縮（いしゅく）するには、彼の湛える雰囲気があまりに柔和で穏（おだ）やかだったから。

「やあ。初めまして」

目の前の剣士が明るいまなざしでふり返る。

初めて出会う。

けれど、疑いようがなかった。

「剣聖……」

「ほらシオン、あんたが遅刻するせいでギリギリもいいところじゃない」

レンの呟きに答えたのは本人ではなく、彼の隣に立つ結界士の少女だった。

結界士・夏蕾。

「あたし、走りっぱなしで汗だくなんだけど」

「だからゴメンて。女神様と話しこんでたら、女神様の話がとにかく長引いちゃって。放っておくとあと三年くらい喋り続けてたかも」

「……最低」

大仰に天を仰ぐ仕草の少女。

イスタルシル支城に突如として現れた『精霊の調べ』。その二人を睨みつけ、外法騎士と呼ばれる男が目を細めた。

「結界士・夏蕾、貴様の隠蔽法術で姿を隠してシオンをここまで導いたと。だが、この城でどうやって隠蔽法術を維持した？　天使の隠蔽法術であってもたちどころに術が解除されるはずだがな」

「現代最高の結界士が、過去の古くさい失われた技術に遅れをとると思う？」

にやりと口の端をつり上げる少女。

「故きを温ねて新しきを知れってね。あなたたちは過去の知恵に頼りすぎなのよ。今までの自分と向かいあって、新しい自分を発見する。常に前へと進む努力を怠らない。それが面白いんでしょ。人生っていうのは」

「なるほど。太古と最新……今度は貴様に分があったということか」

好戦的な笑みで返す王立七十二階位特務騎士団の第三位。

その男に対し。

「ありがとう夏蕾。あとは手筈どおり地下へ。エリエスと合流して、彼女たちの支援を。さて、気は進まないけれどお相手しますよ。序列三位カサディン」

「これは光栄だ。あの剣聖と剣を交える機会が巡ってこようとはな」

神秘的な輝きを発する双剣。

精霊の力を宿して輝く精霊具を握る剣聖と、その姿に笑い声を漏らす外法騎士。

「さて、レン」

こちらに背を向けたまま、剣聖。

「虚構精霊と碑文の三賢者は僕らとしても放っておけない。それを止めるというならば、この場は僕が引き受けよう。だけど、ここから先は気迫だけでは進めない。君自身の強い決意が必要になる」

「……決意？」

「そう。自分の全てを失うかもしれないという覚悟だ」

穏やかな口調ながらも厳しさを含んだ声音。

「この先に待っている騎士Eは、キミの正反対の存在だ。彼と戦うことになれば、君は、君が今まで培ってきた全てを否定されるかもしれない。それでも進む？」

忠告か警告か、それとも戒めか。

偉大なる剣聖の言葉を前に。

「……ありがとうございます。でも、迷ってる時間も惜しいから」

躊躇わなかった。

靴音を響かせて舞踏場の床を蹴る。

剣を構える剣聖に見送られ、レンは舞踏場のさらに先を目指して駆けだした。

——三階『天鏡の間』。

騎士Eの待つ戦場へ。

偽英勇の少年は、背後をふり返ることなく、そこに続く階段を駆け上った。

その背中を見送って。

「なんだ、心配して損した」

剣聖シオンは小さく苦笑した。

精霊の力の宿りし双剣。その一本を順手に構え、もう一本を逆手に握りしめる。

「序列三位カサディン、次代の英勇ってどういう人物だと思いますか」

「……なに？」

「英勇の資格ですよ。英勇と讃えられるに足る条件。そんな条件があるとしたら、それはいったい何だと思いますか」

「世界録を見つけた者以外におるまい」

「あなたらしい答えです。でもね、僕は少し違うことを考えていて」

予見者の呟き。

「確かめたいんです。そのためにここに来たんだから」

英勇の器量を授かりし天才が口にしたその言葉は、誰に聞かれることなく――

渦巻く世界の大気へと沁みわたり、そして静かに消えていった。

4

閉じた部屋。

一切の大気の流出を許さず、一切の音をもらさず、一切の情報を外部に与えない。

四方を囲む漆黒の壁には輝く神性文字を組み合わせた詩篇が刻印され、その景観はさながら天然の星空を想わせる。

イスタルシル支城・秘奥領域『精霊遊戯の小箱』――

「へえ。ここがコイツら三体の遊び場ってわけだ。いや、遊び場であり飼育場かな」

凝視するように目を細め、エリーゼは対峙する怪物を睨みつけた。

半透明な赤紫の身体を持つ『反の虚構精霊』。

ちょうどエリーゼが見上げるほどの虚空に浮遊しているが、その頭部に「眼」らしき器官がないため

に、どこを見ているのかもわからない。

「だけどおバカさん。そんな嫌な気配出してたら、眼がなくたってアタシのこと睨んでるって丸わかりだよ」

かがみ込み、自らの足下にできた影を指先でなぞる。

……ちゃぷん。

エリーゼの影から生まれるさざ波。それがまたたく間に巨体の魔獣となる。

三頭の冥犬（ケルベロス）の影。覇都（はと）の広場で召喚し、そして無数に分裂したうちの一体だ。

「食らいつけ」

主（あるじ）の命を受けて咆吼（ほうこう）を上げる魔獣。停滞する大気をも振るわせる速度でもって床を蹴（け）り、冥界（めいかい）を代表する獣が虚構精霊（エイドス）へと迫（せま）る。

「さあどうする。こいつの影、無敵だよ？」

……無害ゆえに無敵。

……あらゆる衝撃と法術（ほうじゅつ）に反応して分裂・無効化するからね？

魔皇姫（まこうひ）エリゼリスが三頭の冥犬（ケルベロス）を使い魔として欲（ほっ）した理由の一つ。それが、この影による無類の偵察能力だ。

法術に類する攻撃か。あるいは物理的な攻撃なのか。

無害である三頭の冥犬（ケルベロス）の影を向かわせて、相手にわざと反撃させるよう差し向ける。そしてエリーゼは、その反撃手段から相手の能力と強さを推しはかる。

……さあ、三頭の冥犬（ケルベロス）の影にどんな攻撃を仕掛ける？

……攻撃手段を全部さらけだすまで、この影は、永久にお前にまとわりつく。

絶対の信頼をおく使い魔。

その疾走を見届けようとエリーゼが一歩足を踏みだした、刹那（せつな）。

『――――』

反の虚構精霊（エイドス）が、漆黒（しっこく）の翼を大きく羽ばたかせた。

▪▪……▪▪▪▪……▪▪……▪▪▪……

『*Ies……orb……mihhya……lement*』

虚無の言霊（ことだま）。

虚構精霊（エイドス）の口から唱えられた読解不能の言語が、そのまま『言葉の姿をした何か』へと変貌（へんぼう）。空間を

浸食しながらエリーゼと三頭の冥犬へと迫る。

そしてそれが――

「退がれ三頭の冥犬！」

エリーゼの全身を、喩えようのない怖気が襲った瞬間だった。

「ケルベ……」

何もなかった。

悲鳴も抵抗も、発する音も光もなく、目の前で三頭の冥犬の影が消滅。

残ったのは自分ただ一人。

「――この呪詛はっ!?」

魔王の霊知をもってしても看破できない未知の波長。

無敵のはずの三頭の冥犬の影が消滅したのを目にした直後、エリーゼは迷わず床を蹴って虚空へと身を躍らせた。

同時に、思いつくかぎりの防御法術を幾層にも組み上げて展開。

そこに迫りくる『言霊』。空間を浸食しながら肥大化するソレが、空中に逃げたエリーゼを追って、その右足に絡みつく。

痛みはなかった。

ただ猛烈な寒気と違和感のみが足から背筋へと伝っていく感覚とともに。

――太股にぽっかりと空いた小さな穴。

虚構精霊の放った言霊の『文字』の一つが太股に触れた瞬間、まるで消しゴムが鉛筆の文字列を消すかのように、太股が抉られていた。

「はっ、やってくれるじゃない！」

展開した防御法術があっさりと食い破られ、太股に硬貨サイズの貫通痕。

だがこれは覚悟の上だ。あれだけ不気味な波長を持つ力の集合、悪魔の防御法術が突破されたからと言って不思議ではない。

……むしろ、この程度の傷なら安いもんだよ。

……あの呪詛は防御も迎撃もダメ。避けるしかないってわかったんだから。

右足を庇いながら床に着地。

禁呪の時間さえ惜しい。

この姿の法力で瞬時に発動できる法術のうち、最上位の術式で撃ち倒す。

「夜の宝珠(ほうじゅ)たち!」

雷光(らいこう)に酷似(こくじ)した光をまとう黒の七宝石。

エリーゼの頭上に生まれた法力結晶が、螺旋(らせん)の軌道を描(えが)きながら宙へと上昇。

刹那(せつな)。

▪▪

『*Arma*』

翼を羽ばたかせる虚構精霊(エイドス)の周囲に生まれる、何千本という赤紫色の光刃(こうじん)。

その刃先が空中でエリーゼへと向けられて――

「千々(ちぢ)に砕けよ!」

▪▪

『*Loar*』

光の流星と黒の礫が、真正面から衝突(つぶて)した。

虚構精霊(エイドス)の言霊とともに降りそそぐ無数の光刃。それを虚空(こくう)で次々と撃ち落とすのは、エリーゼの生みだした黒色の七宝石だ。

巨大な水晶形をした宝石が砕け、無数の欠片(かけら)となり、その一つ一つが虚構精霊(エイドス)の光刃とぶつかって相殺(そうさい)。空中で混じりあうように溶けあって消えていく。

澄みきった音色(ねいろ)。

無数の法力結晶が砕けては消えていく音色が何百、何千と連なりこだまして。

「宝珠が、押し負けた!?」

身を翻(ひるがえ)したのはエリーゼだった。

全(すべ)ての宝珠の欠片が消滅してなお、虚構精霊(エイドス)の光刃はまだ虚空に半分以上も残っている。

にもかかわらず。

▪▪

『*Arma*』

虚空(こくう)を浮かぶ怪物の周りに生まれる、先と同じ数だけの赤紫色の光刃(こうじん)。

頭上を埋めつくす刃(やいば)。もはやどれだけの数が浮かんでいるか分からない。その光景に、エリーゼは我知らずのうちに苦笑をこぼしていた。

「あれ、これちょっとヤバイかも」

もっとも自信のある法術（ほうじゅつ）の一つが、虚構精霊（エイドス）の光刃に押し返された。それも正面からの撃ち合いによる完全な力負けだ。

……最速で発動する術式（ストック）の中での最大威力だったんだけど。

……それが発動速度でも威力でも後れを取るっていうのは、さすがに想定外だよ。

さらには、いまだ相手の全容（ぜんよう）が解析できないことも想定外の一つ。

それが何より不気味な重圧としてのし掛かってくる。

「だけど」

『――――』

「癇（かん）にさわるね、その無感情の心象。何も映さない虚構（きょこう）そのものだ」

翼を再び広げる虚構精霊（エイドス）。

挑発的とも取れる姿を見上げ、エリーゼは押し殺した声で呟（つぶや）いた。

「上等。今度こそぶっ飛ばしてあげる」

再び降りそそぐ血色の光刃。

視界の全てを埋めつくす光線に対し、エリーゼは自ら飛びこんだ。夜の宝珠による迎撃も防御法術も展開しない。

我が身一つで、眩しき光の雨の中へ。

身を屈めて一刃目をかわし、身を捻って二刃と三刃をすり抜ける。さらに後方から降りそそぐ四刃を、エリーゼは自らの手のひらでもって受け流した。

ジッ。

法力を集中した手のひらが裂け、直後に血が噴きだす感覚。

だがそれでも止まらない。

光の刃が頬を掠め、肩を切り裂き、さらに脇腹を大きく削られてなお、幼女の姿をした先代魔王は走る速度を一瞬とて緩めなかった。

何百という光刃が視界の前から横へと通りすぎていく。

そして虚構精霊の足下へ。

「さあ捕まえた」

■

『*Loar*』

回避を許さない至近距離。

エリーゼの全方位の空間から無慈悲の光が降りそそぎ――

「夜の断章『無明の世界』」

黒の風が、吹き荒れた。

吹きあれる障気が、迫る光刃をことごとく彼方へと吹き飛ばす。

冷たく混沌とした漆黒の障気。それが赤紫色の虚構精霊の前で渦巻き、みるみるうちに収縮していく。

「妾を仕留めるには一瞬足りなかったな」

障気の中に浮かびあがったのは、褐色の肌をした妖艶なる美貌の悪魔だった。

魔皇姫エリゼリス。

エリーゼとして身につけていた衣装は禍々しい色に変化し、結わえていた髪はほどけ、膨大なる黒の

障気にあおられて絶えずなびいている。

——魔王再誕の禁呪。

闇雲に光刃をかわしていたわけではない。防御法術さえ惜しみ、エリーゼが組み上げていたのがこの禁呪だ。

「さて醜きケモノよ、覚悟は良いな？」

幼生体としての姿から、転生前の魔王の姿へ。

膨大な法力を消費することから禁呪を維持できる時間は極めて短いが、魔皇姫として発動する法術は、幼生体のそれとは別次元の力を誇る。

「鎗」

▪▪

『*Arma*』

力ある言葉。

美貌の悪魔が掲げた右手に黒の障気が収束し、一本の長大な鎗を構成する。

「狙い——」

▪▪

『*Loar*』

虚構精霊の放った何千という血色の光刃が、エリゼリスの手にする法力結晶に触れる寸前で、ただの光の粒子となって消滅した。

「なんだ、意外に脆い」

力の解放。

冥界の姫が、エリーゼを想わせる悪戯っぽい笑みを浮かべてみせる。

「穿て」

「待ちなさいエリーゼ！」

響きわたる大天使の警鐘。

だが遅かった。

エリゼリスの黒鎗は、既に『反の虚構精霊』目がけて放たれて———

エリゼリスの身体を貫いていた。

「っ、……法術反射？……いや違う。法術事象そのものへの干渉か!?」

唇から鮮血をこぼしながら、エリゼリスは自分の胸を貫いている黒鎗を見下ろした。

——法術事象への干渉。

魔皇姫の力にさえ干渉し、因果を歪めて反射する能力。

跳ね返された法術を受けるまでまったく気づけなかった。

これが虚構精霊の身体に備わった生来の能力。鏡が光を反射するように、この『反の虚構精霊』の構造そのものが法術を反射する仕組みになっているのだろう。

そう理解して。

「……は……なるほど」

凄惨な笑みをうかべ、悪魔の少女は自らの胸元から黒鎗を引き抜いた。

「やるではないか、妾の法術に干渉するとは！」

ヒュンと鎗を手元で一回転させ、鎗先の血を振りはらう。

鎗を抜いた傷痕からは一滴の血も噴きださないものの、魔王たる少女の額には激痛をしめす苦痛の汗が滲んでいる。

だが、それでも冥界の姫は笑っていた。

「済まないなフィア。警告を無駄にした」

「まったくです。せっかく私が身体を張って先に試したというのに」

エリゼリスのふり向いた先に立つ金髪の大天使。

半透明な黄金の身体を持つ精霊――『拒の虚構精霊』を睨みつけがら、フィアが自分の口元をそっと拭う。

「その傷が？」

「ええ。唇を切りました。自分の拳でね」

物理反射。

その特性をエリゼリスより一瞬早く自らの身で理解していたからこそ、彼女は法術に対して警鐘を鳴らすことができたのだろう。

……赤紫の個体は法術反射で。

……黄金の個体は物理反射というわけか。

「キリシェ、そちらはどうですか？」

「試してみたが、こいつは何も反射しない」

無傷でキリシェが首肯。

対峙する相手は、蒼碧色の身体を有する個体『非の虚構精霊』。

「だが無限に再生する」

同じく無傷でキリシェと向かいあう虚構精霊（エイドス）。

一見まだ何も戦闘らしい戦闘が起きていないようだが、違う。実際にはエリゼリスとフィアよりも先に仕掛けていたのがキリシェだ。

拳の殴打（おうだ）と法術。

翼を潰（つぶ）し、尾を焼きはらい、両腕にいたっては完全に消滅させたにもかかわらず。

「正確に言えばコレも再生ではなさそうだ。被弾した攻撃そのものを『無かった』ことにしてかき消す事象干渉の類（たぐい）だな」

「たとえば毒や呪詛（じゅそ）の類も、かき消されてしまうと？」

「そうだと思う。……面倒だから再生と言ってしまうが、とにかく頭部を潰して再生するまで一秒とかからない。なかなか呆（あき）れる再生速度だ。しかもコイツはそっちの二体よりも狡猾（こうかつ）で、攻撃を受けた途端に逃げに徹して、再生するまで絶対に攻めてこない」

「追えませんか？」

「試した。そのせいで服が台無しだ」

やれやれと溜息（ためいき）をつくキリシェ。

その衣装であるスカートの後ろ半分が、繊維ごと何かに浸食（しんしょく）されて消滅していた。

――虚無の言霊（ことだま）。

瞬時に追撃（ついげき）へと移ろうとして迂闊（うかつ）に近づけば、解析不能の攻撃が待っている。かといってどんな攻撃も数秒とたたずに回復される。

「妾（わらわ）も浴びかけた。あの言霊（ことだま）は良くないな。終焉戦争（しゅうえん）の時に受けたアレと似ている。危険な匂いのする波長だ」

時間にして一分も満たない交戦。だが、虚構精霊（エイドス）というモノがどれだけ奇怪（きっかい）な存在であるかを理解するには十分すぎた。

――防御と迎撃を許さず、回避するしか手だてのない言霊。

――それを避（よ）けて距離を縮めても、今度は何千という無数の光刃（こうじん）に圧倒される。

「しかも光刃を被弾覚悟で強引に近づいても、待っているのは法術事象を歪曲（ほうじゅつわいきょく）された上での法術反射とはな」

黒鎗（やり）を握りしめて再び背後をふり返る。

「さてどうする。入れ替えるか？」

「確かに一理あります。相手を入れ替えてしまうのは策（テ）の一つでしょうね」

乱れた髪を手櫛で梳りながら、フィア。

「私が法術反射の個体を狙い、エリーゼが物理反射の個体を狙う。それだけで倒せる相手ではないでしょうが、作戦自体は試してみる価値がある。でも……」

「でも？」

「……」

キリシェの問いに、大天使の答えは沈黙だった。

そして。

「ああダメ。キリシェ、エリーゼ、今のは忘れてください」

くすりと。

かつてその好戦的な性格と無類の力で、同胞の天使たちからも暴虐天使として恐れられた少女が、三百年忘れていた危険な笑みを口元に湛えた。

「決めました。私、やっぱりコッチを相手にします」

黄金色の個体。

物理事象を反射する『拒の虚構精霊』を指さして、そう宣言した。

「私に私の頬を殴らせるなんて……なんという屈辱……絶対に許さない。相手の特性？　そんなの知ったことではありません。コイツは、私がこの手で殴り倒す！」

「言うと思った。ははっ、気が合うな」

拳を握りしめるフィアに、エリゼリスは不敵な笑みで頷いた。

相対するのは赤紫色の個体。

すなわち法術事象を反射する『反の虚構精霊』だ。

「拙い小細工はやはり性に合わない。キリシェ、そっちの個体は引き続きお前が相手しろ。妾はコイツを相手にする」

「好きにしろ。わたしは相手がどれでも構わない」

悠々と頷き返す竜の少女。

「それよりレンは？　場所はわかったか？」

「霊知で居場所までは特定した。城の三階だな。三頭の冥犬の影を一体向かわせたから、状況確認も程なくできる」

淡々と受け答える三大姫たち。

かつて終焉戦争を鎮めた少女の、絶大なる力に裏づけされた自信。

だが――そんな少女たちに一つ誤算があったとすれば、それは「読み違い」だろう。

今まさに偽英勇（えいゆう）の少年が対峙（たいじ）している男の強さ。

異端（いたん）の覇王。

虚構精霊（エイドス）さえ不純物と切り捨てる男の存在を、三大姫はまだ知らない。

Record.5　異端の覇王ゼルブライト

1

イスタルシル支城・三階『天鏡の間』。

天井の照明からもたらされる光が、磨きあげられた大鏡によって幾重にも反射し、美しく荘厳な雰囲気を生みだしている。

その煌びやかな光に照らしだされたのは、一人の少年だった。

「……アンタがゼルブライト？」

「――――」

黒衣の剣士は横顔をこちらに向けたまま無言。

だがその雄々しき佇まいが何よりも明確に、自分の予感が正しいと告げている。

騎士王ゼルブライト。

世界最大の騎士集団『王立七十二階位特務騎士団』七十二人の頂点に立つ者。

短く刈り上げた灰色の短髪に、冷たく輝く黒の双眸。

並の成人男性より頭一つ抜きんでた長身に、黒の戦闘衣の上からでもわかる筋骨逞しい肉体。鎧など飾り。あるいは鞘に収まったままの両手剣さえ、この男には本来必要のないものなのかもしれない。

極限を越えて鍛え研ぎ澄まされた己の肉体こそが、至高の盾であり矛であると。

その佇まいが物語っている。

……だけど、なんだ……この感覚。

……同じ部屋に立ってるだけなのに、全身が焼けついたみたいに痛い。

張りつめた空気。そんな表現さえ生温いとしか言いようがないほどに、眼前の男の重圧感はあまりに攻撃的で、息すら詰まらせる程に圧倒的だった。

どんな竜とも天使とも悪魔とも違う、抜き身の刃さながらの鬼気迫る存在感。

その男に向けて。

「碑文の三賢者は、アンタが虚構精霊を止める唯一の権限者だって言ってた」

レンは一歩足を踏みだした。

「無理だとわかってても、頼みたいんだ。虚構精霊を止めてくれ」

「――――」

序列一位の剣士は無言。

そんな彼に向かって、さらに一歩足を踏みだす。

「虚構精霊を前にして俺の精霊たちが怯えてた。……あの怪物は何かがおかしい。アレは多分、この世界にいちゃいけない存在だから」

碑文の三賢者は、あの人造の精霊を制御できると言っていた。

しかしあの怪物を制御して使役することが、本当に正しい道なのだろうか。あの怪物を飼い慣らすことが終焉戦争の再来に向けた切り札になるのだろうか。

「小猫だと思って育てたものの正体が獅子だった。俺にはそう感じられてならないんだ。アレを製造して戦力になんて考えるのは危険すぎる」

横顔を向けたまま微動だにしない騎士Eゼルブライト。

その彼が、さらに一歩近づいて。

「だから頼む、虚構精霊を止め――」

視界から。

ゼルブライトの姿が消えたのは、その時だった。

……え？

何一つ言葉を発する余裕もなく、剣を抜く間も与えられずに。

レンは、天鏡の間の壁へと吹き飛ばされていた。

意識を根本から断つ衝撃。

「……っ……は……っ……！……」

竜帝カルラの尾を受けた時にも匹敵する激痛と破壊の衝撃に全身を蝕まれ、レンは受け身を取ることもできずに床へとくずおれた。

「――――――――――」

ぱらぱらと、亀裂の走った壁面から降りそそぐ小さな小さな鏡の欠片たち。鏡でできた床に倒れた少年の背中に、鏡の破片が雪のように降り積もっていく。

反響する音。

千々に砕けた鏡の破片が床に落ち、そして転がっていく微かな音色。

……俺は？

……俺は……いま床に倒れてるのか？

割れ砕けた鏡の壁面から、床にふりそそぐ鏡の欠片たち。

その音に眠っていた意識を揺さぶられ――

「っ、……！」

レンは意識を取りもどした。

倒れた自分。上着が、右肩から左の脇腹にかけて斜めに千切れかけている。

騎士Eの間合いに踏み入ったと同時に、かつて経験したことのない尋常ならざる速度でもって袈裟斬りにされたのだ。

……そうだ。

……俺は、目の前のコイツに……斬られたのか？

床に手をつき、よろめきながらも立ち上がる。

隙だらけの所作。

だが黒衣の騎士は何一つ動きをみせず、そんな自分を冷酷に見下ろすだけだった。

「天使の加護法術。碑文の三賢者に分断された時、大天使フィアが咄嗟につけた探知術式だな。しかし天使の加護とはこの程度か。底が知れる」

騎士Eゼルブライト。

世界最大の騎士集団『王立七十二階位特務騎士団』の頂点に立つ男が、抜き身の両手剣を握った姿で自分を見下ろしていた。

一切の慈悲なき眼光。

その目を見返して、レンは騎士Eの意志をようやく悟った。

「……そう……最初から……話し合う気なんて、アンタは……ないんだな」

肩から胸にかけての激痛に奥歯を噛みしめ、剣を支えに顔を上げる。

千切れかけた服ごしに浮かびあがる剣撃の痣。

……フィア先輩の加護？　探知術式？

……わからないけど、それが無かったらどうなってたんだ。

「話し合うとは？」

無骨な鋼の大剣を携えた騎士E。

歴戦の剣士でさえ両手を必要とする超重量の剣。それを片手で、まるで枯れ枝のように軽々と水平に構えながら。

「お前がいる場所は、どこだ」

「……」

「ここは覇都エルメキア。王家の住まう本城の護衛にあたる支城。お前はそこに忍びこんだ一介の賊。会話が必要か？　交渉の余地があるのか？」

無感情の声。

すべてを拒絶する断絶の声音に語りかけられて、レンは理解した。

騎士王ゼルブライトという男は王立七十二階位特務騎士団の誰とも違う。それどころか、今まで出会ってきたどの相手とも異質であるということを。

たとえば竜帝カルラ。

竜の渓谷でキリシェを取り返そうとしてきた竜の長でさえ、戦う前に、「竜の渓谷から去れ」という警告は発してくれた。

にもかかわらず、同じ人間でありながらゼルブライトは違う。

……出会った時点から戦いしかない。

……同じ人間なのに、竜や悪魔よりも遠い存在に感じる。

互いの「我」の衝突のみに餓えた覇道の落とし子。

今まで出会ってきたあらゆる竜、天使、悪魔よりも異質に思える存在。それこそがこの異端の覇王ゼルブライトだった。

「お前が口にした虚構精霊。碑文の三賢者に何を吹きこまれたか知らないが」

こちらを冷酷に見つめる男が、片眉を小さくつりあげた。

「あんな玩具に興味などない。管理は序列四位に一任している」

「……なんだって!?」

「もっとも序列四位の居場所を知っているのは序列一位だけ。その意味では三賢者の言葉も間違ってはいまい。そしてお前がここにいるということは、碑文の三賢者の誘惑は払ったということだろうが」

抜き身の刃そのものを思わせる凍てついた眼光。

その瞳の輝きを失うことなく、覇都の頂点に立つ男は小さく口の端をつりあげた。

「滑稽だな。虚構精霊の力を拒むとは」

「どういう――」

どういう意味だ。

言いかけた言葉は、眼前に渦巻く突風によってかき消された。

「お前は、手段を選ぶほど強くない」

床に亀裂を穿つ脚力。

レンが剣を構えるより先に、黒衣の騎士Eは己の両手剣を高々と振り上げていた。

……俺が反応もできない一瞬で。

……ここまでたった一歩で距離を詰めて、剣を振りかぶっていた!?

ぞっと首筋をなぞる汗。

『危ナイ!』

上の始原精霊の悲鳴に、我へと返る。

とにかく一歩でも距離を……壁際に追い詰められることも何一つ考えず、その場から逃げだす心境でレンは全力で跳び退がった。

その足下。

靴先のわずか数センチ先の床へと大剣の切っ先が突きささる。直後。

——城が、悲鳴を上げた。

床を穿つ両手剣の切っ先を起点として、『天鏡の間』の床が真っ二つに割れていく。剣に宿った破壊の衝撃波が亀裂と化して床を伝って壁の大鏡を割り砕き、さらに天井まで届いて頭上のシャンデリアを破壊する。

二階どころか支城そのものを揺るがす一撃。

そして。

「……痛っ!?」

鼓膜に走った激痛に、レンは思わず悲鳴を上げた。

大轟音。

超速にして超絶なる膂力でふり下ろされた剣が大気を切り裂く衝撃。それが単なる風鳴りや音の波を遙かに上回る大轟音を生んだのだ。

……冗談だろ!?

……ただの一刀に、最上位法術級の破壊力が宿ってるっていうのか!

人間の法術士がこの威力を法術で発動しようとすれば、長大かつ複雑な術式儀式と精神集中が必要だろう。それに対し、人間の最上位法術をわずか一言の言霊で具現化させる力を持つのが竜や天使、悪魔といった高位存在だ。

それをゼルブライトは——

高位存在の言霊のかわりに、自らの剣撃であっさりと実現してみせたのだ。

「精霊具。精霊の力を宿した剣か……!?」

「そんな玩具は必要ない」

　剣を持ち上げる騎士王。

「ただの鋼の剣だ」

「……ふざけるなっ!」

　その言葉が嘘だと思ったからではない。

　嘘偽りのない真実。何の仕掛けもない大剣であるということを、騎士王の態度から確信したからこそ、レンは衝動的に叫んでいた。

『疾走ッテ!』

　肩に掴まる上の始原精霊。

　精霊の師事。大地の息吹を受けた力強き足取りで、迫るゼルブライトの巨体をすり抜け、後方へと置き去りにする。

『頑張ッ――』

「それが精霊から授かった教示だとすれば、お前も底が知れるな」

　目の前に、振り切ったはずのゼルブライトの巨体。

　後方にいたはずの男がなぜ目の前に?

　トン。

　肩に触れる壁の感触。

「まさか……」

　振り切ったはずが、誘導されていたのは自分だった?

　天鏡の間の隅に追い詰めるために隙を作って通過させる。それを待ってから、この男は遙か後方から一瞬で追いつき、そして自分の前まで回りこんできたのだ。

　いつの間に!?

　これだけの巨体と筋肉量。それに軽甲冑とはいえ鎧は鎧だ。騎士Eゼルブライト自身の体重と合わせて相当な重量になる。

　なのに回りこまれるまで、騎士Eの動きにまるで気づかなかった。

「ぐっ……!」

　息すら詰まる重圧のなか無我夢中で剣を握りしめる。

　ただし狙いは騎士Eではなく足下のガラス片。砕けたシャンデリアから床に落ちた無数の欠片を、剣

の切っ先で掬いとるように弾く。

ガラスの弾丸。

「礫？」

至近距離で放たれた無数のガラス片を前に。

「何の遊びだ？」

振り上げられる両手剣。

自分とまったく同じ挙動で騎士Eが振るった剣が、騎士Eの足下に落ちているガラスの破片を打ち上げる。

キンッ、と澄んだ金属音が無数にこだまして——

「……嘘……だろ」

空中で対衝突して砕けるガラス片。

自分の打ち上げた破片が一つ残らず空中でたたき落とされて、さらに小さな破片と化して床にぱらぱらと落ちていく。

その光景に、レンはそれ以上の言葉が紡げなかった。

——上の始原精霊の師事よりも早い疾走。

——火の始原精霊の精霊剣以上の威力を、何の変哲もない鋼の剣で発揮する。

だがそれ以上に目を疑ったのは、今のガラス片の相殺だ。

聖フィオラ旅学園で、レンが死にものぐるいで磨いた剣の技巧。それをこの男は、一目見ただけで自分以上の精度で再現してしまった。

「あんた……どんな鍛え方してるんだよ……」

沈黙。

そして。

「何も」

無感情の騎士王の呟きに、今度こそレンは言葉を失った。

……何一つ……してないっていうのか？

……俺があんなに、毎日……死にものぐるいで磨いてきた剣技を……

心の奥でこだまする、何かが罅入る冷たい音色。まるで大事に積み上げてきた積み木の、その一番

下の 士台が崩れかけたような音がした。

直後。

騎 士 王の剣に薙ぎ払われ、レンの身体は彼方の床に叩きつけられた。

「っ、ぐ……あ……!?」

激痛の走る脇腹に手をあてる。

ぬめりと濡れる感触と、床にしたたり落ちる真紅の滴。

「ああ、そう、か。……そういうことか……!」

脳裏をよぎったのは、剣聖シオンの 予見めいた 一言だった。

この先に待っている騎 士 王は、キミと正反対の存在だ——想起せずにはいられないあの言葉が、ガラスの破片のように鋭く胸を抉っていく。

……努力すれば、強くなれると思っていた。

……仲間を守れるくらい。

それが自分の目指していた境地。

今はまだ未熟でも、キリシェやフィアにエリーゼそれに精霊から学び、会得し、強くなる。強くなれると思っていた。

だがここに。

それを嘲笑うかのような「生まれながらに最強」の剣 士がいた。

騎 士 Eゼルブライト。碑文の 三賢者をして覇 Eそのものと言わしめるほどに、この男はあまりにも規格外であり異端だった。

たとえばキリシェ。

生まれながらに最強という意味では彼女も同じなのだろう。けれどレンの知る彼女は、竜の渓谷の同胞を大切に思い、竜の姫という自分の 立場に悩んでいた。全ての 竜を従えるほどに最強でありながらも、儚く繊細な感情をも持ち合わせていた。

だが、この男にはソレすら無い。

「貴様も覇都の騎 士と同じだ。不純物にまみれている」

「……なんだ……って……？」

「強さの 手段を否定する気はない。精霊、 三賢者の虚構精霊、失われた技術、それで強くなるのであれば使えばいい。だがどうだ。今、こうしてお前が無様に倒れている。それが現実だ」

ゼルブライトは強さの 手段を否定しない。

虚構精霊でも『失われた技術』でも、あるいは卑劣な罠であっても構わない。

だが、その結果として得られた強さが弱すぎる。誰一人として騎士Eゼルブライトの前に立つことができていないのだ。

ゆえにゼルブライトは、それら全てを無価値な「不純物」と呼んで忌み嫌う。

何もかもが自分の求める覇道に程遠い。

全てが雑念の塊にすぎないと。

「英勇の再来。僅かに期待はしていたが」

「……」

近づいてくる足音。

蔑みの視線を睨み返しながらも、全身が激痛に痙攣して動かない。

動かない身体。

下唇を噛みしめ、爪が手のひらに食いこむほど堅く手を握りしめても、レンは床にうつぶせの状態から微動だにできなかった。

……立ち上がら……ないと……

……俺は……ここで……こんなところで倒れてちゃ、いけないのに……！

騎士が倒れたら、誰が旅団の仲間を守る？

自分が動けなければ、誰が虚構精霊の暴走を止められる？

霞む視界の中で。

レンはうつぶせに倒れた恰好で、近づく騎士Eの足音を聞いていた。

その手に、炎の精霊剣を握りしめたまま。

2

イスタルシル支城。

秘奥領域『精霊遊戯の小箱』――

「翼もダメですか。では、その尾はどうでしょう？」

ふわりとなびくスカート。

洗練された舞踊のごとく優雅に、華麗に、フィアは自分の足を垂直に振り上げた。

「踏み潰します」

ズッ。

振り下ろされた踵が床を踏み砕き、地中深くの岩盤までを粉砕する。しかし、尾を踏み潰されたはずの黄金の虚構精霊は微動だにしない。

「痛っ……！」

跳び退いて、自分の膝を抱えたのはフィアの方だった。

あらゆる物理事象を反射する『拒の虚構精霊』。打撃、投げ、関節破壊。あらゆる武技を試してみたが、それすら全て反射されて自分に返ってくる。

「どうだ？」

「だめですね。やはり弱点らしい部分はありません。頭から尾の先まで、全身が物理事象への干渉機能を備えています。エリーゼの方は？」

「無理だな。思いつくかぎり試したが、法術反射を無効化する術はない」

褐色の肌が印象的な美貌の悪魔。

赤茶色の瞳が見据える先には、彼女が相手をする個体『反の虚構精霊』。

エリーゼの魔E法術が何百回と発動した気配をフィアも察知しているが、法術事象を反射するこの個体は、いまだ悠然と宙を漂っている。

「だが」

血で張りついた前髪を優雅に払う悪魔の少女。何千という光刃に抉られた手の甲の傷を舐めながら。

「均衡は既に破壊した。ようやく楽しい逆襲のお時間さ」

「あら？　なんだ、エリーゼも気づいてましたか？」

「気づいたというのであれば最初に法術を反射された時点でだ。ただ、お互いその検証に時間がかかったようだな」

「ええ。そして概ね同意ですわ」

ボロボロに崩れた襟元を正して、フィアは穏やかな口調で返した。

「勝ちへの布石は打ちました。あとは詰めるだけ」

「心得た」

虚空へと跳ぶ魔皇姫エリゼリスに背を向け、フィアは再び黄金の怪物へと駆けた。

『*Ies.....orb.....mihhya.....lement*』

漆黒の翼を羽ばたかせる拒の虚構精霊。

虚無の言霊。

虚構精霊の口から唱えられた読解不能の言語が、そのまま『言葉の姿をした何か』へと変貌し、空間をも浸食しながらフィアへと迫る。

「翼よ」

純白の翼を羽ばたかせる大天使。

フィアを中心に、何千何万という輝きの羽毛が半径数十メートルに渡って拡散する。

直後。

フィアの放出した羽毛が、虚構の言霊に触れて次々と消えていく。

……見える。

……羽毛の消えていない場所が、すなわちあの虚無の言霊の射程距離外。

光の道。輝く羽毛が教えてくれる経路。身一つ分しかない隙間をくぐり抜け、まっすぐに黄金の虚構精霊を目指す。

『*Arma*』

虚構精霊の周囲に、何千本という黄金に輝く光刃が生まれた。

その刃先がフィアへと向けられて。

「そう来ましたか」

防御不能の『言霊』で退路を断ち、逃げ場を塞いだうえで全方位からの光刃放射。

……防御法術を貫く光刃。

……それにこの状況では絶対に避けきれない。

降りそそぐ黄金の刃。

それをフィアは、純白の翼で絡め取るように受けとめた。

ズッ。

翼に突きささる何十本という光の刃。

それが翼の中で破裂、溶岩をも越える超高熱となって天使の翼を焼き焦がす。

「……」

痛みに歯を食いしばって天使の少女が駆けぬける。

傷だらけの翼。頭部や首、足といった部位へと降りそそぐ全ての刃を、己の翼を犠牲にして受けとめながら――

「さて、お返しです」

光刃に貫かれた翼を折りたたみ。

フィアは、黄金の怪物の眼前へとたどり着いていた。

「砕けなさい」

空間そのものを拉ぐ超威力の拳。

凱旋門を一撃で破壊し尽くした天の砲撃が、黄金の虚構精霊を打ちすえる。だが相手は物理事象を反射する個体だ。その破壊衝撃がそっくりフィアへと跳ね返る。

「……っ……ふふっ！　やっぱりそうだった！」

嗤ったのは金髪の少女だった。

自らの破壊衝撃を受けて苦悶の表情を浮かべながら、その声には喩えがたき歓喜の感情がにじみ出ていた。

「ではもう一度」

先よりさらに重い一撃を放つ大天使。

それが跳ね返されて、再びフィア自身を傷つける。

「素晴らしい。こんなに思いきり殴っても壊れない相手、すごく久しぶり」

乱れた髪を手で押さえる天使の少女。

「でも、さすがにそろそろ壊れてしまいそうですね？」

『――――』

「限りなく完全に近い物理事象。それがあなたの特性でしょう？　でも惜しかったですね。完全反射であれば、もう少しだけ私を苦しめられたものを」

フィアの笑みが示す勝利宣言。

「自分の拳の威力は自分が一番わかっています。最初はわずかな違和感でしたが、何度も確かめているうちに確信できました。あなたが反射した破壊衝撃は、私が拳にこめた力よりほんの少しだけ弱くなっていた」

物理反射という干渉。

だがそれは完全ではなかった。大天使フィアの拳に宿る桁違いの破壊衝撃が、虚構精霊の干渉限

界をわずかながら超えていたのだ。

「あなたの干渉を免れたのは、私の拳の破壊衝撃の百分の一にも満たない力でしょうね。でもそれは、あなたにもダメージが蓄積されていることの示唆」

破壊衝撃の百分の九十九という割合は反射できる。だが残りの百分の一だけは、干渉しきれず虚構精霊へと蓄積されていく。

「このまま殴り続ければ破壊衝撃のほぼ全ては私が受けますが、残りの百分の一程度の力はあなたも受けることになる。それだけわかれば十分。あとは私が、あなたの九十九倍我慢強ければいいだけだから」

ゆっくりと右手を持ち上げる。

大天使の翼からほとばしる純白の輝き。漆黒の小部屋から影という影を消滅させる天の輝きが生まれ、その光が宙をわたってフィアの右拳へと収束していく。

――光の姿をした「力」の収束。

煌々と輝く拳をかざして。

「エリーゼ、そちらはいいですか」

「待ちくたびれたぞ」

その後方では、虚構精霊の翼を掴んで捕らえたエリゼリス。彼女の手にもまた、自身の障気と法力とを圧縮させた巨大な黒鎗が握られている。

「謳え諸人よ」

天使の少女が口ずさむ、その音色。

「我は明星。我が白き翼は大いなる力の象徴にして栄光の福音。天の怒りの代弁者。これによりもたされる秘奥は、すなわち――」

「唯一無二の聖弾なり」

「唯一無二の魔弾なり」

大天使フィアの拳が打ち砕く『反の虚構精霊』

時を同じくして、その後方では『拒の虚構精霊』がエリゼリスの放った黒鎗に貫かれ、無数の塵となって霧散していた。

「……ふう。何とか撃退っと」

自分の身体(からだ)をさわって、安堵(あんど)の息をこぼすのはフィアだった。

「あら、物理反射がない？　私、三日三晩くらい動けない重傷を覚悟してたのですが」

「事象に干渉する前に力つきたからだろうな。予想の範囲だがまあ良かった。自分の法術(ほうじゅつ)で大ケガするなんてまっぴらゴメンだ。……それに際(きわ)どかった」

疲れきった様子で肩を落とすエリゼリス。

その身体から空気が抜けるように障気(しょうき)が抜けていき、妖艶(ようえん)な姿が、みるみるうちに小柄な幼女のものへと戻っていく。

「……あー。しんどかった。もう今日はアタシ一歩も動けない」

ぺたんと尻餅(しりもち)をつくエリーゼ。

「フィア、おんぶしてー？」

「そうしたいのは山々ですが、私も全身痛くて動けないんですよね。少し休憩を――」

吹きあれる風。

ただの大気の流れではなく、悪魔の障気でもない。この空間に突如として現れた、ある絶対的な存在から放たれる力の余波そのもの。

「ん……？」

「この気配まさか……？」

フィアとエリーゼが揃ってふり返った先に。

『回帰し、受肉せよ。我、姫なる竜なり。いま一度ヒトの外見を放棄する！』

人間の少女の姿をした竜が吼えた。

荘厳なる咆吼。

銀髪の少女の姿が一瞬ブレて、その全身から眩しい白銀色の輝きが――

『……もう我慢の限界だ』

顕現したのは、神秘的な光に包まれた白銀色の巨竜だった。

天使の羽のような純白の羽毛に包まれた翼を有し、真珠よりも儚く清廉な、蒼を帯びた白銀の煌めきを湛えたその身体。

『何度殴っても蹴っても潰しても、再生して逃げて再生して逃げて……このわたしをバカにしてるとしか思えない太々しい態度。……いいだろう。その小生意気な挑発、乗ってやる。わたしを怒らせたことを悔いるがいい！』

美しく、そして圧倒的な存在感。

だがそれ以上に、言葉に言い表せぬ霊的な絶対性としての「格」が違う。

そんな白銀の巨竜が、ゆっくりと息を吸いこむ所作。

それを見てフィアとエリーゼの表情が引きつった。

「ちょ、ちょっと待ってキリシェ！　まさかまだ気づいてないの!?　コイツらの事象干渉には特徴があるから、それを突いて――」

『面倒くさい』

ぷいっと首を横にふる天銀竜。

『というわけで離れていろ二人とも。そこは少し危ないぞ』

「うわっ！　待ってキリシェ、その位置の息吹はアタシらがやばいって！」

「ま、巻きこまれる!?　エリーゼ逃げましょ……ってエリーゼの嘘つき、思いっきり余裕で走れるじゃないですか!?」

全速力で逃げだす二人。

そして。

『世界を巡る夢へと還(かえ)れ』

光の世界。

最後まで存在していた虚構精霊(エイドス)が、事象干渉の間もなく消滅。

その周囲を覆(おお)っていた『精霊遊戯の小箱』という閉鎖空間もまた、まるで最初からそれが幻影であったかのように消し飛んでいく。

竜の息吹(ブレス)――法術(ほうじゅつ)にも物理事象にも類しない第三の波長。

「ふん、どうだ。わたしの勝ちだな」

再び銀髪の少女に戻ったキリシェ。

竜変身の際に外れてしまった髪留(ヘッドドレス)めで髪を留め直しながら。

「まさに文句のつけようのない勝利。これこそ……あいたっ！」

「どうだ、じゃありません。私たちが逃げ遅れたらどうするつもりだったんですか」

自信満々に胸を張るキリシェの頭を小突いたのは、フィアだった。

地下の秘奥領域。

エリエスたちが探していた地下施設よりもさらに深い場所に位置するのだが、今の息吹(ブレス)の余波(よは)を受けて城の地盤そのものがぽっかりと消滅してしまっていた。

微震。

「城、これは崩れそうですね。脱出しましょうか」

「ならばレンと合流だな。だいぶ時間が経(た)ってしまったし。エリーゼ、さっきレンの場所を特定したと言ったな。今どこにいるかわかるか？」

「……」

「エリーゼ？」

「……まだだよ……」

目を閉じたまま、その場で棒立ちに立ちつくすエリーゼ。

自分の唇をわずかに噛(か)んだ恰好(かっこう)で、褐色(かっしょく)の幼女は自分の両拳(こぶし)をきゅっと握りしめた。

「……戦いは終わってない」

そして目を開ける。

天井のそのさらに先を見上げて、悪魔の少女は、ここにいない誰かに向けてそう告(つ)げた。

「レン、立ち上がって」

3

イスタルシル支城三階『天鏡の間』。

それは天井も壁も、床さえも巨大な鏡で構成された部屋だ。

美しく磨きあげられた大鏡が照明の光を幾重にも反射する様は、一見すれば騎士の修練場というよりも絢爛な舞踏場を想わせる。

その美しき空間で――

「英勇の再来？　蓋を開けてみればこのザマか」

ゼルブライトの爪先に蹴り上げられ、レンの身体は糸屑のように軽々と宙に舞った。

蹴り上げられてから再び地面に叩きつけられるまで、受け身はおろか悲鳴を上げることさえできなかった。

漏れたのは小さな嗚咽だけ。

全身を蝕む激痛に意識さえも呑まれ、起き上がりたくても足一本動かせない。

「偽英勇。碑文の三賢者がお前をそう呼んでいた。言い得て妙な渾名というわけだ」

近づいてくる足音。

蔑みの視線を感じながらも、まだ全身の痙攣さえ治まらない。

……偽……英勇……？……

……違うだ、ろ……俺は……もうそれじゃ、ダメだって……

硬直した手に、なお握られたままの炎の精霊剣。

剣の炎はまだ消えてない。

明るく輝く神秘の炎だけをじっと見つめて。

『レン』

「……え？」

精霊剣の炎に照らされて浮かびあがる巨大な影。

倒れた自分のすぐ隣で――

とてつもなく巨大な魔獣の影が、じっと自分（レン）を見下ろしていたのだ。

「……っ……三頭の冥犬（ケルベロス）!?」

『だいじょうぶ。これアタシの使い魔だから。レンの味方だよ』

明るく陽気（ようき）な幼い声。

「エリーゼ？」

『ずいぶんボロボロになってるじゃん』

いたずらっぽい微笑（びしょう）の吐息が、魔獣の影を通じて伝わってくる。

明るく天真爛漫（てんしんらんまん）な声音（こわね）。そこに、普段にはない優しい響きが含まれていると感じるのは、自分の勝手な思いこみだろうか。

「誰かと思えば、先代魔王とその使い魔か」

三頭の冥犬（ケルベロス）の影。

天鏡（てんきょう）の間に走った亀裂（きれつ）から這（は）い上（あ）がってきた影を一瞥（いちべつ）し、王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）を束ねる男がつまらなそうに言葉を続ける。

「終焉戦争で負傷し転生を余儀なくされた悪魔。魔王と名乗りながらその醜態。負け犬が、使い魔まで犬とは何の冗談だ？」

『言うね。その終焉戦争を知らない若造が』

不敵に声を弾ませるエリーゼ。

『アンタこそ、そんな暢気（のんき）に構えててホントにいいの？』

「何がだ」

『レンは立ちあがる。そして何度だってお前に挑むよ。そんな悠長にしてていいの？』

「……滑稽（こっけい）だな」

騎士王から漏れる侮蔑（ぶべつ）混じりの嘆息（たんそく）。

「それは何だ。私への牽制（けんせい）のつもりか？　それとも私の注意をこの男に引きつける陽動か？　この男に立ち上がる気力などない」

『そうだね。アタシも、レンの戦いを見てなかったらそう思ってたかもしれない』

絶対の信頼で紡（つむ）がれた言葉。

『レン――』

優しく奏でられる声。

天鏡（てんきょう）の間に広がり、響き、静寂（せいじゃく）の城を伝わっていく。

『レンはよく戦ってきたよ。炎の将魔を追い払った時も、竜帝を説得した時も、聖地で光の怪物と戦ってた時もね。場所は離れてたけど、魔王の霊知でずっとレンのこと見てた。だから知ってるよ。……カルラの言葉、覚えてる？』

〝竜姫、大天使、先代魔王を従える。それは剣帝エルラインだからこそ許された所行です。彼の外見を模っただけの贋作には、それを実現する実力も求心力もない〟

キリシェを巡って竜帝カルラが発した言葉。

今も強く覚えてる。

『カルラの気持ちも理解できるの。なにせ本物のエルラインを知ってるんだから。それと比べられたらどんな人間だって色あせて見えるに決まってる。アタシだってそう。なまじレンが英勇と重なって見えて、だからこそ不安だった……』

この偽英勇と旅を続けることに意味はあるのか。

とんでもない足枷を連れてしまっているのではないか、と。

〝キリシェとフィアは認めてるけど、アタシ、レンのことまだよく知らないんだよね〟

旅の始まり。

エリーゼと初めて出会ってすぐの草原で、そう告げられたことを覚えてる。

『レンから何一つ可能性を感じられなかったら、キリシェとフィアに反対されても、アタシはレンを置いていくつもりだった。無理な冒険に連れ出して命を落とされるのは嫌だから。最初はそのくらいのつもりだった……だからこそなおさら思うの。よく、その偽英勇っていう前評価を背負って頑張ってきたなって』

ガリア大炎山で――

炎の将魔アシェンディアは、自ら敗北を認めて冥界へと戻っていった。

〝じゃあねレンちゃん。エリーゼ様をよろしくね？〟

エリーゼを託す。そんな一言を自分に残して。

竜の渓谷で――

竜帝カルラは自ら審判として立ちはだかり、最後には話を聞き入れてくれた。

〝キリシェ姉様のこと、よろしくお願いします〟

キリシェを託す。竜帝もまた、同じ言葉を自分に伝えて去っていった。

そして天界で――

全天使を束ねる女神レスフレーゼもまた同様に。

〝妾も託したくなった。天界のために尽くした者に、天界の至宝でもある法印を委ねるとしようとな。その法印の重み、ゆめゆめ忘れるでないぞ〟

自分を信じて、女神法印を預けてくれた。

『思いだして。もうレンは竜と悪魔と天使の審判を受けてるの。みんなそれぞれ、大切なものをレンに託してる』

誰もが皆、最初は疑った。

過去の偉大すぎる英勇と、その面影だけを写した偽英勇とを比べて、頼りないと。

だが思い直した。皆、一様に気づいたのだ。偽英勇と呼ばれた少年が、ただ面影「だけ」を受け継いでいるわけではないことに。

『みんな気づいたんだよ。もしレンに「英勇の資格」なんて呼べるものがあるとすれば、それはエルラインの面影なんかじゃないって』

「……え？」

『気づかない？　でも、いつか自分でもわかる時が来るはずだから』

クスッと声を弾ませる先代魔王。

『その時まで歩き続けるの。レンはまだ旅の途中でしょ』

「茶番を続ける気か？」

騎士王の乾いた声音。

「何かと思い聞いていれば、ただの鼓舞？　無力な言葉だ。この男に立ち上がる気力などない。仮にあったとしてソレが何になる？」

全ては無為。

天と地ほども離れた力の隔たりを前に、立ち上がる意味など無いのだから。

「悪魔の元首も血迷ったか」

『そう思う？　でもね、レンは立つよ。立ち上がる理由がある。アタシは知ってる』

衝突する二つの言葉。

その果てに。

「詭弁を。そんな理由が――」

『嬉しかったよ。聖地で、アタシたちのこと守るって言ってくれた時のレンの決意』

少しだけ照れくさそうに弾む吐息。

はにかみながらそう告げる悪魔の少女の、たった一つの魔法の言葉。

『さあレン』

「……言われ……なく、たって……」

荒々しく息を震わせながら。

痙攣する膝を叱咤して。

レンは、剣を支えに立ち上がっていた。

「……最初から……そのつもり……だって、の……」

「なぜ立ち上がる？」

鋼鉄の精神を持つ騎士Ｅ。

今まで一切の動揺を見せなかった男が、微かにその目をみひらいた瞬間だった。

「理解できぬな。なぜ、その傷で立ち上がる？　なぜ、無意味に立ち向かおうと奮起する？　そこに意味などないというのに」

戦意を喪失して降伏する。

それが過去、ゼルブライトに挑んだ剣士たちの末路だった。大きすぎる力の差に絶望し、敗走するか忠誠を誓うか。それ以外の選択などありえなかった。

「……エリーゼの話……聞いてなかったのかよ」

「なに？」

弱々しい吐息に、精一杯の声を響かせる少年。

支えとして突き刺していた剣を床から引き抜いて。

「なぜ立つか？　守りたいやつらがいるからに決まってるだろ！」

声の限りに叫んだ。

「仲間を守れない悔しさ。もう二度と味わいたくない……そうだよゼルブライト、たとえそれが、あんたには絶対理解できない理由だとしてもだ！」

Record.6 英勇の資格

1

イスタルシル支城・三階『天鏡の間』――

かつて、ここは剣士を目指す者たちの憧憬の場所だった。

選ばれし剣士たちの集う場所。

しかし、ある時を境に、この栄光の修練場はたった一人の所有物と化した。

騎士王と呼ばれる男の登場。その男は圧倒的なまでに強すぎた。

彼の前に立つことを畏れるあまり、上位騎士たちは天鏡の間での修練を諦め、一人また一人と、誰に言われるでもなく栄光の修練場を去っていった。

だがここに。

「虚勢か」

「いいや違うね。それは、アンタが単に理解できないからだろ？」

その男に、真っ向から剣を向ける少年がいた。

右肩から左脇腹にかけては内出血の痣が痛々しく腫れ上がり、右脇腹は血に染まっている。いずれも騎士王の剣によって圧倒された証の傷痕だ。

「……ごめんな、心配かけたか？」

『レン』

『頑張ル？』

自分の足首に掴まって見上げてくる上の始原精霊と、すぐ上空に浮かぶ火の始原精霊。見守ってくれる二体の精霊へ、レンはそっと頷いてみせた。

「ああ。頑張るよ」

炎の精霊剣。

煌々と燃える炎を宿した剣を、ゆっくりと水平に構えながら。

「エリーゼ、悪い」

『何が？』

「そっちに三体の虚構精霊が向かってる。止める方法はわかってるけど……もう少しだけ、時間がかかると思う」

『遅いってば』

三頭の冥犬の影を伝って響く、先代魔王の苦笑。

『もうコッチ終わったよ』

「え？」

『一応言っておくけど、アタシもキリシェもフィアも、今はまだレンに心配かけるつもりは無いよ。自分の戦いにだけ集中してくれればそれでいいの』

「……わかった」

『好い表情するようになったね。ホント、人間は早いなぁ』

どこか哀愁を帯びた声の先代魔王。

それと共に三頭の冥犬の影が消えていく。

陽の光に溶ける雪のように、薄く、淡く、希薄になっていく魔獣の姿。

『じゃあ頑張って。アタシたちもすぐ行くよ』

その言葉を残して消える魔獣。

残ったのは紅蓮の精霊剣を握る少年と、それに対峙する黒衣の騎士Ｅ。

「安堵……という表情でもなさそうだな」

「ほっとしたよ。だけどまだ残ってる」

口早にそう返し、ゆっくりと剣を持ち上げるゼルブライトを睨みつける。

虚構精霊は消えて仲間は無事。それは何にも勝る吉報だが、根本的な問題が片付いたわけではない。

「王立七十二階位特務騎士団なら虚構精霊は何度だって製造できる。違うか？」

「だとして、それが何になる」

「俺は、虚構精霊そのものを断念させなきゃいけない」

「お前にできるとは思えんな」

轟音をともなう衝撃波がほとばしり、再び天鏡の間の鏡を千々に打ち砕く。

風を破壊し、大地を割り砕く覇王の剣。

対して。

レンは自ら前へと駆けて、その間合いの内側へと詰め寄った。

……そうだ。

……さっきはコレを、咄嗟に後ろに逃げようとしてかわしきれなかったんだ。

恐怖に飲まれて身体が一瞬硬直した。

だからこそ今は、自分が前に出なければ勝機はない。

「愚策。捨て身とはな」

「いいや、俺の剣の間合いまで近づきたいだけさ」

騎士王の太刀は絶対に受けきれないし、かわしきれない。それが明白である以上、剣を避けるために遠ざかるという選択はありえない。

時間を使うだけ、体力で劣る自分が不利になるだけだ。

……一瞬でも一秒でも早く懐に迫る。

……俺の剣の届く間合いまで。

ヂッ。

顔の真横をかすめていく刃。

頬の皮膚一枚が切り裂かれ、そこから赤いものがじわりと滲む。と同時に、レンは今度こそゼルブライトの剣をすり抜けていた。

「はっ!」

黒衣の剣士めがけて全力で剣を突きだす。

それが、わずか数十センチ進むことも許されずに斜め上に弾かれた。

「……ぐっ!?」

衝撃が肘先から肩へと伝わっていく。

そのあまりの激痛と振動に、危うく剣を落としかけたほどだ。

……剣と剣が触れただけでこの衝撃。

……この騎士王、本当にどれだけ無茶苦茶な膂力してるんだ。

振り下ろしの一撃は紙一重ですり抜けた。

だがレンが攻めに転じた時には、ゼルブライトもまた恐るべき速度で剣を引き戻していた。その返しの

一撃で剣が弾かれたのだ。

「しょせんは不純物か」

宙を横一文字に薙(な)ぐ両手剣(ツーハンデッド)。

剣を弾かれて姿勢を崩したレン。先(さつき)よりさらに速く重い剣撃が、その無防備な胴体めがけて迫(せま)る。

「無駄だ」

「負けられない……って、言ってる……んだよっ!」

剣を縦に。

真横から襲いくる銀色の剣閃(けんせん)に対し、紅蓮(ぐれん)の剣でそれを受けとめる。

みしりと響く鈍い音。

受けきるどころか、刃を傾けて威力を逸(そ)らすことすら許されなかった。

「……っ……はっ……!」

彼方(かなた)まで吹き飛び、再び堅い床に叩(たた)きつけられるレン。

背中を打ちつけただけではない。騎士Eの剣を一瞬でも押し返そうとした反動で、肩と肘とが衝撃に耐えきれず内出血で青く腫(は)れあがる。

「何一つ変わらないな」

使い魔を通じた先代魔王(エリーゼ)の言葉に奮い起こされて立ち上がり、なお結果は変わらない。倒れたレンをゼルブライトが見下ろすという立場は揺るがない。

「……いいや、未来は……変わったぜ」

立ち上がる。

寄りそう精霊たちの見守る前で、全身を小刻みに痙攣(けいれん)させながらも、三度(みたび)、自らの足で立ち上がっていた。

「未来?」

「さっきよりマシだろ」

切った唇と頬(ほお)の傷を、手の甲で拭(ぬぐ)いながら。

「一太刀(たち)、今度はアンタの剣を受けられた。こうしてまた床に転がってるけど、今度は、自分で立ち上がれる……さっきの俺にはできなかったことだよ。何も抵抗できずに斬(き)られたんだから」

しばしの沈黙。

ゼルブライトが、わずかに首をかしげる所作。

「わからぬな。一介の賊(ぞく)に過ぎぬお前が、今この場で何を望む?」

「……偽英勇って言われるのは、もう嫌なんだ」

全身の激痛を押しきって。

レンは、黒衣の騎士王へと剣を向けた。

「ここでアンタ相手に何もできなかったら……俺は、俺を信じてくれるみんなに何一つ応えることができなかったことになる。そんなのはもう嫌なんだよ！」

伝説の三大姫に誘われるままついていくのではなく。

かつての英勇のように、自分が彼女たちを支える立場になりたいと願ったから。

「ゼルブライト、アンタはさっき俺に聞いたよな。弱いのに、なんで虚構精霊に頼らないのかって。手段を選べるほど強くないくせにって」

「明確な答えがあるとでも？」

「あるさ。俺は、俺の信じる道をいく。間違ってると思うことは選べない」

懐いてくれる精霊たち。

旅団に誘ってくれたキリシェにフィアにエリーゼ。

これからも一緒に歩いていきたいからこそ、道を違えることはできない。

「俺が旅団の先頭に立つ日が来るのなら、先頭の俺が道を間違えるわけにはいかないだろ？　だからまっすぐ歩くのさ。俺が、みんなを率いるために」

そして駆けた。

精霊たちに見守られ、紅蓮の剣を携えて。

「お前にその器量はない」

「器の問題じゃないんだよ！」

剣先を床につけた姿勢から、膂力だけで剣を振り上げるゼルブライト。

その剣先めがけ、レンは振り上げた精霊剣を両手で握り、全力で振り下ろした。

銀と赤。両手剣の鋼鉄とレンの剣の鋼鉄とが交叉して甲高い音を響かせる。

――騎士王は片手。

――レンは両手、さらに振り下ろしに全体重をのせて。

だが、それでも騎士王の剣は一ミリたりとも止まらない。振り上げた両手剣が精霊剣ごとレンの身体を天井に叩きつける。

「……っ……」

一切の抵抗を許されず頭部と背中とを天井の鏡で強打。

昏倒する。そうでなくても今度こそ身動き一つままならない。そう確信したゼルブライトが興味を失った面持ちで少年に背を向ける。

それが。

異端の覇王が見せた、ただ一度限りの「読み違い」だった。

「なに……背、向けてんだよ……」

「っ」

振り返るゼルブライトが見上げたそこには、天井に磔になっている少年の姿だった。

想定と何一つ相違ない。頭と背中とを硬い鏡に打ちつけて――

『……ダイジョウブ？』

否。

鏡とレンの間に割って入っていたのは大量の砂。それが衝撃緩和材としてレンを守り、その身を衝撃から救っていたのだ。

「上の始原精霊か！」

騎士王からこぼれる無感情の驚愕。

ここ天鏡の間は、ゼルブライトが砕いた鏡と壁の石材の破片が散乱している。

大地や鉱石に干渉する上の始原精霊ならば、それを集めて衝撃緩和材として再構築するのは簡単だろう。

そしてゼルブライトもそこまでは読んでいた。

――精霊の力としては可能だが、主であるレンがそう命令を下すことはない。

――自分の剣に全神経を集中している今、精霊に咄嗟の命令を下すことは不可能。

覇王にして賢者たる男はそこまで完璧に読み切った上で、精霊による防御はありえないと踏んでいたのだ。

しかし。

「精霊よ。お前ほどの存在が、人間を助けるために自ら動いたというのか！」

精霊は、自らの声が届く者にだけ力を貸す。

それを可能にしたのが占代詠唱士だ。精霊の声を聞き、精霊に命令することで、その力を引き出すことができる。

逆に言えば、占代詠唱士であっても命令がなければ精霊は動かない。

それが碑文の三賢者の出した結論。神性都市シィエラミリスにおいて研究されつくした古代召喚術の答えだったはずなのだ。

それこそが騎士王のたった一つの読み違いだった。

人と世界と精霊との関係を、誤った。

『……レン？』

「ああ。ありがとうな」

ガラスの散乱する床に着地。

不安げに見つめる精霊たちに首肯で応え、少年が騎士王へと足を踏みこむ。

「なるほど」

今までにない昂揚を湛え――

不動を保っていたゼルブライトがその場で一歩後ずさる。レンの踏みこみよりも大きく後退。レンの間合いを突き放し、一方的に自分の間合いを作りだすために。

「それがお前の資格か」

異端の覇王は察した。

虚構に魅了された碑文の三賢者には到底理解しえないであろう、レンの可能性。

英勇に酷似した面影は先天的なもの。

しかしそれは栄光とは程遠く、少年に偽英勇という蔑称を授けただけだった。

本当の意味でレンに「英勇の資格」と呼べるものがあるとすれば、それは天から与えられたものではなく。

〝みんな気づいたんだよ。もしレンに「英勇の資格」なんて呼べるものがあるとすれば、それは――――〟

限りなき理想。

レンが生きてきた中で、誰よりも大切にしてきた「英勇への憧憬」そのものだ。

……偽英勇と呼ばれて誰からも相手にされなかった。

……だからこそ誰よりも本物の英勇に憧れて、共に旅する仲間を願い続けてきた。

ゆえに知っている。

手をさしのべてくれたキリシェ、フィア、エリーゼという仲間のありがたみ。

懐いてくれる精霊たちとの絆。

自分が生きる中で得たものと、それを守ることの意味を知っている。

それがレンの資格。それが次代の英勇となるに足る可能性であると、三百年前に本物の英勇を見てきた者たちは認めたのだ。

だからこそ炎の将魔はエリーゼを託し――

竜帝(りゅうてい)カルラはキリシェを託し――

天界の女神は、その法印(ほういん)をレンへと託したのだ。

「ならば答えろ」

前へと進みながら剣を振りかぶる少年。

その動きを瞬時に見切った騎士(きし) Eが、真下から剣を跳ね上げる。

「竜と悪魔と天使と、精霊をも引き連れて。お前は何処へ行こうというのだ！」

澄みきった金属音。

美しいまでに響き合う金属の共鳴が、天鏡(てんきょう)の間を彩る音色(いろどねいろ)となってこだまする。

宙を舞う剣の切っ先。

それはレンの手にした精霊剣の切っ先だった。

根本から真っ二つに折られた剣。火の始原精霊(サラマンダー)の力を得て、なお騎士王の持つ両手剣(ツーハンデッド)に届かないことを示す、無慈悲な結末。

「それが限界」

「――いいや、まだだ」

「何っ？」

騎士王の前で、刃(やいば)を失った剣が音を立てて床を転がる。

「何処へ行くかだって？　そんなのずっと前から決まってる」

……エルラインの見た世界。

……あの英勇が旅した地平を、自分自身で歩いてみたい。それだけを願ってた。

レンが左手に握りしめるのは黄金色の宝玉だ。

先代魔王の琥珀。古代召喚術を発動するための神具であり、その効果は物体召喚。

「これが最後」

発動体が輝いて。

レンの手に握られていたものは、透きとおった蒼色に輝く一本の剣だった。

「英勇の剣、霊剣ヴィエルジュか！」

「俺の最後の一撃だ」

鈍色に輝く両手剣、かたや宝石のごとく輝く精霊剣。

剣と剣とが交叉して――

砕かれた切っ先。

千々の欠片となって宙へと舞う両手剣を見つめ、騎士Eは小さく呟いた。

「なるほど、既に内側から熔けていたというわけか」

炎の精霊剣の炎熱。

剣と剣とが交叉するたび、両手剣の鋼鉄が僅かずつながら融解していたのだ。

何度無様に倒されても起き上がり、一度でも多く剣を交える。

その不屈の挑戦。たとえ勝てぬ戦いとわかっていて、なお抗う。少年の行為には明確な意味があった。

「武器破壊。最初から私の剣を折ることに全てを賭けていた。それで一矢報いたと？」

「……」

「痛み分け。そう言いたげな表情だな」

レンからの返事はない。

自ら発した言葉のとおり。

全ての体力と気力を使い果たした少年は、既に意識を失って床に伏せていた。

――たとえ騎士Eに勝てずとも、騎士Eの持つ剣だけは打ち砕く。

そうと言いたげに、気を失ってなお剣を握りしめたまま。

「頃合いか」

崩壊する古代城イスタルシル。

支城そのものを瓦解させる衝撃が地の奥深くから伝わってきたのは、その時だった。

止まらない大地の鳴動。

「……揺れているのは、城を支える地中か？」

地下一階ではなく、そのさらに深部にあたる秘奥領域だろう。虚構精霊の飼育場である施設が跡形もなく消滅した。

それくらいの規模の破壊でなければ、これほどの揺れが起きることなどない。

「ここも崩れるな」

亀裂の走った鏡面——修復不能なほどに破壊された両手剣を握る自分の姿を一瞥し、騎士王ゼルブライトはそう呟いた。

「それで、お前はどうする」

覇者が見下ろすのは、数メートル先に倒れている少年だ。体力と気力とを消耗しつくし、限界を迎えたうえでの昏倒だろう。

そこへ崩落する天井。

巨大な鏡が天井の石材ごと崩れ、巨大な瓦礫として少年へと落ちていく。

その先で——

「ははっ！」

騎士王は笑った。

「ははははっ、ははははははははははははっっっっ！　そうか！　そうなるか！　世界に渦巻く力の意志よ。偶には気を利かす。見事な興を振る舞うではないか！」

霊剣ヴィエルジュ。

床に刺さったままの剣が支えとなり、少年を瓦礫から防ぐ盾となっていた。

だが騎士王が大笑した理由は、霊剣が瓦礫を防いだという奇蹟ではない。そんなものはただの偶然だ。万に一つの幸運が偶々めぐってきただけに過ぎない。

真に刮目するべきは。

「霊剣よ、貴様までもがその男を選ぶとはな」

そう。

この場に留まり続けている英勇の剣の存在そのものだ。

「古代召喚術とて万能ではない。どんなに有能な術士であろうと、召喚した物体は時間の経過によって本来の場所へと還っていく」

にもかかわらず、霊剣ヴィエルジュはまだ消滅していない。

なぜ消えないのか。

考えられる理由はただ一つ。召喚された霊剣自らが、「本来の場所」をここであると認めたからだ。この少年の傍らこそが自分のあるべき居場所であると。

それに気づいた。

だからこそ騎士王は声を上げて笑ったのだ。

……ようやく見つけた二人目。

……剣聖シオンに次ぐ適格者。

飽くなき覇道への渇望を満たすには、それに相応しい強者が必要だ。そして騎士王は、その二人目を見いだした。

「土の始原精霊、そして火の始原精霊」

倒れたままのレンによりそう精霊たち。

主が意識を失っても古代召喚術の力が途切れても、自らの意志でこの場に残り、レンを見守るようにじっとうずくまっている。

「精霊。この世界の始原より存在する守り人たちよ」

そんな二体に向けてゼルブライトは口にした。

手に、刃の折れた大剣を携えて。

「そこの主に伝えておけ。終焉の島の世界録はくれてやる。だが貴様が世界録を手にした時こそ、私と貴様が再び雌雄を分かつ時だとな」

崩壊する天鏡の間。

そこに、複数人の少女の声と足音が聞こえてくる。

「エリーゼ、本当にこっちだな！」

「使い魔で確認したから間違いないって。フィア、ほら速く走った走った」

「ほっぺをつついて急かすのはやめてくださいエリーゼ。むしろ、私に背負われてる誰かさんを放り出せば、もっと速く走れるんですが？」

終焉戦争の三大姫。

彼女たちが虚構精霊（エイドス）を退けたことに、騎士王は疑問を抱かなかった。

「しょせん虚構（きょこう）の一欠片（かけら）だ」

背を向けるゼルブライト。

三人の少女たちの声が徐々に近づいていくなかで――

騎士王は、誰にも悟られぬまま姿を消した。

Continued 残されたもの

1

占代城イスタルシル支城が崩壊(ほうかい)。

その翌朝——

覇都(はと)エルメキアが公表した事実は、またたく間に世界に広がった。

「聖地(せいち)カナンを襲撃(しゅうげき)したのは、王立七十二階位特務騎士団(エルメキア・ダスク)が覇都王家に独断で開発していた失われた技術(オーパーツ)であると判明した。支城の地下に隠されていた研究施設をカナン巡礼聖教船が偶然に発見し、王家も直ちにそれを確認。覇都王家はこれを重大な都市条約違反であると認め、王立七十二階位特務騎士団(エルメキア・ダスク)の序列一位ならびに失われた技術(オーパーツ)の主任研究者だった序列四位を解任。覇都から追放処分とした」

海上——

聖地カナンへと戻る全装帆船(シップ)の一室で。

「というわけよ」

「……っていうと？」

「覇都は王立七十二階位特務騎士団(エルメキア・ダスク)を身代わりにしたの。虚構精霊(エイドス)と言ったかしら。あんな危険な失われた技術(オーパーツ)が王家の指示で製造されてたと知られれば、覇都そのものの立場が危ういわ。それを回避するためよ」

情報紙(ゴシップ)をくしゃっと握りつぶしたのは、エリエスだ。

「占代イスタルシル城は本城と支城に分かれていたわ。あの虚構精霊(エイドス)が開発されていたのは支城の地下。つまり王立七十二階位特務騎士団(エルメキア・ダスク)の本拠地よ。旅団の独断だったと言えば説明がつくでしょ？」

「……まあね」

ほどけた腕の包帯を巻き直しながら、レンは小さく頷いた。

真実は闇の中。

〝共存関係じゃよ。儂らは神性都市で生まれた様々な失われた技術の知識を提供し、王立七十二階位特務騎士団が完成させる〟

碑文の三賢者の存在は決して明るみに出ないだろう。

神性都市シィエラミリスと言ったところで、その都市の存在を証明する物がない以上、何一つ信憑性もない。

「ただ、責任逃れにしても腑に落ちないことは残ってるわ。騎士王ゼルブライトを追放したっていう覇都の決定」

椅子に腰かけて腕組みするエリエス。

「世界最強の剣士とも言われている男よ。王立七十二階位特務騎士団の処罰としては当然かもしれないけど、あの男が別の旅団に拾われたら大変でしょ。覇都にとって脅威となる競争相手の旅団が一つできあがってしまうわけだし」

「……あ、それなんだけどさ」

机を挟んだ対面のソファーから立ち上がり、レンは背後へとふり返った。

「なあエリーゼ」

「――――」

「力を使いすぎて寝ています。当分起きないでしょうね」

ベッドで穏やかな寝息を立てている褐色の幼女。

その横のベッドに腰かけて、こちらは優雅にワイングラスを傾けるフィア。

「はあ。やっぱり運動の後の一杯は最高ですわ」

「……先輩？　いや、お酒飲むのはいいけど」

「わかっていますわ。ゼルブライトの行方ですが、私たちが天鏡の間に駆けつけた時には誰もいませんでした。見かけたのは倒れていたレン一人です」

「そっか……」

騎士王の両手剣を砕いた瞬間。それを境にレンの記憶は途絶えている。

気づけばカナン巡礼聖教船の旅団員に背負われて、全装帆船の客室に運びこまれていた。

……覇都がゼルブライトを追放した。本当に？

……誰があの男にそんな命令できるっていうんだ。

刃（やいば）を交えたからこそわかる。

騎士Ｅゼルブライトはまさしく規格外の剣士だった。あの男の逆鱗（げきりん）に触れることは、そのまま覇都の危機にも直結する。覇都を去れという命令が容易（たやす）くできるわけがないのだ。むしろ、ゼルブライトが自ら覇都を去ったという方がよほど信憑性がある。

「でも楽しみですわね」

「何がさ？」

「今回、私たちまた一段と有名人になってしまいましたよ」

くすっと微笑（びしょう）をこぼす大天使。

覇都騒乱――今回、Ｅ立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）が開発していた失われた技術（オーパーツ）について、その陰謀を食い止めたのはカナン巡礼聖教船と言われている。

だが、そこにレンたち『再来の騎士（きし）』が深く関わっていたというのも、覇都の市街地で何百人という一般人（はと）が目撃している。

「あー……特にキリシェとエリーゼだろ？　一般人にほとんどケガさせずに、特務騎士と

Ｅ立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）を引きつけてたってやつ。あれでカナン巡礼聖教船（じゅんれいせいきょうせん）が城の中に突入しやすくなったって」

「ええ、こっちの情報紙（ゴシップ）にもそう書いてあるわ」

握りつぶしたのとは別の薄紙を手にするエリエス。

レンもさっき見せてもらったが、市街地の大通りを走り回るエリーゼとキリシェの姿が大きく描（えが）かれている。しかも二人とも驚くほどにそっくりだ。

「いま『再来の騎士』、まるで義賊（ぎぞく）みたいな扱いになってるわよ？　覇都の陰謀を暴（あば）いた新進気鋭の旅団だって。これから大変ね」

「あら。行く先々で握手やサインを求められたらどうしましょう。お酒とかお菓子とか、一回の握手につきお土産一品を貰いでもらったり。ふふ、夢が膨（ふく）らみますわね」

「……どんな夢だよ」

にやにや顔の聖女と、それを受けて嬉（うれ）しそうに口元に手をあてる大天使。

そんな二人にレンは肩をすくめて返事した。

「そういえばエリエス、さっきの話に戻るけど」

「なに？」

「エリエスが地下施設で見つけた実験槽、何があったのさ。失われた技術？　ほとんど見る余裕なく脱出してきたって話だったけど」

「妨害されたわ」

　ソファーの肘掛けに頬杖をついて、重い溜息をつく少女。

「例の虚構精霊っていうヤツ？　私の前に出てきたのは聖地で見たのと同種の個体だった。あとは序列二位の王蛾とかいう薄気味悪い剣士」

「序列二位……」

　騎士王ゼルブライトの威光に隠れ、その存在がほとんど表に出てこない剣士だ。唯一、外部に公表されていたのも名前だけ。エリエスでさえ初めて見る男だったという。

「虚構精霊を従えた剣士だったわ。私もあの光の怪物の怖さは知ってるから、迂闊に攻めこむこともできないまま睨み合い。そうこうしてる間にコッチの地下施設も地盤の崩壊に巻きこまれて、大あわてで逃げだしたってわけ」

　全容が掴めていない序列二位の剣士、そして虚構精霊と戦ってまで実験槽を確かめるか。あるいはカナン巡礼聖教船の無事を優先させるか。

　既に虚構精霊を発見している以上、エリエスが後者を選択するのは妥当だろう。

「でも無事で良かったよ」

「ええ。釈然としないことは多々あるけど、一応の目的は果たしたと言えるわ」

　椅子の背によりかかるエリエス。

「虚構精霊は覇都の失われた技術だということが判明したし、王立七十二階位特務騎士団もあれだけの失態を招いたのだから当分は表に出てこれないはず。絶対的な支柱であったゼルブライトが抜けたのも大きいでしょうし。レンも対天使装甲の出所は気になってたんでしょ？　私は、碑文の三賢者っていうのを見てないから何も言えないけど」

「……そうだね」

　光の怪物の正体をはじめとした謎の解明を目的と捉えるならば、目的はおおむね達成した。いや当初目的以上のものを手に入れたと言っても過言ではないだろう。

　覇都の繁栄を裏から支える『碑文の三賢者』の存在。

　そして古代の都・神性都市シィエラミリスと、その地における古代召喚術の繁栄地。

　だが――

新しい知識は、レンにさらなる疑問をも植えつけた。

〝世界の何処とも知れない終焉から現れた何者かが、神性都市を襲撃した〟

光り輝く者たち。

神性都市を襲った謎の高位存在から逃れるため、人間は古代召喚術を放棄した。

古代召喚術の術者も研究者も次第に数を減らし、最後にはその存在を覚えている者さえ稀少となった。

……神性都市を襲った「光り輝く者たち」。

……碑文の三賢者が虚構精霊を創りだしてまで対抗しようとした相手、か。

「エリエスさ。前に言ってた精霊が怯えてるっていう現象、治った？」

「そこなのよ。私が釈然としないって言った理由」

エリエスの膝元に留まっている風の始原精霊。

彼女の椅子に後ろには水の始原精霊の姿もある。

「見てのとおりよ。覇都から帰ってきたいうのに、まだ精霊たちが消えようとしないの。虚構精霊を見たからかしら」

「それは確かに不思議ですね」

寝入るエリーゼのタオルケットをかけなおしながら。

「虚構精霊の完成体は私たちが消滅させました。試験体がまだ数体残っていたとしても、虚構精霊の脅威はかなり削減できたはずですが」

「ええ。時間が経てば、精霊の怯えも少しずつ解消されていくのかもしれないけど」

弱々しい溜息で返す聖女。

そんな彼女と、よりそう二体の精霊をぼんやりと眺めながら――

〝まだ何かあるんだろ？　あんたらが俺に隠してるだけなのか、あるいはあんたらさえも知らない世界の秘密が！〟

レンが思い浮かべたのは三賢者とのやりとりだ。

……精霊が、奴らの虚構精霊に怯えていたのは間違いない。

……だけどフィア先輩(せんぱい)たちが虚構精霊(エイドス)を倒しても、精霊の怯えはまだ消えてない。

考えられることは。

「この世界で精霊を脅(おびや)かしているものは、一つじゃないのかも」

「え？」

呆気(あっけ)にとられた面持(おもも)ちでエリエスが声を上げた。

「レン、どういうこと？」

「精霊の怯えには、虚構精霊(エイドス)なんかよりも大きな理由がある気がしてさ。でないと世界中の精霊がみんな覇都(はと)の虚構精霊(エイドス)に反応して怯えたってことになるだろ？　覇都周辺だけの精霊ならともかく、さすがにそれは考えにくいかなって」

「もっと大きな理由って、何があるの？」

「まだ見当もつかないよ。だけど虚構精霊(エイドス)の方がむしろ例外というか、小さい理由の方なのかもって気はしてる」

世界中の精霊を震えさせる「何か」が、まだ残っている気がしてならないのだ。

神性都市シィエラミリスの存在と、古代召喚術の繁栄。

それを衰退に追いこんだ「光り輝く者たち」。この存在が、三百年前の終焉戦争(しゅうえんせん)の相手だということも、おそらくは間違いではないのだろう。

……でもそれだけじゃない。

……世界中の精霊が怯えてる理由が、この情報だけじゃ説明つかないから。

まだ残っているのだ。

全(すべ)てを一つに結びつけるための、いまだ発見されざる知識(ミッシング・ピース)の欠片。

すなわち——

「全ての謎を解き明かすのが世界録(アンコール)というわけですね」

「たぶん、ね」

フィアの言葉(しゅこう)に首肯する。終焉戦争を鎮(しず)めた英勇(えいゆう)の手記(しゅき)。そこに何が記載されているのか。どんな真実が隠されているというのか。

「先輩？　次の目的地って」

「冥界(めいかい)。最後の法印所持者(ほういん)が待つ、広大なる地下世界ですわ」

現魔王。

先代魔王エリーゼから地位を継承した悪魔は、他ならぬエリーゼの実弟だという。

「ひとまず、このまま私たちも聖地まで同行させてもらいましょう。エリーゼが目を覚ますまでは身体を休め、その後に冥界の審門を目指すと」

「……うん。俺もそれでいいと思う」

大きく息を吸って、そして吐く。

座っていたソファーから弾みをつけて立ち上がり、レンは部屋の扉へと靴先を向けた。

「どちらへ？」

「ちょっと風に当たってくるよ。すぐ戻るから」

フィアとエリーゼの二人にそう残し、レンは部屋を後にした。

揺れる船の通路をこえて。

全装帆船の甲板へ――

2

赤茶色の大地がどこまでも続く荒野。

まばらに生えた褐色の木立以外に、視界に入ってくるものはない。大地を這う砂蛇も、それを狙う肉食の大型鳥も、まるで息を殺したように姿を潜めている。

――感じとっているのだ。

――この荒野に現れた絶対強者の存在を。

黒衣の剣士。

砂を巻き上げる旋風の中さえ平然と進んでいく、その闊歩。

「……」

思いだしたようにふり返る。

遙か地平の先に、ぼんやりと浮かびあがるのは巨大な城砦だった。

覇都エルメキア。

かつては、この都の王立七十二階位特務騎士団そのものが目的だった。

世界中から集結した強者が日々決闘に明け暮れる場。修羅の都だと聞いていた。

だが、そんな修羅たちの集う王立七十二階位特務騎士団にさえ、理想の強者は一人としていなかっ

た。

だからこそ世界録（アンコール）を求めた。

その目的は、英勇（えいゆう）エルラインが終焉戦争（しゅうえんせんそう）で戦った相手の正体を確かめること。そこに、覇道を窮（きわ）めるに相応（ふさわ）しい強敵が記されているかもしれないと考えたからだ。

――しかし、それももはやどうでもいい。

「世界録（アンコール）はくれてやる。手に入れるがいい」

この荒野にいない誰かに告（つ）げて、異端（いたん）の覇王は小さく嗤（わら）った。

既に王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）の処罰は、世界中に情報が行き渡っていることだろう。そしてこれが、世界にさらなる波紋（はもん）を生じる一石となる。

「さていつになるか。お前が、覇都に潜む真の虚構と出遭（であ）うのは」

押し殺した嗤い声。

あの旅団『再来の騎士（きし）』は、世界録（アンコール）をめぐる運命の渦中にある。望もうと望むまいと、世界があの偽英勇（えいゆう）を巻きこんでさらに大きな狂騒を生みだすことだろう。

どれほど先の未来だろうか。

旅団『再来の騎士』が、覇都に潜む真の虚構の存在を知る日が来るのは。

――偽英勇レン。

――剣聖シオン。

現代に生まれし英勇の再来たちが一堂（いちどう）に会（かい）する瞬間が、必ずまた訪れる。

決着の時。

来るべき未来の情景を思い浮かべながら。

「あの地へ向かうのも久しいな……」

地平の彼方（かなた）を見据（みす）え、ゼルブライトはそう口にした。

‖ ‖ ‖ ‖ ‖ ‖ ‖

覇都エルメキア領外。

ふり返ったすぐ先に覇都の市壁が見える草陰で――

「はぁ……はぁ……もう、シオンのバカ！　結局最後まで走りっぱなしじゃない」

「まったくだ。私も頭脳担当に集中したいのだが」

　大きく肩で息をする結界士（エンチャンター）の少女・夏蕾（カレイ）。

　その隣では、几帳面（きちょうめん）に額の汗をハンカチでぬぐう片眼鏡（モノクル）の法術士（アリア）の姿があった。

「あぁ……残念。結局あの英勇の再来とほとんど話せなかった。城が崩壊（ほうかい）するまでずっと序列三位（カサデイン）と戦ってただけなんて。しかも伝説の三大姫（さんだいひ）とも会えずじまいだし」

「シーオーン？」

「そう怒らないでってば夏蕾」

　怒れる少女に睨（にら）まれて、ごまかし笑いを浮かべたのは金髪の青年剣士だった。

「でも走って逃げるしかなかったじゃない。支城の崩壊が始まって、暢気（のんき）にしてたら王立七十二階位特務騎士団（エルメキア・ダスク）にも捕まっちゃいそうだったし。……でも残念だな。エリエスが地下室で会った序列二位の剣士。僕らも王蛾（オウガ）っていう名前だけしか知らなかったから、彼の素性（すじょう）も調べたかったんだけど」

「二兎（にと）を追う者は一兎（いっと）をも得ず。優先目的だった覇都エルメキアと碑文の賢者（けんじゃ）への牽制（けんせい）は完遂した。これで彼らも当面は動けない。今回はそれで満足すべきだろうな」

「あたしもガブリエの意見に賛成ね」

　紅白のローブをひるがえして、スキップ調で夏蕾（カレイ）が歩きだす。

「ほらシオンもガブリエも、さっさと帰るわよ」

「なんだ。夏蕾まだ元気そう」

「急いでるだけよ。天界の審門、他の人間には秘密だぞって女神様も言ってたんだから。人目につく前に撤収しなきゃまずいでしょうが」

　スタスタと進んでいく少女。

　その後ろを、シオンとガブリエの男性二人が並んでついていく。

　草原から樹林へ。

　目印となる大樹を迂回（うかい）して、その先へ。

「この先よね。ええと……っ……え……あ……？」

　弾んだ声の夏蕾。

　その彼女が突然に足を止め、目をみひらいた。

　女神レスフレーゼから特別に教えてもらった天界の審門。自分たち「精霊の調べ」を除いては誰も存

在を知らないはずだった。
　だが目の前にあるのは――

　無惨に破壊されて、瓦礫と化した天界の審門だった。

　その光景を前にして。
「……容易に破壊できるものではないのだがな」
　最初に言葉を発したのは法術士ガブリエだ。
「天界の審門は、天使たちにとっても特別な物だ。地上にある審門はいずれも七曜の天使によって加護を受けている。それをこうもあっさりと砕いたか」
「結界士の立場からすると、天使の隠蔽法術がこんな短期間で見破られたことが驚きよ」
　腰に手をあてて目を細める夏蕾。
「あたしたちがこの審門を使ってから丸一日も経ってない。なのに、こんな短期間で誰が見つけられるっていうの」
「夏蕾、お前ならどうだ？」
「まず場所を特定してなきゃ無理よ。誰がこんな場所を探りあてるっていうの」
　緊張を孕んだ目つきで審門を見下ろすガブリエと夏蕾。
　一方で。
　旅団を束ねる天才剣士は、今なお破壊痕を無言で見つめ続けていた。
「シオン？」
「……調べなくちゃいけないことがまた増えたかな」
　珍しくも渋面を作る金髪の青年。
「天使の隠蔽法術を見破ったうえに、この頑丈な審門を破壊。こんなことができる最有力候補が、まさに王立七十二階位特務騎士団だった。でも僕たちが覇都にいる間、彼らは覇都の守りに集中していた。こんな辺境に部隊を送る余裕はなかったはず」
　この審門破壊に覇都は関与していない。
　つまり、それ以外の何者かによる破壊行為だ。
「……誰の仕業？」
「すぐに思いつくのは一つしかない。沈黙機関だよ、夏蕾」

沈黙機関(ひきょうはいかい)——それは世界中の秘境を徘徊する正体不明の怪異だ。

最初の報告は、実に百年以上前に遡(さかのぼ)る。

前人未踏(みとう)であった秘境を探索(たんさく)した旅団が、その奥深くで見つけた古代遺跡(いせき)。それが既に跡形もなく破壊しつくされていたという報告に端を発する。

……当時は自然風化による崩壊(ほうかい)だと思われていた。

……だけどその後も、どうやっても説明できない謎の破壊が世界各地で発見された。

機関という名がつけられているものの、個人か集団か、あるいは未知の自然現象なのか。それすらわかっていない。

ただ一つ推測できることがあるとすれば、沈黙機関が秘境にある失われた技術(オーパーツ)や財宝、世界録(アンコール)を求めるものでなく、むしろそうした全(すべ)てを「消滅させる」ために存在していると、そう思われるということだ。

多くの秘境を破壊していることから、環境維持規定に重大な違反(いじ)。世界中の都市がその正体を突き止めようと莫大(ばくだい)な懸賞金をかけて、多くの旅団に働きかけている。

しかし——

「ちょっと待ってシオン、だって沈黙機関の正体は……」

「うん。十中八九、正体を隠した王立七十二階位特務騎士団(エルメキア・ダスク)だと思ってた。天界の審門を発見する方法も碑文の賢者(ひぶんけんじゃ)なら知っていておかしくないし、これだけ世界規模で秘境を破壊し続けることは覇都以外にできないからね」

「珍しくお前の勘(かん)が外れたな」

片眼鏡(モノクル)を押し上げながら、ガブリエ。

「まずは女神レスフレーゼに連絡か。向こうも当然に察知(さっち)はしているだろうが」

「……そうだね」

破壊された天界の審門。

その痛ましい惨劇(さんげき)の痕(あと)を悲しげに見下ろす金髪の剣士。

「虚構精霊(エイドス)が消えても精霊の怯(おび)えはまだ治(おさ)まらない。世界を包む暗雲も晴れる気配なし。やっぱり全(すべ)ての真実を明らかにする鍵は、世界録(アンコール)か」

「あたしたちも冥界(めいかい)に行くってわけ？」

「少し考えよう。実は沈黙機関の正体も一つだけ心当たりがある……本当は、外れてほしいからこそ王立七十二階位特務騎士団(エルメキア・ダスク)が沈黙機関であって欲しかった」

夕暮れ。

燃えるように赤く染まった天上をしばし見つめて。

「いつだってそうさ。悪い予感の方がよく当たるんだ」

剣聖シオン。

そのまなざしに深い憂慮の色を湛え、若き最高位剣士は赤く燃える空に背を向けた。

3

赤い海。

彼方に沈んでいく夕日に照らされて、甲板は燃えるような紅に染まっていた。

「……」

首から脇腹にかけて巻かれた包帯。

潮風が布の繊維をすり抜けて、傷口に沁みて痛みを呼び覚ます。

「キリシェ」

その名を呼んで、レンは船首の方へと進んでいった。

「船酔いはどう？」

「……頭がグルグルする……」

青ざめた顔で甲板の手すりによりかかるのは、銀髪をなびかせた少女だ。

「座った方がいいんじゃ」

「……そうする」

意外なほどに素直な返事。

手すりに背を預け、キリシェがその場に尻餅をついた。

「レン」

「ん？」

「今回はまた、いつも以上に傷だらけだな。フィアが驚いてたぞ」

服の隙間から覗く包帯を指さすキリシェ。

「……」

「……そんなに強かったのか？」

「強かったよ。たぶん、キリシェが見ても驚くと思う」

騎士Eゼルブライト。

碑文の三賢者をして、その生来の強さは剣帝エルラインに迫ると言わしめた。それを、キリシェがあの男を見ればどう映ったことだろう。

「……」

「悔しいか？」

「……どうだろ。戦ってる時は無我夢中でさ」

厳然たる実力の差は嫌でも感じた。だが悔しかったかというと、そんな感情が生まれる余地は皆無だったと言ってもいい。

「ずっと、どうすればこの差が埋められるのかなって考えてた」

キリシェから、フィアから、エリーゼから学んだ事。精霊に師事して教わった事。

……その期待に応えたくて。

……埋めがたき差を少しでも埋めたい。その一心だった。

「キリシェ」

「なんだ？」

「……俺、次は負けないから」

手すりを握る手に自然と力をこめて。

「また頑張るよ」

「それがお前の好いところだ」

船酔いで弱りきった様子の少女が、おかしそうに微笑んだ。

「お前はエルラインとは違う。少しずつ、お前に合った強さを身につければいい。何かに迷うようなことがあればわたしを頼れ。旅団の仲間なんだから。むしろどんどん聞いてもらって構わないぞ」

「じゃあ、何か船上でできる訓練とかってある？」

「もちろんある。そうだな、とはいえまずはその前に」

そう言って。

竜の少女は、甲板に仰向けに倒れこんだ。

「……抱っこして部屋に運んでくれ。船酔い、もう嫌だ……」

あとがき

本書を手にとっていただきありがとうございます、細音(ささね)です。

『世界の終わりの世界録(アンコール)4』、覇都(はと)争乱編いかがでしたでしょうか。

今回の秘境(テーマ)は「地図にない場所」。

数ある未知の領域の中でも、まだ秘境(ひきょう)とさえ認識されていない場所になります。

自分だけの地図を埋めていく冒険って、地図に明記された難所を踏破(とうは)するのとはまた違った緊張感と楽しさがあるのかなと。

そして偽英勇(レン)VS騎士王(ゼルブライト)。

決戦の果てに、偽英勇(レン)は真の強者を体感する——目指すべき現代の英雄たちと出会ったレンがこれからどんな道を歩んでいくのか。新たに始まる旅路を、今後とも見守っていただければ幸いです。

さて、ここで4巻の御礼を。

本の完成にご尽力くださった担当N様。同時進行の『プロジェクト・アンコール』(後述)など、多岐にわたって本当にありがとうございます。

エリエスの美麗なカバーイラストを描(えが)いてくださったふゆの春秋(はるあき)先生。ゼルブライトのキャラデザイン、魔獣デザイン、見ていてワクワクしました!

そして、この本を手にとってくださった全(すべ)ての方へ。

温かい応援いつもありがとうございます。おかげさまで、『プロジェクト・アンコール』という複数展開型の企画、始動決定です!

プロジェクトアンコール——

コミック版『世界の終わりの世界録(アンコール)』

月刊コミックアライブで連載決定。

一つ一つの作画が本当に綺麗(きれい)で、そこから描(えが)かれるキャラクターが愛らしいです。

連載情報は細音(ささね)のツイッター(https://twitter.com/sazanek)でもお知らせいたします!

コラボCD　楽曲制作:ドラゴンガーディアン様

2015年9月発売予定。

RPGメタルプロジェクト「ドラゴンガーディアン」様とのコラボレーションです。

『世界の終わりの世界録』1巻が楽曲に生まれ変わります。音楽アルバム1枚を全部使って、『世界録』1巻の物語をボーカル曲で再現してもらう贅沢な企画です。

ライトノベルではあまり例のないメディアミックスかなと。激しくも美しい楽曲として生まれ変わった『世界録』の世界をお楽しみ頂ければ!

ドラマCD

2015年10月発売予定。

『世界の終わりの世界録』1巻道中の時間軸にあたる、完全オリジナル脚本です。

レンと三大姫の仲良くコミカルな旅をメインにしつつ、小説1巻の本編の裏話でもある正史のエピソードを予定しています。(全力執筆中!)

レンやキリシェたちの「声」が聞こえる本当に貴重な機会なので、ご期待ください。

豪華声優陣の熱演も素晴らしいです!

最後に予告を。

『世界録』5巻は、ドラマCDと同時期の10月刊行を予定しています。

次の秘境は広大な地下世界「冥界」。現魔王をはじめ、個性豊かな五大災たちの熱烈な歓迎(?)が待ち受ける魔王宮だが、そこには招かれざる者の影が潜んでいて——

騎士王との決戦を経て、偽英勇の少年が一つの答えを見いだす冥界編。

冒険も物語の真骨頂も、ここからです。

小説本編、そしてメディアミックス企画。両方で盛り上げられるよう頑張りますので、これからも『世界録』を応援していただければ幸いです。

細音　啓

世界の終わりの世界録

プロジェクト・アンコール始動！

The Boot of "Project Encore"

いま、最も「王道」を行くファンタジーとして、ますます盛り上がりを見せる『世界録』に
緊急プロジェクトが始動。その名も『プロジェクト・アンコール』。今後の展開に要注目です！

●**コミック版**：月刊コミックアライブにて、連載決定！

●**コラボCD化**：メタル・プロジェクトDragon Guardianによる
「世界の終わりの世界録」イメージコラボCD、2015年9月発売予定！

●**ドラマCD化**：細音啓先生書き下ろし脚本によるドラマCD。2015年10月発売予定！
キャストなどは近日、MF文庫J編集部ブログなどで発表！

« Story »

伝説の英勇エルラインが遺した、世界の終焉と再来とを記した至宝「世界録」。その在り処を世界中の国や旅団が探し求める世界録大争奪時代――騎士志望の少年レンは、彼の英勇生き写しの容姿ながら剣才に恵まれず「偽英勇」とバカにされる日々を送っていた。そんな彼の前に現れた、封印より目覚めし伝説の竜姫キリシェ。レンをエルライン本人と勘違いし、外見だけだと失望したキリシェだったが、一方でレンの中に秘めた可能性を見出すことに。そして、かつて英勇と共に世界を救った大天使フィアや先代魔王エリーゼとの世界録をめぐる旅へと少年を誘う。「わたしと、行くか？」――これは、英雄たちが奏でる狂騒への序曲。今、偽英勇の少年と伝説が邂逅する！

「世界の終わりの世界録 1：再来の騎士」　著：細音啓　イラスト：ふゆの春秋
「世界の終わりの世界録 2：極光の竜帝」　著：細音啓　イラスト：ふゆの春秋
「世界の終わりの世界録 3：熾天の女神」　著：細音啓　イラスト：ふゆの春秋
「世界の終わりの世界録 4：異端の覇王」　著：細音啓　イラスト：ふゆの春秋

著者

細音啓（さざね・けい）

コミカライズ・ドラマCD化・イメージCD化

ということで、すごいドキドキしてます。

詳しくはあとがきで！

イラスト

ふゆの春秋（ふゆの・はるあき）

イラストレーター。ライトノベルをはじめ、多数の作品の挿絵を手がける。近作に『知らない映画のサントラを聴く』（新潮文庫nex）など。

カバー・口絵・本文イラスト／ふゆの春秋
装丁／阿閉高尚（草野剛デザイン事務所）

世界の終わりの世界録（アンコール）

4:異端の覇王

細音啓

MF文庫J

平成27年6月30日　発行

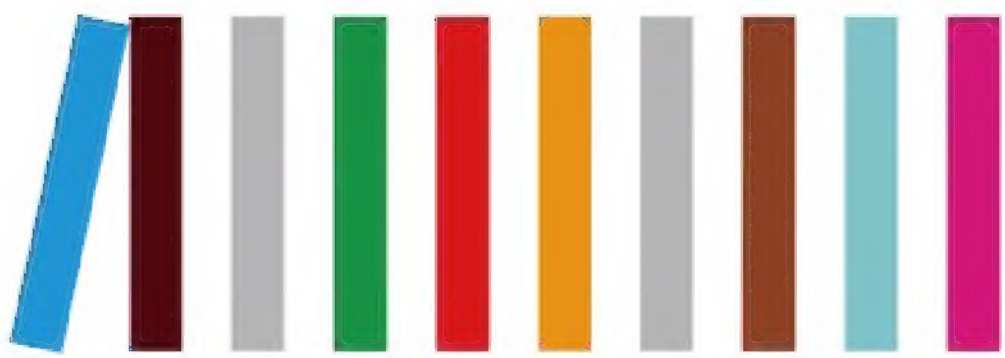
(C) Kei Sazane 2015

本電子書籍は下記にもとづいて制作しました

MF文庫J『世界の終わりの世界録 4:異端の覇王』
平成27年6月30日初版第一刷発行

発行者　三坂泰二
発　行　株式会社KADOKAWA
〒102-8177　東京都千代田区富士見2-13-3
0570-002-001（カスタマーサポートセンター）
年末年始を除く平日10:00～18:00まで

http://www.kadokawa.co.jp/



BOOK☆WALKER